

ぶどうの木

第 1 4 号

目 次

巻 頭 言	榎 本 利三郎	1
教会創立 40 周年特集		
八幡前田教会だより	(活 水 誌 抜 萃)	2
記 念 礼 拝 説 教	榎 本 利三郎	8
40 周年を記念して	大 口 和 子	20
40 周年記念の年末感謝会	伊 規 須 太 郎	22
私 の 出 エジプト記	佐 藤 シ ン ゲ	23
主 が 備 え ら れ た 道	東 俊 郎	25
教 団 離 脱 の 前 後 に つ い て	榎 本 利三郎	28
牧 師 館 訪 問 記 (4)	取 材 班	30
事 を 行 う エホバ	津 留 崎 浩 行	40
ひ き の ば し	首 藤 正	41
旅 行 記 特 集		
梅 雨 の 晴 れ 間 に	大 田 邦 子	43
エ ス テ ル 会 旅 行 に 参 加 し て	野 村 美 恵 子	48
エ ス テ ル 会 旅 行 記	木 田 百 代	50
エ ス テ ル 会 の 旅 行	伊 規 須 泰 子	54
青 海 島 , 秋 芳 洞 を 訪 ね て	大 田 邦 子	56
「 か い わ 」 他	伊 規 須 太 郎	61
今 が 青 春	池 田 操	63
編 み な が ら 想 う 小 さ な こ と	野 口 米 子	65
詩 「 赦 し て 下 さ い 」 他	野 口 米 子	66
我 、 汝 ら を 選 べ り	井 伊 文 子	68
み み ず の た わ 言	Y ・ U	77
さ ん び	伊 規 須 太 郎	79
近 況 だ よ り	古 野 と み 子	85
紫 陽 花 (あ じ さ い)	野 口 米 子	87
悪 夢	S ・ N ・ 生	90
詩 二 題	伊 規 須 泰 子	93
恵 み を お ぼ え て	大 口 和 子	94
弟 の 証 し	林 正 二 郎	95
救 に 至 る 道	野 村 美 恵 子	98
みよ 今 は 恵 み の 時	上 島 南 明	100

八 幡 前 田 教 会
大 濠 公 園 教 会

その時サムエルは一つの石をとってミヅパとエシヤナの間にあえ、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」と言つて、その名をエベネゼルと名づけた。

サムエル上 七―十二

イスラエルがバアルとアシタロテを捨て去り、主に心を向けて立ちかえた時、主がペリシテびとから救ひ給いました。福岡大濠公園教会を五十年、八幡前田教会を四十年、豊かな祝福の裡に主が守り、助けて下さいました。「ぶどうの木」もエベネゼルの特集をと願つておりましたが、資料が揃わないまま、今日に至りました。

特集号のために、ご多用中を原稿を下さった方々に申訳ありません。深くお詫び申し上げます。この「ぶどうの木14号」を合併号とさせて頂きます。もう今年（昭和五十九年）は八幡前田教会も創立四五五年になります。

主が両教会に与えて下さった測り知る事のできない恩寵を感謝すると共に、教会の頭であられる主に心を尽してお従ひして参りましょう。

教会創立四〇周年特集

八幡前田教会だより

「活水」一三〇号（昭28）より

本教会は誕生以来日浅いのでありますが、その創立の当初よりして豊かな祝福の裏に歩んで参りました。かの惨胆たる戦災より起ち上り、九州にて最初に会堂を新築し、しかもこの世的なる一切の方法に由らず、恵みに感じて献げられた信徒の心よりの献物のみによってこれを与えられたことは、真に感謝の他ありません。爾来五か年有余の旅路をたゞ御言葉のみに堅く立ち、様々の苦難も少からずありましたが、凡てを信仰によりて戦い勝ち、現実には活ける神を体験してまいりました。その間本教会を通して多くの靈魂が導かれ、多くの信徒をして主と交わらしめ、またその内数名の兄弟姉妹は天國に召されました。現在救われる靈を漸次増し加えられ、礼拝出席者七、八〇名を数えています。また集会は礼拝・伝道会・祈祷会のほか、毎朝六時より早天祈祷会も持っております。

「我汝の艱難と貧窮とを知る、然れど汝は富めるものなり……汝死に至る迄忠実なれ、然らば我汝に生命の冠を与へん」

（黙二の九）たとい会堂は小さくとも、信者は少なくとも、見ゆる処は如何にあるとも、私共の喜悅はまことに大いなるものがあります。煤煙立ち込むこの八幡市の中心において苦しみ泣く靈の為に私共の祈る祈りに何卒ご加禱あらんことを。さて昨一九五一年献堂満四周年を迎えて記念聖会を持ちましたが、本年満五周年に当たり、もう一度主は愛する藤村壮七先生を送って縦横に用い栄光を顕わし給いました。以下に記念聖会の模様を簡単に記します。

一〇月二二日午後七時（聖別会）会衆四〇名（ピリピ一の六〜九）我は汝等の裏に善き業を始め給ひし者のキリスト・イエスの日迄、之を全ふし給ふべき事を確信す。

一〇月二三日午前一〇時（聖別会）会衆約二〇名（ペテロ前一の三〜五）汝等の為に天に蓄へある朽ちず汚れず萎まざる嗣業を継がしめ給へり。

一〇月二三日午後七時（聖別会）会衆約五五名（ピリピ一の二〜二二）我にとりて生くるはキリストなり、死ぬるも亦益なり。

一〇月二四日午前一〇時（聖別会）集まる者約三〇名、（エペソ一章並びに三章）この奥義は黙示にて我に示されたり。

一〇月二四日午後七時（聖別会）会する者約五〇名、（ヨ

ハネ第一、一章)もし神の光のうちに在す如く光のうを歩まば我等互に交際を得、また其子イエスの血すべての罪より我等を潔む。

一〇月二五日午前一〇時(聖別会)会衆約三五名、(ペテロ後、一章・四章)我等に尊き大なる約束を賜へり、之は汝等が世にある慾の滅亡をのがれ神の性質に与るものならん為なり。

一〇月二五日午後七時(聖別会)会衆約五〇名、(イザヤ三三の二一〜二四)十字架による全き勝利の予言。

一〇月二六日聖日午前一〇時禮拜、会するもの約六〇名、(ヨハネ二〇章)平安汝等に在れ父の我を遣し給へる如く我も亦汝等を遣す。

一〇月二六日午後二時(神癒聖別会)会衆約三〇名、(ヤコブ五章・イザヤ五三章)信仰の祈りは病めるものを救はん主かれを起し給はん。

一〇月二六日午後七時(感謝お証し会)約四〇名。

大略以上のとおりでありましたが、兼ねてより切なる祈を積み、この聖会を俟ち望んでいた私達に対し、主はその第一夜に約し給える如く、確かに豊かな恵を注いで一つ一つの問題を解決し往くべき道を示して下さいました。「平安汝等に

あれ」腕いの全きを示し給いし主は「我も亦汝等を遣す」と仰せられました。此処において私達はもう一度身分を明らかにせられました。私共の状態は現在は斯くあるとも、ただ主の腕いの全きが故に、既に神の子であり、一人々に尊い使命を与えて父の許より地上に遣わされている。この神の子の自覚、この使命の自覚を御霊により確信を与えて頂いたことは兄弟姉妹達の齊しく感謝せるところです。以下に恵まれた兄弟姉妹達のお証しを簡単に記して筆を擱きます。

(A 兄) 献身について思い煩っていたがヨハネ二〇章の御言葉により使命の自覚をはっきりさせられて解決。もう一度謙遜に主の御手の下に従わん。直接伝道に召し給うならば必ず導きを与えて下さることを信ず。

(B 姉) 環境に支配され易く、何か他に幸福を求め得るのではないかと思っていたが、御言葉の他に何ものも無いことを悟り感謝す。今後詩篇一篇にある如く「日も夜も」これを感じる生涯を送らん。

(C 姉) 信者の家庭に生れて幼少より聖書知識を得、また宗教的環境に育つて来た為に新たな感激が無かったが、今回はずきりと御霊による喜びを経験することができた。

(D 姉) (ピリピ一の九)「我は祈る、汝等の愛、弥が

上にも増し加はらん事を」この御霊の絶えざる祈により私達が支えられ、現状を見る時悲観的であり、また祈るべきことを知らざる我々がこの故に育まれて往くことを知って感謝す。

(E兄) 主の十字架の御愛、まことに測り知るべからざる尊いことをもう一度教えられた。生涯心を尽し力を尽して主に従わんのみ。

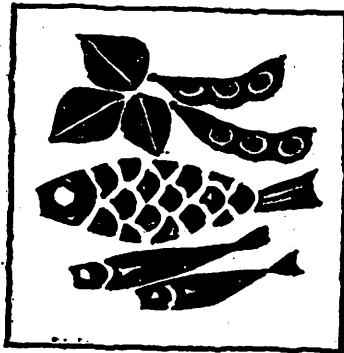
(F兄) 神学に頭を突っ込み喜びを失ってしまったものであるが、説教中にあつた「アマゾン河口の漂流船」の譬により、我等は既に豊かな聖霊の流の中に置かれていることを悟つた時、たゞ十字架を仰いで感謝する他なかつた。

(G姉) 神癒の信仰について従来完全に信するにいたらなかつたが、今回信じて祈る時に既にその病は癒されていることを全く信することができた。

(H兄) 聖霊のバプテスマについて兄弟達とも祈り求めていたが、たゞ無暗に求むるところに既に己が働いていることを悟つた。神の子の自覚・使命の自覚に立つ時、既に能力を与えられていることを確信した。

(I兄) 従わんとしてもその力なく苦しんでいたが「既に力を与へて神の子となせり」とある如く、我等が信する時に既に力は与えられていることを知り、真に感謝した。

(J姉) 最近教会に出席するようになり、また今回の聖会には殆んど出席しなかつたが、皆様の感謝に溢れている姿を見て、まことに惜しいことをしたと思う。今後集会に励み大いに恵まれない。



生涯を導いた聖言

「活水」一六七号

伊規須 泰 子

「肉によりて弱くなれる律法の成し能はぬ所を神は成し給へり」(ロマ書八章三節)

教会の門を叩いてから、夢中で歩んでいるうちに、四ヶ年も過ぎてしまいました。

まだ、神様の御愛が少しずつわかりだし、このお方に従って生涯を歩みたいと願いだした頃、内面から大きな苦しみがやってきました。

それは、神様に従いたいと熱望しながら、従い得ない自分の弱さ、愚かさ、そして汚なさを、痛く知ったからでした。聖書を読めば律法が恐ろしく、正義(ただし)さ、潔さにふれば、いよいよ自分のみにくさを知らされ、従うことさえこわくなって、全く絶望してしまいました。何とかしてと思っても、自分の力ではどうしようもなく、ただ焦り苦しんでいた頃、与えられた聖言がこれでした。

はじめはよくわかりませんでした、何か捉えられ、幾度も幾度も繰り返し読んでいるうちに、従えないと失望してい

ても、すでに主が十字架にかかれ、すべての罪を許し、けがれを潔めてくださり、その上、私が弱くてなし得ないとこるを、神様がなしてくださるということをはっきり知りました。なんとこの福音だろうか、この聖言が深く心に刻み込まれました。

このとき、肩にかかっていた「従わねば……」という肉の努力が全く落ちてしまい、気が楽になって、飛び上って喜びました。

自分の状態をみては、つまづこうとするとき、神様の支えの手からもれることのできない自分を知っては、感謝するばかりです。

今まで、すぐ肉の姿に失望してしまいやすかった私が、従うことに苦しんでいた私がこの聖言に捉えられて以来、喜んで従い、恵みに感じて、すべてを主に捧げる毎日となりました。

生涯を導いた聖言

「活水」一七五号

河 本 小太郎

「我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我にをり、
我また彼にをらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離る
れば、何事もなし能はず」(ヨハネ伝一五の五)

私の郷里広島は、真宗の盛な所で、先祖から真宗の熱心な
信者でした。従って、私も真宗でしたが、末子でありますし、
基督教はわからないながら、悪い宗教ではないと思っていま
した。

結婚して信者の妻を迎え、時々集会へ招かれましたが、酒
類の特約大販売及び食料品の販売業をしておりました、その
ため毎晩のような宴会で飲む事が多く、身体の為にも悪いと
知りながら、止める事もできずに日を過ごしておりました。

その頃妻の里で母と弟が病床に臥しておりましたが、神癒
のお話をきいて祈っていただき、すっかり癒されました。そ
れで神様の全能の御力を信ずるようになり、製鉄所の社宅の
城様宅の集会に出ておられます間に、「神を畏れそのいましめ
を守れ、是は凡ての人の本分なり」と、聖言により神様の御

愛がだんだんはつきりいたしましたして、昭和七年に神様に従う
決心をしてバプテスマを受けました。

その後、新年聖会に、三日間泊り込みで集会へ出ておりま
した。その時与えられた聖言が、このヨハネ伝一五章一節か
ら五節でした。

早速、日曜日は休業して日曜礼拝を守り、夜は伝道集会を
していただくようになりました。また、酒を飲む事を止めて
おりましたが、自分で飲まないでも、売る事も善くないと教
えられ、売上の大部分を占めていた酒類一切の販売を全部止
めて、漬物佃煮製造販売を専業として今日までまいりました。
その間たえず主に従った時、凡てを益と変えて下さいまし
た。主の豊かな御恩寵のうちに、家族一同信仰に依り、平安
と感謝の日々を送らしていただいております。

生涯を導いた聖言

「活水」一七六号

高木敏夫

「それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり」

(ヨハネ伝三の一六)

この聖言は、たびたび集会で耳にし、又キリスト教のパンフレットなどで読む言葉であります。私にはなかなか実感となりませんでした。

ところが今年の新年聖会に出ている間に、ご聖霊はこの聖言を私の霊に彫り刻み給いました。そして、今は毎日の生活の戦いの中にある時も、重荷を負って主の聖前にひざまづく時も、常にこの聖言が神様の御愛の裡にくつろがせて下さいます。

霊がうなだれて、喜びも感謝も消えてただ苦しみと困難ばかりが大きく見えて、祈ろうとする力さえも無くなったその時にも、ただじっと坐ってこの聖言を繰り返し繰り返し心の中でかみしめるようにしているうちに、神様の御愛に冷え切った、うなだれてしまった霊も力を得て「己の御子を惜しまずして我らすべてのために付し給ひし者は、なか之にそへ

て万物を我らに賜はざらんや」と信仰を与えられて、まず祈り出します。そして祈はすべての疑惑に勝ち、神の愛に包まれて、今迄途方に暮れていた困難も消えて、喜びと感謝に溢れます。

この偉大な万物を創造し、今なおこれらを支配し給う神様が、この塵灰にも等しい、卑しい者に目を止めて下さったばかりでなく、多くの人々の中から愛をもって神様の子となすために御選び下さった事を知れば知る程、そのご愛の深さ、高さ、広さをはかり知ることができません。「人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや」とダビデと共にただただ讚美するだけです。

私ほんとに幸いな生涯に入れられました。「うべわれよき副業を得たるかな」と毎日工場の往復の途中、救われた身の幸いを思いながら、人の通りも忘れて涙を流して感謝いたしております。



創立四十周年記念礼拝説教

榎 本 利三郎

イザヤ書第五章一節

「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。

あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ。」

これは神様が焼けるような思いをもってイスラエルの民に對して呼びかけていらつしやる所です。その中に「義を追い求め、主を尋ね求める者よ」とあります。この世の栄達を願ひ、或はこの世の物質を求める人は別ですが、神様を慕ひ求める者に対して、今日呼び掛けて下さるのです。中国の古い諺に「温故知新」と言うものがあります。分かり易く言うると、古い事を尋ねて新しい事を知るといふ意味ですね。神様はイスラエルの民に対して、絶えず初めの事を忘れぬように求めていらつしやるのです。

創世記や出エジプト記をお読みになると分かりますが、イスラエルの民がエジプトを出る時、エジプト中のすべての初子を一晚の中にみな打ち殺し給いました。しかしイスラエルの民は神様のご命令に従ひ鴨居と柱に血を塗っておりました

ので、その家には災が及びませんでした。こうしてその夜、四三〇年の奴隷の生涯を離れ、自由な、乳と蜜との流れるカナンの地へ向つて出発する事ができました。それはイスラエルの民が特別良かったからでも、行いができたからでもありません。又、神様の為に何か働いたからでもありませんでした。むしろ弱い、力の無い民でした。力あるパロの下であがきもがき苦しみ、希望を持つ事もできぬ状態でした。その中からたゞ神様の愛の故に、エジプト人を犠牲にして救つて下さいました。ですからその事を過越の祭として永遠に記念するようモーセを通して警告を与え給いました。これがイスラエルの民の切り出された岩であり掘り出された穴であつたと思ひます。

ところがイスラエルの歴史をお読みになると分かりますように、神様のいましめにも拘らず、いつとはなしに苦しみの中から救われた事を忘れてしまい、カナンの地に入つて周囲の国々の神々を拜むようになりました。こうして力ある手をもつてエジプトから救ひ出して下さつた神様を心の中に離れてしまいました。その為に神様は立ち帰るようにと度々予言者を送り、又いろいろな出来事を通して警告を与え給いましたが、イスラエルの民は心を頑なにしておかえりませんでした。

そこで神様は遂にバビロンを起しアツスリヤを送ってイスラエルを壊滅させ、その悩みの中でもう一度かえるように呼び掛けていらつしやる。それがこのイザヤ書なのです。

この地に、この福音の門戸が開かれ、教会が与えられ四〇年もたつて参りますと、恵まれて来れば来るほど、初めどういふ所で神様が私共を顧みて下さつたか、もう一度ここで過越の祭をする必要があるのではないでしょうか。そしてただ神様の恵みによつて今日ここにある事をしつかり心に留め、恵みに感じ、更にここから新しい出発をさせて頂きたいと願うのです。

「……あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴……」とあります。昨年アメリカに参りまして、ニューヨークとワシントンで美術館を見ました。色々と他の建物を見る事もありましようが、それよりも又と見る事のできない世界的文化遺産を見たいと思つたのです。すばらしい彫刻が広い所にずっと並んでいて、一日中見ても飽きない、一週間ぐらいここに居たいなあと思うのですが、何せ先立つものが底をつくので限られた時間で見て心残りです。来て来ました。そのすばらしい彫刻も元をたゞせばイタリアの山の中に埋もれていた大理石なのです。それが掘り起され芸術家の

手によつてすばらしい芸術品に作られ、何千年か後の今日、アメリカの文化の先端を行くワシントンの美術館で光り輝いている訳です。元をたゞせば影も形もない一塊の大理石に過ぎなかつたに違いありません。他の大理石は道路の敷石にされてしまつたかも知れませんが。この石も何も変らなかつたでしょう。それがたゞ彫刻家の手によつて立派に仕上げられたが故に美術品として人々から眺められる事ができたのです。

私共も決して初めから今日のように心に平安を持ち喜びをもつて生活できたではありませんでした。先日もある方々が来られた時「教会の方はみな良い顔をしている。きれいな顔をしている」「あれはお客さんの前だから作り顔をしたんだらう」という話が出ました。もう一人の方が「冗談じゃない。作り顔であんなきれいな顔ができるものか……」と言われました。私共は毎週こうしてお目にかかつてるので、どれだけきれいになつたか分かりませんが、よその方から見ると他に見られない何かがあるに違いないと思います。心の中に本当の平安があるから表情まで変つて来たのではないでしょう。初めからそんな表情で穏やかな生活をしていた訳ではないでしょう。私自身もそうでした。心の中に怒りがあり貪りがあり穏やかにものを言う事もできません。心の中に平安

が無いのでトゲトゲしてしまいます。ものを言わぬ中に顔にトゲトゲしたものが出てしまいます。凄い顔をしていました。決して現在のようではありません。

そんな私がイエス様のお救いに与かって、私のような人間を捨ててもなさらず咎めもなさらないので、私の為にご自分の一人子イエス様を十字架にかけて、私の罪を許して下さい事が分かりました。神様がそんなに私を愛して下さいと知った時、私の心の中に平安が来しました。まだイエス様の事も分らなかつた時ですが平安になりました。心に平安ができるのもう何も要らないのです。

今朝早く種子ヶ島の大田さんからお祝いの電話を頂きました。「事業をしていると色々と問題があります。戦もありました。時には夜も眠られぬ思いをする事が続きます。そんな時、先生の礼拝説教のテープを聞き、み言葉によって強められ慰められています。今朝も『……四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行詰まらない……』との力強いお言葉を与えられて、本当に平安になって、眠れないと思っていた夜に安眠できるようになりました。まことに申訳ない事です。が睡眠剤の代りにテープを聞いています」と言われました。心に平安が無かつたら寝る事もできません、生きる事もでき

ません。望をもって困難に立ち向う力も抜けてしまいます。しかしイエス様に信頼する時、一番土台となる心の平安が先ず与えられます。

この四〇年間は日本の国が一八〇度方向転換するような動乱の中でした。私がクリスチャンなるが故に決して特別扱いされた訳ではありません。もし特別扱いされたとするなら戦時中に敵性宗教と言われ、不良分子と言われ、あと一週間終戦が遅れていたらスパイ嫌疑で引張られる事になっていたのがそうでしょう。良い意味の特別扱いは何もありません。遅配・欠配四〇日の時は同じ様に配給がありません。そういう中を通りましたが、一人子を与えて愛して下さいる神様だけが望でありたのみであり力でありました。真心をもって信頼し命をかけて信頼すると、その方が信頼した通り真実をもって支えて下さいました。これが私の七〇年の生涯の原動力となりました。

もう一度イザヤ書五一章一節

「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ」

原点に立ち返るといふ事がよく言われます。出発点に戻り

なさいと言う事です。そこからもう一度方向をはっきりして出発すると間違いが無い。出発点に戻ってみると、あそこで間違えたという事がよく分ります。いつかニューヨークで和義（次男）たちと一緒に町に買物に出掛けたところ、彼らはさっさと行ってしまい私たちは交通信号に引掛かって分らなくなってしまうました。困ったなと思いましたが暫く行つてからもう一度元に戻つてみると、あ、あそこから間違つたと分りました。そこを曲るとすぐでした。それと同様に、私共の信仰の出发点はどこにあるか、私共の掘り出された穴を顧みて見たいと思います。

マタイによる福音書第一六章一三節から

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、『人々は人の子をだれと言っているか』。彼らは言った、『ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言ひ、また、エレミヤあるいは預言者のひとりだ、と言っている者もあります』。そこでイエスは彼らに言われた、『それではあなたがたはわたしをだれと言うか』。シモン・ペテロが答えて言った、『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。するとイエスは彼にむかつて言われた、『バルヨナ・シモン、

あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉（よみ）の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐ事は天でもつながら、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。そのときイエスは、自分がキリストである事をだれにも言うてはいけなさと弟子たちを戒められた」

この一六節に「シモン・ペテロが答えて言った、あなたこそ生ける神の子キリストです」とあります。これは有名なペテロの信仰告白と言われているところです。イエス様がピリポ・カイザリヤの地方を廻つて居られる時、「人々は私の事を何と言っているか」と弟子たちに尋ねられました。彼らは聞いてきた事を話します、「……バプテスマのヨハネだと……エリヤだと、エレミヤだと……他の預言者の一人だと言っています」。イエス様は「では、あなたがたはわたしを誰と言うのか」と言われました。他人の言う事を聞くのは楽しいが「あなたは……」と言われると中々発言しない人が多い。このあとで感謝会をして「証しをして下さい」と申し上げて

も皆さんは中々おっしゃらない。それなら話さない人かと思うと、友達とはペチャペチャとよく話される。友達にさえずらなまして神様の前に何でも話したらよさそうに思うのですが、中々話されない。それは「あの人がこんなに言ったなどと思われたら困る」などの思いが先立ち口が開かなくなってしまうでしょう。しかしペテロ達のように「……あなたはどうか……」と言われたら皆さんは何と答えられるでしょうか。口だけなら何とでも言ってしまう事ができるかも知れませんが、この方は口と心とを一緒に見て居られるのですから下手な事は言えません。弟子達も良い加減な事は言えなくなつたに違いありません。しかしここにペテロは、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と答えたのです。イエス様を預言者として或は聖人として迎える人は沢山あります。孔子や孟子と同じ所において偉い人、立派な人ぐらゐに思っている方が随分沢山あります。私もかつてはそう思っていました。自分の力で守ろうとし、修養して身につけようという気持でしたが、それは大きな間違いでした。それは修養であつて信仰ではないのです。「守つて行なえ」と言つても行えないのが私共です。その事を教える為に旧約聖書で律法が与えられました。「あなたがたがこの律法を守つて行

えば幸福になる」と神様がおっしゃるので「あゝ良い事を聞いた、これを守つて行いたいものだ」と思うけれども、実際問題として守つて行ふ事はできません、力がありません。

先日も或方が「先生、私はとんでもない間違いをしていました……」と言われますので私も申し上げました、「そうです、あなたは大きな間違いをしていましたね。(その方は二〇年ぐらい信仰しているのです)私も分つていました。何べんも間違っているんですよと申し上げるんだけど、あなたが聞かれない。集会の度に、これが信仰ですよと話して来たのは、あなたは間違つていますよと言う事です。あなたが自分の事として聞かれない、自分が正しいと思つているから間違つていても間違つていると感じないのでしょう」。「そうです。私は前に行つた教会で、神様はこういう方、人間はこうでと教理を教えられました。まだ信仰がそこまで行かないのに教理を知っているものだから、クリスチャンとはこうあるべきもの、愛に満たされ、人の為にもこう奉仕をして、献金して、働いて……とそうなるうと思つて一生懸命やるがなれない。それで私は駄目だとため息ばかりついていました。私はクリスチャンらしくならねばと、らしくない人間がらしくなるうとするものだから苦しんだのです」。皆さんの中にこう

いう方がありはしませんか。神様は決して「らしくしろ」とおっしゃっていないのです。

神様は私共に、そうしようと思ってもできない事を知らせる為に「かくかくせよ」と教えて居られるのです。正直に「私はできません」と早く手を上げれば、神様が「だから私を支えるのだ、心配するな」とおっしゃって下さるのです。ところが未だ「自分で何とかします。します……」と一生懸命あせつてもがいているので、神様は暫く手を拱いて待つて居られるのです。私はその方に申上げました。「あなたも長い間、律法の下敷きになって、あれが出来ないこれが出来ない」とため息ばかりついて居られた。そういう自分である事を認めて、神様の前に早く降参すればよいのです。『私の力では本当にどうにもなりません』と、すると『あなたが出来ないから、私がこの通り十字架にかかり、あなたの罪を一切あがなったのだ、もう心配しなくてよろしい』とおっしゃるのです。そんなに愛して下さる神様の御愛の中にコッポリと落込んでみると、いつの間にか、知らないでいる間に歩ませて下さるのです。今まで自分で歩もうとして転んでばかりいた者が、『もう私では歩けません、手を動かして下さい、足を動かして下さい、口を動かして下さい、私はもう何も出来ま

せん』と、依り縋っていると、何時の間にか、喜んでいる間に、次第に歩けるようになる。かつて一生懸命やって守れなかったお言葉をスツスツと守っている事に気がつくようになります、だから福音なのですよ』と。「私もやっと分かりました。こんなに遅くて恥ずかしいようで……」「いや、あなたは感謝です。キリスト教は堅苦しい窮屈なものと思って一生を過ごしてしまおう方が随分沢山あります。」と申しました。昨日手紙を貰いましたら、「愛によって働く信仰のみ益ありとは何と尊い救でしょうか、こんな嬉しい事はありません」とありました。

私共がイエス様を救主と信する時、すべての中からあがない、どんな中からでも救って下さる。今どんな状態でも、今迄どんな生涯であっても問題ではありません。今あなたが神様の前に裸になり、正直にへりくだりさえすれば、「だから私があなたに代って十字架にかかり、この通りあがないをなし遂げたのだ。心配しなくてよろしい」とおっしゃるのです。有難うございますと感謝している間に、新しい永遠の命を与えて歩ませて下さるのです。「あなたこそ生ける神の子キリスト」のキリストとは救い主という意味です。イエス様は生ける神の子、万物を支配して居られる神様のお一人子でいら

つしやる、決してお祠（ほくら）の中に閉ぢ込められる方ではありません、教会の会堂の中に納まっている方でもありません。「二人または三人が、私の名によって集まっている所には、私もその中にいるのである」とおっしゃる方で、私共がイエス・キリストの名によって集まる所には主もそこに臨在して下さる。しかもその主は今も生きていらつしやるのです。

ある方は「そんな事を言っても、イエス様は一九〇〇余年前にお生れになり、十字架にかゝって死んでしまった。そんな古いものを信じて……。ミイラを博物館から引張って来る訳ではないでしょう」と言われます。しかしイエス様は神の子です。朽ちてしまうような方ではない、甦って生きていらつしやる。今、私共の目に見る事はできないが、お言葉に信頼するならその通りに真実をもって答えて下さるのです。その主が今も皆さんを愛して下さっているなら、もう言うこととはないでしょう。そんなお方が一緒に居て下さるのに何が淋しいのでしょうか。もし淋しいならば、その方を信頼なさらないからです。その方を手で触るように信頼していらつしやるならば、少しも心配はありません。

私が子供を育てる時の事です。上の二人は年子でしたから

下の子を家内が休ませ、上の子は私の横に寝かせておりました。夜中にムズムズ動く時、子供の手を私の懐に入れて胸に触らせておく、すると母親の肌に触ったような気持になるのでしょうか、おとなしくなつて又寝てしまふ。それをしてやらぬと不安であがいて泣いて目が覚めてしまふ。肌に触れそばに居てくれると感じれば安心して寝てしまふ。それが父親であるか母親であるか分らなくても子供はこれで安心する。私共がそこまでイエス様に信頼して、たといこの目で見える事はできず、この手で触る事はできなくてもイエス様は確かに支えて下さっていると、お言葉に信頼している時恐れがありません。こうなつたらどんな所へ転がされても不安がありません。

「あなたこそ、生ける神の子キリスト……」私共の信ずるイエス様は今も生きていらつしやる。冗談半分で話しても皆イエス様には聞えます。ヨハネによる福音書の終りの方に、甦られたイエス様が弟子たちに現れ給うた記事があります。「イエス様は十字架にかかつて亡くなつてしまつた、もうだめだ」とユダヤ人の迫害を恐れ戸を閉じて、すっかり失望していた中に、イエス様が立たれ、「安心なさい」と手とわきをお示しになりました。弟子達はそれを見て大変喜びまし

た。丁度その時、居合わせなかつたトマスが帰つて来て、「私達はイエス様にお目にかかつた」と同僚の言うのを聞く、と、「冗談じゃない、イエス様がもし甦つたのなら、十字架の釘あとを見て、わきの槍のあとに触つて見なければ、決して信じない」と言いました。ところがそれから八日後、またイエス様が現れ、トマスに「お前の手を私の懐に入れて槍の跡に触つてごらん。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言われました。トマスは「おーわが主よ、わが神よ……」と決して触ろうとしませんでした。八日前のあの時、まさかイエス様が聞いて居られるとは思つていなかったのです。たゞ友達に「……そんなこと……触らなきや……」と言つたつもりが、実はイエス様の目の前でしゃべつていたのです。そのように主は今も甦つて生きていらつしやるのですから、口で言う事と實際する事が違ふのも、ちゃんと見ていらつしやる。そういう生ける主がここに居られるという事、これは私共にとつて大きな慰めと喜びです。

本当の気持というものは中々口で言えません。これから感謝会でお証して頂きますが、嬉しくて感謝してと思つても、言葉が足りない、表現ができません。しかし言葉は不十分でも、たとい一言であつても、イエス様は私共の思いまで悉く

知つて下さるのです。だから慰められるのです。お祈りは手で、兎の糞のようにポツリポツリしかできなくても、神様は、たて板に水を流すようにスーッと祈る人と同じように聞いて下さるし、分つて下さる。だから私共は心強いのです。

主は今も生きていらつしやる。しかも真心をもつて信頼するなら、その全能の力でもつて私共を支えて下さる。又、金もわがもの銀もわがもの、宇宙とその中に満ちるものとは皆わたしのものとおつしやる主が、私共の乏しきを補つて下さるのだつたら、状態がどんなであつても問題はありませぬ。ですから、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と言う信仰の上に「私の教会を建てよう」とおつしやるのです。

「……バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは血肉ではなく、天にいますわたしの父である」。イエス様が生ける神の子キリスト、救い主であるという事は、人間がどんなに知恵をしぼつても信じられるものではありません。神様が私共の心に示して下さらなければ信ずる事はできません。その代り主が心を開いて下さる時、どんなに頭で信じられなくても、いつの間にか心の中にコツポリと信じさせて下さるのです。三段論法では信じられません。この世の中の事は大抵理論づくめで解決しますが、

イエスを神の子と信ずる事は理屈ではできません。むしろ人間の頭では馬鹿げた事と思われれます。しかしそこに神様の救いがあるのです。

この世の中の救いは「ああ有難や有難や」と言っていて信ずるものかも知れませんが、イエス様の救いはそうではありません。イエス様が十字架にかけられる時どうでしたか、死刑執行官である百人の隊長は、「彼を殺してしまえ」と十字架につけましたが、イエス様が十字架の上で「父よ彼らを許し給え、彼らはその為す所を知らざればなり」と祈られ、最後に「私の霊を御手に委ねます」と言っていて息を引取られた時、胸を打って、「この方はまことに神の子であった。私は正しい方を殺してしまつて申し訳ありません」と、真先に悔い改めたのです。私もかつてはそうでした。「イエス様を信じただけで救われるなんて……。それ位の事で救われるなら誰も苦勞はせぬわ……。十字架なんか何か……。」と蹴飛ばしてしまいました。しかしその私が、「ああ申し訳ありませんでした」と悔い改めたのです。本当に神様らしい救いです。人間の救いなら心構えが良く、何か良い行いができて、クリスチャンらしくなつて、だんだん神様に近づく……。と考えるかも知れませんが。しかし神様はそうではなくて、「お前は駄目な奴だ。罪人

のかしらだぞ！」「はい、その通りでございます」その時スツと救つて下さるのです。

ところが人間は妙なもので、少しでも高い所が好きです。平社員より主任がいい、主任よりも係長、係長より課長、課長より部長、部長より社長、社長より会長……。長と付くのが好き、一寸でも高い所に立つのが好きです。私はこういう高い所に立つのが大体嫌いで、本当は下の方が好きですが、神様が立って御用せよとおっしゃるから、へり下つて立たせて頂いているのです。猫でも高い所が好きです。子供もちよつとも高い所に上る、今朝も孫が来て床の間の上で飛び跳ねる。子供も大人も同じです。私はあの人より少し背が高い、一寸足が早いなどと言って喜ぶ人があります。それは人間の考えですが、神様は反対で「低くなれ、低くなれ」「駄目な人間である事を認めなさい」と言われる。だから「私は何もできません、こんな者です」と信頼すると、救つて下さるのです。これが捨てて捨う、死んで生きるというキリスト教のパラドックス（逆説）です。「イエス様なんか何だ……。」「と蹴飛ばしておいて救われるのです。

パウロと言われたサウロもそうでした。殺気立って教会を荒し廻っていた彼が、一度あのダマスコ途上で生ける主にお

会いたとき、「自分が間違っていました。申し訳ありません」と、一転してこの福音の為に本当に命をかけたのです。神様が私の足の下まで下って、私を押し上げるように救って下さる。こんなすばらしい救だからと、ヨーロッパ・アジアに福音を伝えたのです。キリストの救とはそんなものです。賛成信者というのがあります。「キリスト教は良いですね」と言うから「信じませんか」と奨めると「いや、その中に」と言う。その中になんて言っている間に死んだらどうするかと思います。その中というのは信じないという事です。むしろ「いや、キリスト教には反対だ」という人に望がある。そんなに言ったからには神様が責任をとらせなされる。私も伝道している時、「先生、そんな事では救われません」と言う人は「脈があるな」と思います。神様がいまにこの人を引っ張り返して下さると思うからです。「結構ですね」と言う人は臭い。うまい事のらりくらりで踏ん切りがつかない。それではいつまで経っても救に与かる事ができない。「……あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉でなく、天にいますわたしの父である……」。イエスを神の子と信じさせて頂いたのは、特別の神様の恵みなのです。このイエス様が八幡の地に福音の門戸を開いて下さって、

私共はこの方を生ける主とし、お従いして歩んで参りました。主は私共を守り支え、私共の祈りに答えて、時間空間を超えて皆さんのご家庭の中まで入って、寝室からでも、地の果からでも引き出し給うたのです。日本の北から南から、西から東から集めて神様の前に近付けて下さった。皆さんの中で、初めから「前田教会へ行って信仰を持とう」と八幡へいらっしやった方は一人もない。私もそうだったので。しかし神様の方が神様の計画によって、私共をここに召し集めて下さいました。これは嬉しい事です。私共の計画は無くても、神様が私共についての計画を持って下さっているのです。皆さんを見ていると、子供の為に、いまにこの幼稚園にや……この小学校に……この中学校に……と先の事を考え、お嫁に行く時はどうこうしてなどと、そんな先の事まで計画している。子供の方はそんな事はお構いなし、今日が楽しけりやそれで良いとやっている。神様は私共の為に、人間の計画でなく神様のプログラムでもって私共を導いて下さっているのです。だから「死んだらどうしよう……死ぬ時はどんなだろう……」なんて心配しなくてよい。神様はちゃんと天国までのプログラムを作って下さっている。私共の願いよりもっとすばらしい事をして下さるのですから、安心しとって良いの

です。その証拠に、神様はこの四〇年の間この教会を、こんなに、私共の思いもしなかったように恵んで下さったのですから。

これから先も、この生ける主が教会のかしらである限り、どんな時代になっても、どんな事が起っても問題は無いのです。誰もこの教会のかしらなどと言う人はありません。生ける主がかしらとなって導いて下さる。私共の計画は何も無く、神様の計画でここまで来ました。これから先も神様の計画に信頼して行けば、人間の方でどんな不可能な事も、この方のできぬ事はありません。死人の中から甦った方が、死の向うの世界までもちゃんと支配していらっしゃる。その方が今日も私共を召し集めて、み前に近付けて下さったのです。

一八節「……あなたはペテロである。そしてわたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう……」。あなたこそ、生ける神の子キリストですと信ずる人々は、ガツチリした磐のよな者だと言われるのです。決して動かされない、世のどんな嵐に会っても決して恐れる事もあわてる事も惑う事も失望する事もないのです。「この岩の上にわたしの教会を……」

とあるように、この信仰の上に建つのがキリストの教会なのです。この教会は四〇年前にこの信仰の上にたって、主に従

って歩ませて頂きました。四〇年の間、主はこの教会のかしらとなり、私共を守り支え導いて下さいました。そればかりでなく、「黄泉（よみ）の力もそれに打ち勝つことはない」とあるように、この世の勢力、闇の力も決してこの生けるキリストの手を超えて損う事はありませんでした。神様が許し給わないのです。

一九節、「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつながら、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。多くの先輩の人達が天に召されました。この教会を通し、主イエス・キリストの御名によって、天の戸籍に記録され、輝く御国に勝利をもって召された方々が沢山あります。それは生ける神の子キリストが、一人一人の魂を救に与からせ、天のみ国に加えて下さったのです。天国の鍵をこの教会に授けて下さったのです。この教会によらなかつたら、或は天国へ入る事ができなかつたかも知れません。さいわいにして生ける主が恵んでみな導かれました。私共も又彼処でお会いする時があるのです。その事を思うと、この地上のことはどうなるうと問題ではないのです。もう永遠の命に与らせて頂いた私共ですから。

イザヤ書第五章へ戻り、この一節、「義を追い求め、主を尋ね求める者よ、わたしに聞け。あなたがたの切り出された岩と、あなたがたの掘り出された穴とを思いみよ」。私共は、汝はキリスト生ける神の子なり、との信仰によって出発し今日に到らしめて頂きました。ここまで四〇年間こうだったと、うしろばかり振り返るのでなく、この主が今も私共の前に歩んで下さっている事を覚えたいと思います。二節に「あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラとを思いみよ。わたしは彼をただひとりであったときに召し、彼を祝福して、その子孫を増し加えた」とあります。アブラハムは信仰の父と言われます。神様はご自分をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると名のり、しばしばイスラエルに呼びかけていらっしゃる。アブラハムはカルデヤのウルから引き出され、ただ一人であった彼が恵まれ、イサクを与えられ、イサクからヤコブ、ヤコブから一二部族が生れて、イスラエル民族があれだけ祝福されたのです。

ですから神様は、

「たえず掘り出された穴、切り出された岩を顧みなさい」と呼掛けていらっしゃるのです。

「あなたがたの父アブラハムと、あなたがたを産んだサラ

とを思いみよ」と、アブラハムとサラの生涯を振り返ってごらんと言われます。サラは産まず女^めであり、年がおよそ百才、死んだ状態、枯木のような状態であったのに、神様は豊かに祝福して下さいました。そしてイスラエルの民がエジプトから引き出された時は、六〇万ともなつて居りました。その方をいつも思いみる、それが切り出された岩と掘り出された穴とを思いみるという事です。私共がどんなであっても、周囲がどうであっても、状態が不可能であっても、あのアブラハム一人からイスラエル民族を創造なさった神様が、同じ力同じ恵をもって、私共一人一人を守り支え導いて下さるのです。その方を全幅に信頼するようにと、新しい出発に当て求めていらっしゃるのです。ですから私共が自分を見て、「……私はあくだこうだ」と考えるのではなく、神様が「私が行うのだから心配するな」とおっしゃるのですから「有難うございます」と、その方に信頼して行きたいと思えます。これが今日からのもう一つの新しい出発なのです。

ここまで温故、つまり古きを尋ねて参りましたが、今日ここからは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神……とおっしゃる世々に亘って変らない神様、しかもアブラハム一人をカルデヤのウルから引出して、空の星のような、地の砂

のようなイスラエルの民を創造された神様を思いみたい。この方なら私共がどんなに小さく弱く破れた器であっても、新しく創造して、新しい命と力に満ちたし、神の栄光を表わす器として、新しく出発させて下さるのです。私共がどんな状態でも、このお方が皆さんと共に居て下さるのです。「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と、このお方に信頼して参りますなら、私共に対してどんな驚くべき事をやって下さるか、希望をもって楽しみに主を仰ぎ見つつ大胆にお従いして行きたいと思えます。お祈りいたしましょう。

(ご一緒のお祈り)

以 上

八幡前田教会

四十周年を記念して

大 口 和 子

今を溯ること二十七、八年にもなりますか、亡き母が「西前田というところに榎本先生がおられるから連れていこう」と申しまして、懐かしい懐かしい榎本先生ご夫妻にお逢い致しました。十五、六年もご無沙汰しておりましたのに大変温かく迎えて下さいました。その折の心の温もりを今も肌感する思いが致します。

ある聖日の礼拝後のこと、能美のおばあちゃんと母と私が会堂の下の牧師館にお邪魔いたしました時、まだ赤ちゃんだった誠さんが高い熱を出しておられました。先生は礼拝のご用がお済みになると昼食をとられるいとまもなく、誠さんの為に神癒の祈りをなさいまして、誠さんを抱きあげ「ゆりかごの歌をカナリヤが歌うよ、ネンネコネンネコネンネコよ」と、優しく寝かしつけておられました。目を閉じると、何故かそのお姿がクツキリと浮かんで参ります。そのような中でも、奥様は私共の為に真白いご飯と美味しいたくわんを、あ

ただきました。そのお心のこもったご接待も折にふれ思い出す事の一つです。先生方は何時如何なる時も、どんな小さな事でも祈りに祈って神さまの御声にのみ従っておられたのだと、今にしてやっと私も悟る次第です。

あるクリスマススの時、たしか七輪だったと思いますが、それを先生が二階の会堂へ持って来られ、その廻りに座布団を四角に並べて、大好きなぜんざいを沢山ご馳走になりました。そのあと、私の弾く拙いオルガンの伴奏に合わせて、ご家族お揃いで「神のお子のイエスさまは、眠り給うおとなしく：」とお歌いになりました。なんと楽しいクリスマススでしたことでしょう。今のように便利なカセットテープがありましたなら、録音しておく事ができましたのにと残念でなりません。誠さんが幼稚園に通っておられた頃です。母が先生にお願い致しまして、大変我がままで強情、張りの私を、お手伝いをさせて頂くという名目で預っていたことがあります。夜は会堂の脇の小部屋に休ませて頂きましたが、先生は夜中の二時、三時までも、教会員の一人一人の名をあげて祈っておられました。目の不自由な私が馴れない炊事・洗濯・掃除のお手伝いをするのですから、世話のやける娘が一人増えたも同然で、加勢どころか反ってご負担をかけにお邪魔にあが

った次第です。わずか四、五日という、この短い間の滞在が、私の結婚生活への実地訓練となりましたわけでございます。

このように久しい以前から、敬愛する先生ご夫妻を私の第二の父母として、前田教会で信仰生活を続けて参りました。その間、様々の中を通りましたが、その都度ねんごろに教え導いていただき、今日神様のご摂理に一切をゆだねることができるようになりましたのは、ひとえに深い神さまのお恵みによるものと感謝のほかございません。



創立四十週年の

年末感謝会に當つて

伊規須 太郎

四十年前と言いますと、私は横浜に住み、西も東も分からぬ軽薄な一中学生でありました。神様から遠く離れ、何を目標として生きていたのか、今は思い出す事もできません。その頃すでにこの八幡に福音の門戸が開かれ、榎本先生が遣わされた事を思いますとき、四十年という年月を重く感ずるものであります。

これより先、明治末期以来の両親の信仰（キリスト教）の変遷や私の幼児の教会とのかかわりなど、神様の奇しき恵があつたようですが、詳しい事は分かりません。

その後、私は海軍に入り、敗戦後福岡県に帰り、人生の行詰まりに悩むうち、神様に捕えられ、遂にこの教会で救われ、今日まで神様の憐みにより支えられて来ました。その間、両親の信仰の復興と最後の勝利、家族の救い、私の結婚、神様に従わせていただくについてのご指導等々、榎本先生には大変お世話になつて参りました。そして私はこれらすべての下に神様の手を見るのであります。無きに等しい者を顧み、世

の創めの先から選り召し給うた神様！…… 次第に目が開かれますと、今は嬉しいとか感謝と言うよりも、神様はなんと素晴らしい方かと、ただ神様をさがめるのみであります。

さて、この一年の事ですが、私は頑（かたくな）な者で、事ある毎に神様からはっきりしたお取扱ひを受けるのですが、今年は特に色々な苦しみの中で、実物教育を受けたのです。

私の身分はどういうものか、キリストに従うとはどういう事か、御旨とは何か、真に生きるとはどういう事か、真の報いとは何か等々…… 貴重な教訓を受けつつ、歩みを整えていただきました。これは私の生涯における大きな転機でありました。今日まで皆様に対しても、種々ご迷惑をお掛けして参りましたが、悔い改めて踏み出しましたので、何卒祈りの中に覚えて下さるよう、お願いいたします。

今、私は「主の祈り」を深く味わつております。「……父よ、み名があがめられますように……」と初めに覚えた祈りが、今また私の心からの祈りとなりました。

「見よ、今は恵みの時……」と常にお声を掛けて下さる大牧者に、一歩一歩従わせていただきたいと願つております。

（一九七九、一二月 記）

私の出エジプト記

佐藤シゲ

私のエジプトは敗戦前後より始まりました。昭和二十年三月のはじめ、中国の汕頭が敵前上陸地になるかも知れないとの軍の指令により、私たち婦女子は夫を大陸に残し、御用船に乗せられ、空襲にさらされ、潜水艦に追われ上海に上陸したあと、鉄路で満洲、朝鮮を経て、博多に上陸したのは三十日でした。やっと辿り着いた実家は丸焼けになり煙のくすぶる中で老父母と涙の再会をしたのです。

焼け跡のバラックで、両親兄弟のお世話になりつゝ、三才の和子、一才の誠を抱えて馴れぬ農作業に汗と涙を流す毎日でしたが、昭和二十一年四月、無事に主人が帰国し、やっと親子揃って生活ができるようになりました。主人は当時八幡で手広く事業をしていた親戚を頼ってその会社の会計に就職し生活も安定したかに見えましたが、その会社の工場から火事を出し倒産したのが昭和二十六年でした。

失業保険の切れる頃、主人は友人のお世話で、或中学校に復職が内定し、ほっとしたもの、身体検査で開放性の結核と診断され、一挙に奈落に落された思いでした。弟の世話で

亀川の国立病院に入院できたのが昭和二十七年一月、粉雪の降る寒い日でした。四才になったばかりの次男雄二の手を引いて病院の門を後にして、次男を実家にあづける為、竹田行きのバスに乗った時の胸の内、今思い出しても涙がにじんでまいります。自分が親兄弟から引き放されて、よその家に行くのがわかるのでしょうか。「こっちはじゃない、汽車に乗って帰ろうよ。」と泣き出されて、身を裂かれる思いがしたのが忘れられません。翌朝、雄二がまだ寝ている間に八幡に帰り、知人のお世話で日給百七十円の事務員とは名ばかり、製鉄所構内の下請会社で働き、親子三人の生活をささえたのでした。残業の工員さんのパンを両手に重く抱え製鉄構内を運ぶ夜道「和子、誠、雄二」と三人の子供の名を呼びつゝ、冷たい月を眺めながら遠くに療養中の主人の身を案じたものです。

昭和二十七年、思いもかけず、私は昔取ったかねずかで、八幡前田小学校に勤務できるようになりました。そして四年生を担任させられ、その中に榎本先生のご子息和義さんがおられたのでした。小さい頃通った教会学校が懐しく、私は魂が吸い寄せられるように、前田教会の門をたたき、それ以来一家中本当にお世話になりました。

主人の病勢は其の後二年間一進一退を続けましたが、幸に

体力がありましたので、肋骨七本を切る整形手術を受けることになりました。併し、手術予定の一ヶ月前より、四十度の高熱が続き、小咯血もあり、手術が危ぶまれました。其の時の旨を榎本先生に訴えますと、

「たといあなたがご主人を亡くされるような事があっても主を知る事ができたのは、それに優るものです。」

とおっしゃったお言葉と、信仰に満ちた先生の瞳の光を忘れる事ができません。手術の看護に向う私へ、先生が、多額の御見舞と共にしたためて下さったのが、詩篇二十三篇でした。

「エホバはわが牧者なり、我ともしきことあらじ……た

といわれ死のかけの谷を歩むとも、わざわざいを恐れじ、汝、

我と共にいませばなり。汝の筈、汝の杖、われを慰む。」

リンゲル注射を受けている主人のベットのそばで読む声のふるえを今も覚えています。数時間の手術も無事に終り、順調な経過を辿り、昭和三十年の十一月無事に退院する事ができました。

三年間礼拝のあと、先生が神癒のお祈りをして下さる時、必ず佐藤巽の名を加えてお祈りして下さいました。私の知らない時もきつと朝夕、奥様とご一緒に、そして前田教会の皆様方もそれぞれお祈り頂いた事と思えます。今あらためて、

深く深く感謝申し上げます。

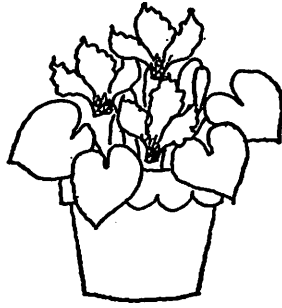
和子も其の間、働きに出る私に代って、小学校の四年生から、夕食のしたく、第二人の世話など本当に良くやってくれました。また誠、雄二も、世話をやかせることなく、明るく成長してくれました。主の御導きを思います。子供達も皆高校時代に洗礼を受け、主人も時々教会に出席するようになりました。その後入試・就職・結婚と、人生の難関を主のいくしみると励ましを得て、今はそれぞれの道を歩む事ができるまでになり本当に感謝です。

私も昭和四十六年教職を去り、和子の嫁ぎ先で、会計の仕事を手伝っている主人と共に、杵築の地で暮す事になり、お世話になりました前田教会の皆様とお別れする事になりました。只今は、緑豊かな海辺の町で、杵築教会の皆様のおかげにお交りに加えて頂き、毎週聖日には、キリストのご愛を、ねんごろにおさとし下さる吉新先生から、人生の指針を得て、心豊かに、平安な日々を送らせて頂いております。主の御導き下さいました「カナン」と、感謝でいっぱいの日々です。

今後どの様な苦難に会いますことか、世の勢、老後の身体の事など、時に取り越し苦労をする事もありますが、「なんじ、我と共にあり。」力強い主の御言葉を思い起こし、十

字架の苦難を忍べた主を見上げる時、たゞもったいなく、限らない感謝でいっぱいになります。この喜びを少しでも多くの方にお伝えできれば、とそのみを思う此の頃です。

終りに、前田教会がますます主によって栄え、榎本先生ご一家、前田教会につらなる方々に主の御恵と平安が増し加えられますようにひたすら祈っております。



主が備えられた道

日本キリスト教団日出教会

牧師 東 俊 郎

大分県国東半島の首根っ子の所に、小さな城下町日出町がある。町の人口は約二万、広い農村地帯を抱えた過疎の町であり、いまだに士族、平民、旧御家老様が生きている所である。この町の役場の裏に、創立八十七年の歴史を持つ、日本キリスト教団日出教会が主によって建てられている。過去に於ては、相当の実績を持った教会であったが、現在は礼拝出席平均十五名の小さな群である。

別府野口教会から転任して早や一年半、関西学院大学神学部を卒業して、奄美ー別府ー日出と、牧会年数は十六年、年令は満五〇才となったが、私の人生はこれからだ、と思っている。

日出教会は、別府野口教会よりも、会員数、教会財政共に半分以下の教会であり、別府時代に兼牧をしていた教会である。その教会に、主の召しを受けて赴任を決定した時、多くの同僚、先輩、神学部の教授から「経済的に豊かな教会があの同僚、先輩、神学部の教授から「経済的に豊かな教会があの同僚、先輩、神学部の教授から「経済的に豊かな教会があの同僚、先輩、神学部の教授から「経済的に豊かな教会があ

言葉をいただいた。しかしキリスト者は、神の導き以外には決して歩み得ない存在である。その上、私に対する神の召しには、はっきりした根拠があった。それは、日出教会が重荷を負った教会だったからである。

五年前に教会の牧師館が焼失した。失火である。小さな町で火事を出す、その事だけで町の信用を失う。その上、台風による牧師館裏の崖くずれ、前任牧師の失敗、つまづいて教会を去っていく多くの信徒……、日出教会は幾多の試練により往年の姿はなく、礼拝出席も五、六名となり、火が消えたさびしい教会となっていた。

神は具体的な事を通して、細きみ声でささやきたもう。祈ってみ心を問うていた時、はっきりと主はみことばを与えたもうた。「恐れるな。語りつけよ、黙っているな。あなたにはわたしがついてる。―この町には、わたしの民が大ぜいいる」(使徒行伝一八ノ九―一〇)。日出の町に、主が備えられた大ぜいの民がいる―、重荷を負うて、手をさしのべ続けている多くの人たちがいる―。大きな伝道圏を持つ、弱り切っている教会を、主は私に与えて下さったのだ。もう一つ、これは私の永年の強い主張であるが、現在の教団の教会では、年をとり、牧会経験が豊かになるに従って、

都市の大教会に転任していく傾向が強い。これは大変おかしな話であって地方の困難な教会こそ、経験豊かな牧師が赴任すべきではないだろうか。そうでなければ、いつまでたっても日本の伝導は行きづまりである。殊に二十一世紀の日本は、農業に大きなウエイトがかかる時代となる。農村伝道は急務なのである。現在のおかしな傾向に警告を与えるために、主は私を日出につかわされたに違いない。

日出教会に赴任して今日まで、実に奇跡の連続であった。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六ノ三三)。常識では、とても生活できるはずのない所で、家族四人は支えられて来た。ケリテ川のほとり、ザレパテのやもめの家でのエリヤを、主は体験させて下さった。明日の生活費のない、今日という日の、何と主において喜びに満ちたものであろうか。

日出教会が、河本さんと大変深い関係にあるという事を、日出に来て初めて思い起した次第。まことに主の導きは不思議である。思えば私を今日まで支えて来たものは、前田教会時代に養われた信仰であった。己を捨て、無条件に神の導きに従っていく時、神は全能なる手をさしのべて下さる……。

神学校時代、奄美、別府と、私の信仰は大きく揺れ動いていた。大変危険な状態もいく度あった。しかし、神は多くの貴重な経験を与えて下さり、今日の広い所に立たせて下さった。私は帰るべき所に帰ったのである。

今年の四月から、月火木金土の午前五時四五分から、早天祈祷会が始まった。八、九名の人達が集い、みことばを学び、熱き祈りを捧げている。私が一番最初に教会という所に足を踏み入れたのは、前田教会の早天祈祷会であった。私の信仰は、早天で養われたといつてよい。早天の開始により、日出教会は燃やされてきた。主は次々と大きな幻を見せて下さり、教会員も積極的に、伝道に、奉仕にと働き始めた。日出の町に主が備えられた多くの重荷を負う人々の、救いを求める手を見る事ができるようになった。声を聞く事ができるようになった。

今、主は大変な幻を示されている。日本の救いである。このままでは、日本は必ず短期間に滅びてしまうであろう。現代の青少年の姿を見れば、それは明らかである。次の世代の日本はどうなる？ この問題に日夜胸はしめつけられ、涙がとめどなく流れる。今から十年後には、日本キリスト教団の六〇〇の教会が無牧になる。後継者が居ない、という恐ろし

い状態が確実にやって来る。先に救われた我々は何をなすべきか。後の日本、後の教会のために捨て石となり、どうしても聖霊の炎を、全日本に燃え上らせねばならない。

牧師館の庭のいちぢくが熟し、夜はこおろぎが夏の終りを告げる。収穫の秋に主は言われる、「収穫は多いが、働き人が少ない。だから収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」(マタイ九ノ三七ノ三八)。前田教会から、ただ神のあわれみによって献身をさせていただいた私に、特に主のこのお言葉が迫って来る。前田教会から、日出教会から、日本の救いのために多くの献身者が、次々と与えられる事を信じて疑わない。ただ、私はいつまでも田舎牧師でありたい。ひっそりとした所で全力を尽くし、終りの日に後悔する何ものも残さず、喜んでみ国へ凱旋する、キリストの忠実な一兵卒であり続けたい。



教団離脱の前後について

榎 本 利 三 郎

教会創立当時（昭和十四年）は国粹主義といえますか、国家主義で、政府の政策として思想統制の一環として、宗教団体が施行されました。キリスト教界も「各個教会の信仰と伝統を重んじて、日本基督教団を組織して、当局の要望に応える。」と云う主旨で教団が成立し、これに加入し、日本キリスト教団八幡長者町伝道所で出発しました。

柘植先生・折滝先生を通して与えられた聖書を信ずる信仰に、大胆に立って歩んで来ました。教団の第七部が純福音系の教会でした。部制が廃止され、教団の教憲教規が決まり、単一教団として同一信仰告白でなければならぬことになって参りました。もはや各個教会がそれぞれの信仰に立つ事が許されなくなりました。

又教団は会議制で、代議員の多数決ですべてを決定します。代議員全員が聖霊に満たされ、主を恐れ敬う人であるなら、協議でなく主の聖旨が何であるかを求めて、主の聖旨に従う筈です。

教団は今社会革新を求めて、革新政党的の真似をして、霊

魂の救いを忘れたのでは無いか？と思われる様になりました。今斯うして居る間にも、無数の靈魂が、神なく、望なく、救いなく、亡びて行くのです。協議や運動して居る間に祈って主の憐みによって、聖霊により、一人でも多くの魂を救って頂かねばなりません。

万博を機会に教会は世に仕え、社会を改革しなければ無用の長物と化してしまふ。それで人々の（此の世の）要望に応えなければならぬと、だんだん聖書を離れ、この世の働きに傾いてしまいました。

私共は創立以来三〇年間、教団に在って、教団が聖書に立つ信仰である様に、又福音が現代に於いても、福音として宣べ伝えられる様にと祈り願って参りました。その為教団の総てに対して忠実に全力を挙げて尽して参りました。青年会にも、教会学校にも、婦人会にも、信徒会にも、皆さんにもできるだけ出席し、協力して頂きました。実際に協力、参加した方々は、信仰の在り方、主に対する態度等、従って行けななくなり、どなたも「もうだめ、行っても意味がない」と行く方が無くなりました。しばらくは私共二人が教会代表で参加しましたが、地区でも教区でも「前田教会は非協力だ、いっそ教団に居ない方がいい。」と言われる様になりました。

かねてから主の聖旨と御導を祈って参りましたが、今此処に至って、教団に対する私共の使命は終わったと判りました。それで本来の使命を果たすため教団を離脱することに致しました。



牧師館訪問記（四）

一 「ぶどうの木」取材シリーズ

一 はじめに

「ぶどうの木取材班」が誕生したのは、昭和四七年でした。そして、最初に企画されたのが「牧師館訪問記」でありました。

第一回は「ぶどうの木第八号」（昭和四八年四月発行）に先生の学生時代の入信から献身までが掲載されました。

第二回は八年後の第十二号（五六年三月発行）に修養生時代から八幡に遣わされるまで、第三回は十三号（五七年八月発行）に伝道開始から結婚までと語りつがれて参りました。

そして今回は、昭和十五年十一月の結婚から間もなく第二次世界大戦に突入、空襲を経て終戦を迎えるまでの、おそらく先生にとって最も困難な時代であったと思われる頃のお話です。

今日ではとても想像もできない程の激動と困難の中で、聖書一筋、殉教の精神をもって歩んで来られたご様子を、先生と奥様は、神様の守りと恵みをもう一度噛みしめるようにして語って下さいました。

（文中一〇〇〇の部分は、取材班がお尋ねしたところです。）

二、新生活生活第一歩

先生 この前は、結婚式が済んで、そのまま新婚旅行を兼ねて八幡に来て、翌朝から早天祈祷会というところまでお話ししましたね。

家内は、家が倉庫の二階と聞いていたので、余程のあばら家でネズミもチョコロチョコロしているような所を想像してたようです。ところが来てみると新築で畳も新しく芳しい香りがしてたんですね。

そして、翌朝六時から早速、早天祈祷会に出たわけです。新生活は信仰生活の第一歩ですからね。

一 先生達がおられた場所は……

先生 今の河本さん宅の事務所になっている所が二階になっていて、そこに畳の間が二間あって、そこを教会として使っていました。上に昇る階段の所に「八幡キリスト伝道館」という小さな看板を掲げておりました。家庭集会だと来にくいだろうから、会堂であれば誰でも入りやすい。そういうことで河本さんが二階を開放して下さったのです。

下は河本さんのお店になっており、二階には高橋さんご

一家も住んでおられました。

― 先生達は、集会のたびに通っておられたわけですね。―
先生 そうです。早天祈禱会であれば六時までに行かねばなりません。

奥様 時間がないからと急ぐでしょう。私は後ろからスタコラスタコラついてゆかねばなりませんでした。(笑い)
先生 それもね、洋服なら走りやすいですけど、その時は和服でね。私も着物に袴でしたよ。

― 当時の礼拝出席者はどれくらい。―

先生 そうね、河本さん夫妻・長尾さん夫妻・高橋さん夫妻・よそから来られていたのが新原さん夫妻・城さん夫妻・吉永さん・南部さん・若松から高橋のおばあちゃん……それ位ですかね。

それに、河本さんとこの店員さんが何人か出てきました。その人達には日当をあげてね。日曜日に休むと生活に影響するので、河本さんが日当をあげるからと出席させてくれたのです。そうゆう人達ですから集会中は居眠り半分だったようです。

集会は礼拝と祈禱会、早天祈禱会は火曜から土曜日までが定期集会でした。

まあ、その頃の情勢が戦争直前でしたから、いろんな事で制約があり、教会設立の時も届出を出したのですけれどもなかなか返事が来ない。やっと来た時には、たゞ「却下」とだけ書いてある。理由はなしなのです。それで、何故か聞きに行きましたら、「聞かん方がいい」というんです。

私としては認めてもらえなくても、伝道をやって実績を作ってゆけばよいと考えてやっておりましたら、昭和十六年になって教団がまとまるという事になり、私達も入ってやっと教団の伝道所という事になったのです。

そうゆう情勢ですから、新しく求めて来る人は、ほとんどありませんでしたね。

三、戦時下の伝道

先生 それに、何度か特高に呼び出しを受けました。

その時の質問は「伊勢の皇大神宮はどう思うか。天皇はどう思うか」そういう質問なんです。私は、伊勢の皇大神宮は先祖を祀っているのだから敬意を表する。拜むとは言わん。天皇についても、尊敬するという言葉を使いました。私ばかりでなく、役員をもらっていた河本さん・新原さんも呼び出されていました。

当時はまだ、家族も少かったので、朝起きてお祈りをし、早天祈禱会に出て、帰って聖書を読んでお祈りをして、午後は訪問をしておりました。

だんだん戦争が近づくにつれ、企業も軍需産業中心になってきました。物資も統制となり、物がだんだんなくなってくる。その内、十六年に俵雄が生れるということになりました。それで、金物もなくなるといふことで、店仕舞いの売出しの時に、私が、俵雄が小学校に上って遠足の為にと水筒を買ってきたという話しは、この時のことなのです。(笑い)それから、教科書も少なくなるというので、それではと一年生から六年生までの分を買ってしまったわけです。(笑い)戦災で全部焼けてしまいましたけれども……。

食糧も配給制になって、卵も並んで買うようになりまして。今の豊かな時代からはわからないでしょうね。

その内に戦争も激しくなって、空襲に備え防空演習が始まりました。灯火管制といって、サイレンが鳴ると電灯を消すかカバーをして小さくして飛行機から見えないようにするのです。

あれは、灯火管制中の祈禱会の時でしたかね。戦時中も集会は休まず続けておりましたが、俵雄が三才ぐらいだっ

たかな。

奥様 俵雄が三才で和義が二才の時でした。その時私は、咲子が生れるので、福岡へ帰っていたんです。それで、主人は二人の面倒を見ながら集会しておったわけです。

先生 そういうことで、夜の集会の時は、二人が早く寝るのもですから、大丈夫と思って、その灯火管制の時も出かけたのです。ところが帰ってみると二人がいないんですね。びっくりしましてね、というのは二階でしょう。テラスがあるのですが、隣との間に防護柵もないものですから落ちてもしたら大変。それに階段もあって暗いし、とても降りて行く筈もないし……それでお祈りしながら一生懸命探したんです。

隣りの奥さんも心配して探してくれたのですが、わからない。もしかししたら、早天祈禱会の時二人を連れて行きましたから、私を迎えに来ているかもしれないと思って、大急ぎで戻って見たのです。

灯火管制中ですから、保安灯の豆球が所々スポットのように小さくついているのですが、製鉄所の西門の所に来てみるとその保安灯の下に二人がポツンと立っているのですね。びっくりしましてね。その時和義はオムツをしたまま



でした。(笑い)

奥様 どうも和義がオシツコで起きて泣いたらしいんです。それで俵雄が目がさめてお父ちゃんを迎えに行こうねといつて、暗い階段をヨイシヨイシヨと降りて行ったらしいんですね。

四、配給生活

先生 二人がいた所は、トラックが軍用のため夜でもどんどん出入りしているところです。しかも、灯火管制ですから、ライトもつけていないんです。子供が引かれてもわからない。ですから私は心配でお祈りしておりましたら、二人が外灯の下に立っていたのです。

その時、俵雄が「デンシヤ キレイヨ」と言うんですね。その頃は管制も解除されて、電車もライトをつけていたのでしょね。「電車、きれいよ」というんです。(笑い)二人が何の不安もなく「お父さん、迎えに来たよ。」(笑い)今でも印象深く憶えています。

そうゆう中を通って、神様が守って下さったと思います。

奥様 あの頃は厳しい食糧統制で、しかもヤミはいけないですよ。どうしても配給だけで生活しなければなりません。それで毎日毎日お米を計るわけです。次の配給まであと何日だから、今日はこれぐらい。おかゆにしたり他のものを入

れたりして、できるだけお米を残しておりました。

今から考えると、そんなことしないで食べとけばよかったのです。私はお腹のことは考えないで、目先のことばかり考えていたものですから、咲子の時は、今で言えば未熟児でした。洗面器で産湯を使っただけです。今だったら保育器に入っていたぐらい小さかったです。それでも家庭で生んで、しかも十一月の寒い時でしたので、咲子は一人で寝ないのです。私と一緒に寝ると温いでしょう、よく寝ましたから……それだけ小さくて寒かったのだと思います。

先生 お乳も配給で十分ないしね。いくらか助かったのは、前が青果市場でしたから、時々リンゴなんかを分けてくれました。十九年頃はもうそれもありませんでした。バナナも入って来なかった。

奥様 そうゆう中で聖書に記されているエリヤの「桶の粉は尽きず、瓶の油は絶えざりき」とあるように、実際、今日は食べるものがないからという事は一日もありませんでした。いよいよ駄目になると、神様がどこからか不思議なように与えて下さることを経験させていただきました。

1 　　そうゆう状況の中で、信仰をもつということは大変なこ

とと思います。何もない時、茶碗を伏せてではなく、上を向けて置いたという話を聞きますが、そうゆうことですか。先生 それはね、そうゆう信仰があるとは思われないんです。目の前には何もないけれども、神様は何とかして下さるといふ、たゞそれだけなんです。だけれど、神様はその時になるとちゃんと必要を与えて下さってね。

特に自分はこれだけの信仰があるんだというものは何もない。むしろ、自分には信仰はないとしか思われないけれども「あなたのほかにわたしの幸いはない」(詩一六・二)とありますが、幸いどころではない、生きることができないのだから「神様ノ」それだけでした。

神様はその信頼に憑えて下さって、一度もこらえておくという事はなかったですね。

奥様 「桶の粉は尽きず、瓶の油は絶えざりき」という事が本・当・に現実でした。

主の祈りの「日毎の糧を今日も与えて下さい。」という祈りが、本当に切実なものでありました。

先生 だから、やはり一步主に従うと、あとは主が次も歩ませて下さるのだと思います。

前回の時にお話しましたように、結婚を考えた時、おひ

つが空っぽになっても果たして信仰がもてるだろうかと心配していた人が、神様に従ってきたら、信仰をもったという意識はないのだが、いつの間にか神様に信頼してゆけば大丈夫という信仰まで神様が導いて下さった。

だから、初めの一步を従うことが出発点だと思えますね。経済的に苦しくなると、私共ですとすぐ他に収入を求めるところを考えますが、そういう誘惑はありませんでしたか。

先生 私は献身者ですから、献身者はまた殉教者ですから、いつ死んでもいい。私だけではない、私の家族全員がそうだと考えていましたから、そのことについてはそうありませんでした。

けれども、あれは俵雄が生まれていつ頃でしたかね、西南女学院の原院長が見えたのは……。その原先生がわざわざ来られて、今、戦時中で理科系の先生がみんな軍に徴用されていなくて困っているので、来て助けてくれないかというわけです。

私は「先生、私は伝道者です。献身者ですから他のことはしません。」と言っておことわりしたんです。けれども原先生は、何とか考えて下さいと言って帰って行かれまし

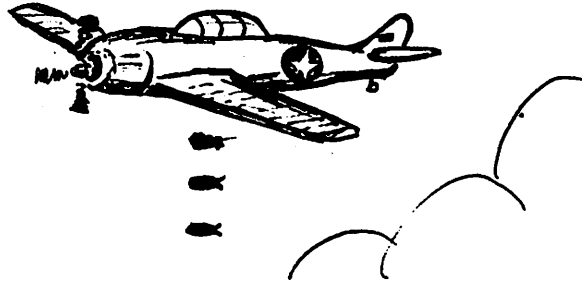
たが、それから二、三回来られました。その度に私はおことわりしていたのですが、「あんたが伝道してくれるならそんな結構なことはない。どうしてかという、今学校では聖書を教えたり讃美歌を歌ったりすることを禁じられている。部外者が来て教えてくれる分は学校に責任はないので、そうしてほしい。」というものですから「講義はしないで、聖書の話をしていいんですか。」「それならなお結構」ということで行くことになりました。

昭和十六年から二二年まで続きましたかね。その時の教え子の一人が岩隈さん、それから服部さんという方がおられます。

その頃は、軍需産業に学生も女子挺身隊として徴用されて、勉強はなかなかできませんでした。他の牧師さんも徴用されましたが、私は学校に行っていた関係で来ませんでした。

神様の不思議な摂理で、神様が導いて下さったのだなと思います。すべてを神様に委ねてゆく時、危険な中も、難しい規則の中も逃るべき道を備えて下さる。

五、空襲の中で



先生 戦争もますます
激しさを加え、二十
年六月に日本で初め
て八幡にB29が飛来
して空襲を受けまし
た。

その時は夜でした
が、サーチライトでB29
を照らし高射砲を打
つのですけど高くて
届かないのですね。
高射砲の玉が、シュ
ルシュルといって走
っているのがよく見

えるのです。見てきれいでしたね。

その内に、高射砲の玉の断片がバラバラ落ちて来たもの
ですから、恐くなって家の中に入りました。この時の爆弾
が枝光に落ちて沢山の人が死にましたね。

先生としては、そうゆう危険な中で使命感から最後まで
残るおつもりだったのですか。――

先生 私は信者の方が一人でもおられる間は、残っておこう
と思っていました。私が動くという事は、皆さんの心に不
安を与えることになる。それは主の御旨ではないと考えて
そのままおったんです。

信者の皆さんは心配してくれましたけれども……。

奥様 河本さんはね。「奥さん大丈夫ですよ。行きなさんな。」
と、私が五島へ行こうかと言ったら、行かん方がいいよと
言わんばかりの淋しそうな顔をなさっておられました。

先生 河本さんは、生くるも死ぬるも一緒にと考えておられ
たのですね。

河本さん宅に漬物に使うレンガ造りの大きなタンクがあ
りましたが、これに手を加えて防空壕替りに畳も布団類・
食糧品も入れて、ここで先生達と当分生活できますから……
……という訳です。

奥様 入口にこうゆうドアがありまして、いよいよの時は
ここに味噌を塗ったら大丈夫ということだったんです。と
ころが空襲の時、味噌塗るの忘れちゃった。(笑い)

空襲を受ける少し前から、私は歯が悪くて、それが化膿
して口が半分開かないような状態で、その日も寝ておりま
したら空襲でしょ。バラバラバラバラマツチ棒のような焼

夷弾が上から落ちてくる。これは大変とモンペをはいて、裸だった咲子をオムツのままネンネコにくるんで、下の隣組みの防空壕に入ったのです。

そしたら、主人が上から「そこにおったら焼け死ぬよおノ」というものですから、慌ててそこを出ました。恐らくそのままいたら死んでいたでしょう。

先生　そこにね、近くのモヤシ屋の奥さんも一緒にいて「どうしようか、どうしようか」といっているものですから、一緒に出してやりましたから助かりました。

それから私は帰って、戦夷弾を一生懸命消していました。奥様　そんなことしないで逃げればよいのですよ。だけどそのように訓練を受けているものですからね。(笑い)

先生　それで正直にやっつてね、もうだめだと思っただけでやめて、防空壕へ行ってフタをして、その上に用意していた砂をかけてから避難したのですが、その時はもう周囲は火の海でした。

― その時のことですね。先生がよく話されるスコップでピョンコピョンコ飛んでゆかれたのは―

先生　そうなんです。そこで教えられた御言は「あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃え

つくことがない。」(イザヤ四三・二)で、そうでした。ありがたいごさいますと言うて、この御言葉を頼りに火の中を突き込んでいったのです。

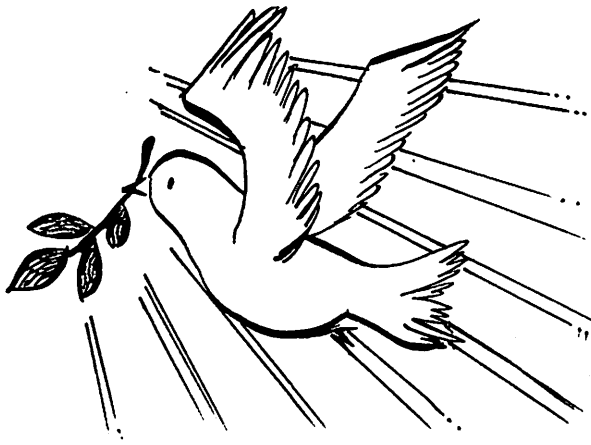
チョット足の甲の所をやけどしましたが、大したことなくったです。でも、栄養不足からなかなか治りませんでしたね。

奥様　私の方は、それで汽車道の方へ逃げ出したわけです。

俊雄は福岡の方へ連れていってましたから、私は咲子をおぶってカンボをかぶり和義を連れて汽車道の溝の所に避難するように言われていましたので、そちらの方へ逃げました。

そうしたら、バリバリバリでしょ。もう恐くて恐くて、そこ迄ゆけなくて、咲子を降して汽車道の土手の所が畑になっていましたが、そこに親子三人カンボをかぶってエス様、エス様といってね、じっとしていたわけです。飛行機が三百機ぐらい来ているのですから、空は真っ暗ですよ。とにかくすごい爆音なんです。

それからどれくらい時間が経ったかわかりませんが、おさまったわけです。そしたら主人が来て、カンボをはぐつてから……(笑い―先生てっきりやられたと思っただけ)



先生 僕はね、カンボがそこにあって動かないでしょ。これはてっきりやられたと思ってね、はぐってみたんですよ。そしたら、和義なんかブスーとふくれたような顔をしてね。(笑い) 恐怖で脳をやられたかなとチョット思いました。奥様 泣きもしないんです。咲子は満二才ぐらいでしたが泣きませんしね。

先生 家の方は火の手が上って燃えています。二時間ぐらいかかったでしょうか。それから予定の溝へ行きましたが、その内に雨が降り出した。煙幕を張ったものだから、空は真黒でね、黒い雨が降り出した。それで急いで帰って、そこに焼け残りの木やトタンなどを集めて簡単な屋根を作っ

たわけです。

その頃になって、安川電機や三菱化成に勤めていた人が家族を心配して家に走って帰っていたのですが、咲子にお乳を飲ませている姿を見て「ああ、赤ちゃんが助かっている。」と安心したように、普通の足取りになって帰っていたのを思い出します。だから、赤ちゃんの存在というのは、大きなものがあるなあと思いました。

そうゆう事があって、あたりの焼跡を見廻したときに、悲惨だなあと思いました。もうゴロゴロ真黒こげの死体が転がっているんです。それも血気盛んな兵隊さんが真黒けになって死んでいるんです。乳呑み子の咲子や和義が無傷で助かったのは、神様のあわれみだなと思いました。

その時、一番悲劇だなあと思ったのは、その日の夕暮でした。

私達の家の近くに、吹き降しの家に住んでいる韓国の家族の方がいまして、その人は馬車引きだったので、その日は仕事に出ていて帰ってみると、家も全部焼けてしまっている。家のトタンをはぐってみると、そこに家族の焼死体があった。それを見た時、彼は大声で「アイゴ、アイゴ」と、大地を打ち叩いて嘆いている。その声が……、

何もかも焼けてシーンとしている静寂の中で「アイゴー、アイゴー」という声が、夕やみに吸い込まれてゆくように響きわたりました。何とも言われないその声は、私達の心の中にもキユーツとしみ込んでいきます。

あゝ戦争ってなんとむごいものだろうと、その時思いました。それまで戦争の悲惨さというものを身近に見たことなかったのですが、この時ばかりは、何の罪もない人達をこんな嘆きに落し込むなんて、恐しいもんだなと心から思いました。

奥様 馬車の馬が焼けて、腹がパンパンに膨れて倒れているんです。この電車道も通れませんでした。

先生 それから、河本さん達はどうしているだろうかと心配して探しましたが、河本さん達も私達を心配して探しておられ、この下の方で会ったわけです。高橋さん一家もご無事でした。

それから、陣山の九州電工がある所に昔は大きな冷蔵庫庫がありました。そこを河本さんが知っていて、それが残っているというので、そこで一晩泊めてもらいました。

奥様 そこに行ったらお米もあるし、いろいろ食料もあつてね。おかゆでしたけれども、食べさせてもらいましたよ。

先生 それから、みんなが落ち着くまで、それぞれの所に別れましようということになって、私達は福岡へ、河本さんは東郷の方へ行っただけです。

しばらくちりぢりばらばらになりました。

事を行うエホバ

津留崎 浩行

「事をおこなうエホバ、事をなして之を成就^{とぐ}するエホバ、其の名をエホバと名^{なの}る者かく言う。汝^{なんじわれ}我^{われ}によび求めよ。われ汝^{なんじわれ}に^{こた}えん。又汝^{なんじわれ}が^{おほ}いなる事と秘密^{かくれ}たる事とを汝^{なんじわれ}に^{しめ}示^めさん。」（エレミヤ記三十三・二―三。文語訳）

主がまことに約束に忠実な方で、私のような者の願いにも、お約束通りに答えていただくことを、この御言葉を通して深く教えられております。

三十六年前、自分の考えを捨て、主に人生をおゆだねしよう^うと決心して呼び求めました時、主は約束の通り、私に新しい生涯を与えてくださいました。

それ以来、今まで知らなかった大いなることを示され続け、今日に至ったと言えます。

まず、あの理解できなかった聖書が、そのとき以来はつきり開かれ、喜びと信仰を持って読ましていたゞけるようになりました。

信じられなかったことも、祈りに答えて信じさせていたゞ

けるようになりました。

この世に望みを置いていた時には、知る由もなかった新しい喜びと平安を知ることができました。

また、人生のさまざまな出来ごと、自らの不信仰から起こる失敗すら、その度に十字架の血によってゆるされ、わざわいを幸いに、不信仰を新しい信仰に変えてくださるといふ驚くべき生涯に入れていたゞきました。

「罪の増し加わったところには、恵もますます満ちあふれた。」（ロマ書五・二〇）

このようなことは、古い生涯では全く考えも及ばなかったことで、まさに、隠された大いなることではないでしょうか。しかも主は、もっともっと大いなることを経験させてやろうと、呼びかけておられるのです。

このまことにありがたい主の呼びかけに、一心をもってお応えできるよう、このことも主によって成し遂げていたゞかねばと思っております。

ひきのばし

首藤 正

わたしの家は石炭風呂である。正確にいうと上焚き外釜式固形燃料燃焼方式の風呂である。十四年来使っているので、だいぶくたびれてきた。去年あたりからすこしずつ釜が水洩れしてきていたところへ、定期的に行う煙突の煤払いを、近所の山から採ってきた長くてでっかい竹ですこし乱暴にやった途端、激しく水が洩り出した。どうも釜を痛めたらしい。風呂に水を張って、釜に木や紙屑や石炭をくべて、燃やして沸き上がる頃には熱湯吐出口が露出するくらい水位が下がってしまう。もういけないと観念して、ガス風呂に切換えようという事になった。

だが待てよ、ガス風呂にしたら、家の外まわりに置いてある廃材や石炭置場の石炭はどうするんだ。それに毎日あとからあとから発生する紙屑の山を今までのように焼却できないとなるとゴミ出しが大変だ。何とか石炭釜の新しいのはないだろうかということになった。

取り寄せたカタログは軒並みガス風呂。なかにたった一種類だけ石炭釜があったが、見るからにチャチそのもの、とて

も紙屑やボール箱や廃材を突っこんで燃やすのには耐えられそうにない。

どうしようか、あきらめてガス風呂に甘んじる事に決心しようかと妻と顔を見合わせた。ガス風呂はガスを切った途端急速に冷えてゆくようだが、そこへゆくと石炭風呂は余熱があるから手のひらをかえたように冷たくなるようなことはない。ごんごん燃やすときの躍動感と燃焼感他では味わえないものがある。しかし釜が破れたとあってはやむを得ない。思いきってガスにしようやという、長年お世話になった釜だから廃棄する前に一目内部を見てお別れしたいと妻が言うものだから、上にのっかってる長い煙突をとりのけてみた。鑄鉄製の風呂釜の内壁は長年に亘って流水によって浸食された崖のようにえぐりとられ、デコボコだらけになっていた。やあ、こりゃあ寿命だわい、よくぞよくぞこの年まで持てたもんだ。いやご苦労さん、ご苦労さんとほめてやりたいくらい。

ところが妻の見て曰く「お父さん、これ補修できんかしら」「イイツ?」

「できなくてもととだから、何か上に塗ってみてみましようよ。」

「そやかて何塗るね、セメントは水を通すし、第一熱に弱いぜ。」

「ともかくもやってみましょうよ。」

いつもこの伝で押し切られる。

洩々物置からセメント袋を取おるしてきて、水でねってべたべたと塗りつけてやる。

なにしろ垂直に等しい内壁に貼りつけようというのだから一寸手許が狂うとポタツともろに底に落ちてしまう。やっこのことで塗り終った。乾くまで三日か四日くらいかけた。それからいよいよ通水式を執り行った。

見事に失敗。見る見る水がセメントの表面に拡がって忽ち穴の上あたりから吹き出すようにポタポタと流れおちてゆく。予想していたとはいえ、しょんぼりしてしまった。

「やっぱりダメねえ」と妻。

なにがやっぱりダメねえか、もうこうなったらこのままおめおめ引下がられねえ。なんとかかこの上に塗りできるものはないだろうか。天のお父さま、助けて下さい。

それから二、三日して勤めからの帰り、ふと思いついてスパーストアに入っていた。

日曜大工コーナーを見てまわるうちに漆喰が目に止まっ

た。これよ、これを試してみようというわけで一袋買って帰った。

天気の良い日、セメントの上に漆喰のねったのをまんべんなく塗り固めた。

漆喰の乾くのを待って浴槽に水を張ってみた。

成功であった。水一滴洩れない。

だが火を燃やしてみないことにはまだまだ安心がならない。煙突をもとのように取りつけて早速燃やしてみた。

大丈夫。立派に風呂が沸いた。

はじめは紙だけ、次は木も燃やしてみた。

なんともない。石炭もくべてみた。結構ゆける。しかし内心、いつ漆喰とセメントの壁がごそつとはがれて、どつと水が吹き出す終幕を見るだろうかと危ぶむ気持が強かった。最初のうちは、今日で何回目と指折りかぞえて記録の更新に固唾をのむといった趣きであった。

以来今日まで少くとも四十回は風呂を沸かしているが、水洩れに関しては問題ない。

ところが最近あつて新車の故障が起きた。

石炭をほうり込んでごんごん燃やすと、釜の外壁がぶるぶるとふるえ出すのである。

塗ったところと塗らないところがある関係で、温水の対流循環がうまくゆかないのかもしれない。そこでブルブル釜がふるえ出す前に浴槽の水を念入りにかきまぜてやることにしたらふるえなくなった。そのたびに自分のからだも追い追いかけて似たようなことになるにちがいないと共感を覚えるのである。



☆ 旅行記特集 ☆

梅雨の晴れ間に

大田邦子

久方振りにエステル会も、一泊旅行をしましょうとの声が出始めたのが五月初め頃でした。行先は昨年から大原美術館のある倉敷・岡山方面にという声がちらほら出ておりましたので目的地は決まりました。次は日取りです。榎本先生にお尋ねしましたところ、六月二十四、五日ならご都合つくとの事でした。

考えれば梅雨の真只中、旅行者なら誰でも避ける時季だと思えます。でも折角与えられました時、「神様は善にして善を行われます。」お天気でもよし、雨でもよしと信仰もって即座に決定しました。

いよいよ具体的な計画をさせて頂く事になりました。お引受けしましたものの、私は倉敷・岡山は全く初めてで、どの様に手繰り出して行こうかしらと、先づ不安が走ります。祈りました。

「人は心に自分の道を考え計る。しかしその歩みを導くの

は、主である。」(箴一六・九)

と聖言が与えられました。『どうかこの旅行が、主に祝福され、主を崇めることのできます様、又一人でも多くの方が参加なさいます様に、そして、このいと小さき力のない者を顧みて、『力は神にあり』と仰せられます主が智慧と力を与えて全うさせて下さい』と切に祈り、スタートしました。

先ず脳裡を走ったことが、全く初めてのところに二、三人で旅行するのと違って、責任の重大さを覚えました。どうしよう。心配だから大体の行程が決まったら、日帰りで見に行つて来ようと思つておりました。そんな折、M姉から親切に下見に行く時は、ご一緒に下さるとのご協力のお電話を頂き、うれしく感謝しました。

そこで、周囲を見廻し、倉敷方面を旅行された方々にお尋ねして、予備知識を頂き、凡その旅の輪廓をつかんで、旅行社に参りました。

旅行社では、日程が六月末でシーズン・オフと云う事が幸して、いろいろ特典があり、ざっと見積つたところ新幹線を使う割には思ったより安く行けると云うことで、喜んで皆様にも声をかけお誘いしました。

どうやら参加して頂ける方が、十五名前後の目安がつき、

ホツとしました。

ところが後日、旅行社からの報告では、現地と交渉した結果、マイクロバス代タクシー代などが意外に高いとの事で、値上げして来ました。シヨックでした。あまり簡単に考え過ぎたかしらと反省し、あの手この手と交通機関を変えて調べてみますが、どうにもなりません。

あれこれと不安な気持が顔を覗かせます。やはり下見に現地に行き、当って見るべきだと思ひました。

それから皆様とお話し合ひの席で、旅費の値上がりも説明し、気持よく諒承して頂き、そして私が見に行こうと思つている事も、口にしましたら、皆様から「そんなにまでしなくともいゝですよ。何かあつてもその時々によつて一歩いゝことをして下さるのだから」とおっしゃつて頂いたり、又お電話でも励まして下さつたり、本当に感謝しました。

その時、神様が私にとゞいて下さいまして、心が決まりました。

弟子達が「わたし達はこゝにパン五つと魚二ひきしか持つていません」イエスは云われた

「それをこゝに持つて来なさい。」(マタイ一四・一七)

一八)

そして、祝福されたことを思い出し、そうだ、イエス様のみ手にゆだね、主に働いて頂こうと、心に決め祈り求めて行くことにしました。すべてを白紙に戻し、只、示された道にお従いして行こうと新しくなって、スタートしました。

さあそれからは神様との一問一答の対話が始まります。

それから或る日、福岡行のバスで一緒になったお友達と、いろいろお話ししている中に、そちらが五月初め私達と、殆んど同じコースで倉敷方面に行かれたことが判り驚きました。早速資料などお借りし、今一度細かい部分を確認したり、注意して頂いたり、教わったりで、本当に有難うございました。たとイエス様に感謝しました。

「汝我に呼び求めよ。我汝に応えん。汝の知らざる大いなる事と隠れたる事を汝に示さん。」（エレミヤ三三・二）
このお約束の聖言に感謝しました。

常に手落ちのない様にと、事毎に祈って参りましたが、途中で又、旅行社から新幹線割引の特典が七月一日からと云うことで、再値上げという不如意なこともありましたが、皆様の祈りに支えられ、助けられながら、すべてが整えられ、準備させて頂くことができました。

いよいよ前日、天気予報もあまり芳しくない梅雨空の降っ

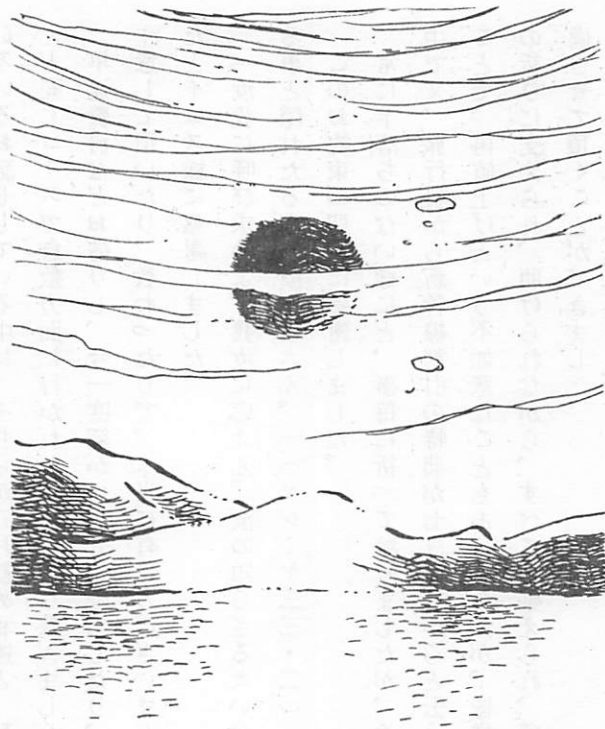
たり止んだりのお天気、雨具の用意などしながら、果して神様がどの様な旅を繰り抜けて下さいます事とか、足元を見ると不安になりますので、只々仰ぎ望み、信仰もって床に就きました。

翌朝、目を覚まし驚きました。雨雲はすっかり拭われ、青空の拡がるよいお天気に、あゝよかった。イエス様有難うございました。と、先ず祝して頂いたことに感謝を捧げました。雨具を取り出し、代りに日傘などを用意していそいそと小倉駅に向かいました。

榎本先生はじめ十五名の方々、全員欠けることなくお元気なお顔が揃いました。お祈りして頂き出発、車中も快適に向かいました。

一日目は、アイビススクエア・大原美術館、そして鷺羽スカイラインを通って宿に入りました。行く先々で感謝しましたことは、旅行日が梅雨どきであった為、人も少なく、その上木々の緑も前日の雨に洗われ大変美しく、鷺羽スカイラインでは水島臨海工業地帯、展望台では瀬戸内海の島々、四国の坂出までも見渡せ感謝しました。

「神のなし給うところは、皆その時に叶って麗わしい。」
（伝道の書三・一一）



宿に入り、夕拝は全員浴衣に着換え、膝つき合わせて本当に裸になってのお交わり、聖言に耳傾け、後いろいろとお話しさせて頂きました。

「おのこの自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリストイエスにあっていていいるのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」

M.

自分を愛する様に、あなたの隣人を愛しなさいとイエス様の思いを知らせて頂きました。

二日目の朝もよいお天気に恵まれ感謝しました。朝拝では、「愛する者たちよ、わたしたちはこの様な約束を与えられているのだから、肉と霊の一切のけがれから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなるうではないか。」

(Ⅱコリント七・一)

の聖言を頂き、私達は十字架によって神様のものとして頂き、祝福を受け継ぐために召して頂いたのだから、聖言にお従いし、清められて、この素晴らしい祝福の特権をしっかりと持たせて頂き度いと、気持ちを引締めて頂きました。

今日は終日マイクロバスでの行程なので、どんなバスかと気がかりでしたが、予想以上にデラックスなバスのお迎えで、閑谷学校―備前焼窯元―後楽園と、ゆっくり寛いでの旅で感謝しました。

私達の案内役のバスガイドさんが新米さんで、虎の巻と首っ引きでの説明、その一生懸命な姿が本当にほゝえましく、声援を送ってあげたい様な気持ちでした。

備前焼の窯元では、陶工がそれぞれの器に形作られ、棚に

(ピリピ二・四〇五)

並べられて出番を待っています。

時が来て、窯に入れられ焼かれた後、どの様な傑作ができるのでしょうか。只、単なる焼もの、工程を見る感じではなく、何か語りかけてくれている様で、親しみを覚えました。

生かされている者として、造り主なる神様と造られた者、陶器師と陶器の聖書の箇所を思い起させて頂きました。

最後は後樂園を一巡り、冷たいお抹茶で一息入れ、岡山駅へと向かいました。

途中、二、三の方が気分が悪くなれましたが、守られて、皆さんと一緒に、元気に帰路に着くことができました。

祈りに応えられ、お天気をはじめ何から何まで祝して頂き、予定の行程を思い以上に、順調に楽しく運んで頂き、無事終えることができましたと、本当に心から感謝し、主を崇めさせて頂きました。

小倉駅に着き、改札口で皆様とお別れして、車に荷物を乗せかけた時、ハツとしました。私のバッグがないのです。たまたま榎本先生が一緒でしたので、先生と駅長室に駆け込んで、事情を話し手続きをしましたところ、はつきりするのが九時頃とのこと、車に帰り先生がお祈りして下さいました。私は戻って来ることを信じますが、一方では私の不注意で

なった事、もし戻って来なくとも、この旅行では云い尽くすことのできない程の大きなお恵みを頂戴したので、この位の事は小さな事と、生意気な思いで平然としていました。却って子供達が心配してくれる有様、でもやっぱり九時が待たれます。ところが帰り着いてしばらくして、八時二十分頃、博多駅からの電話で「ありました。お預りします」とのよい知らせ。それも心あるご親切な方が忘れ物を気付かれ、拾って遺失物係にわざわざ届けて下さったとの事、しかもお名前もおっしゃらずに置かれたとか、本当に有難うございました、こゝでも主のご愛を示して頂きました。それに反し、自分の傲慢さを恥入るばかり、この様な私ですのに隣で頂き、ただ黙するのみでした。

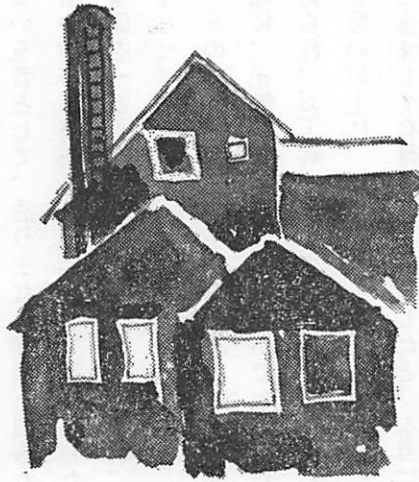
この度の旅行は、この様なハプニングで幕を閉じたのですが、神様は誠にドラマチックな旅を展開してみ手の業を示して下さいました。

「人の心には多くの計画がある。」

しかしただ主のみ旨だけが堅く立つ」(箴一九・二一)

只、空しくなって主にお従いした時、主の祝福のご計画がこの様に素晴らしく、何一つ欠けることなく行って下さいますことを、心の奥深く刻んで頂きました。

「水を汲んだ僕たちは、知っていた」（ヨハネ二・九）
蔭にあってお祈り頂きましたことを深く感謝致しますと共に、今一度主を讃美させて頂きます。



エステル会旅行に参加して

野村 美恵子

かねてから倉敷・鷺羽山コースの旅行をしたいと思いがら、新幹線ができてから、いつでも行けると思っていましたら、今までチャンスがありませんでした。この度エステル会で、姉妹方と共に念願の旅行に行かせて頂き、ほんとに恵まれた楽しい旅を与えられ感謝致しました。

朝早いで目ざましをセットしたはずなのに、どうしたとか「ベル止る」の方に動かしていたため、主人に起される仕末、あわてて出かけたので、二、三分歩いた所で「眼鏡を忘れた」との思いに心が騒ぎ、「今なら間に合う」と走って帰り「眼鏡を取って下さい」主人は「ない」と云う。あせってバッグをさぐったら一番下にちゃんが入っていました。

忘れものがないようにと十分準備しておいたのに、急に忘れたと思うのはどうしてだろう。年のせいかな？とちょっぴりシヨック。でも無事間に合ってよかった。

イエス様有難うございました。こんな愚か者故主なしでは歩けません。

小倉から新幹線で二時間半、新倉敷までほんとに楽しいひ

とときでした。日頃は、お互いゆっくりお話もできませんが、信仰の事・家庭内の事等々心を開いて語り合うことができ、もつとこの時間がほしいと思う程早く新倉敷に着きました。

倉敷紡績工場跡のアイビススクエアで昼食。紡績工場の元の姿を止め、それをよく生かして食堂・展示場・ホテル・文化施設と利用されているのを感じしながら、柱のかけで、若い女工さん達が泣いていた等説明され、テレビの「おしん」を思い出したりしました。それからいよいよ大原美術館へ、本館・分館・工芸館等々すばらしい美術品の数々。私はここだけで一日かゝると思えました。

倉敷を午後二時三十分に出て、鷺羽山までのスカイラインの展望も九州と違つたおもむきでした。瀬戸内の風景を眺めながら、全て近代的で、人の手が加えられているのが口惜しい気が致します。水島コンビナート、又下津井から四国坂出にかけてられる大橋の工事中の有様、もし再び来る事が許されるならばその時は見事な橋がかゝっているだろうと想像しながら、鷺羽山ホテルに入りました。岬の突端にそびえるホテルから海を眺めながら、夕拝・朝拝と、集会を開いて頂いて靈の恵、肉の恵と、神様のご愛のうちに常に保って頂いて感謝の外はございません。翌二十五日は、国宝である旧閑谷学

校（講堂）・備前焼の登窯を見せて頂き、元禄十三年に十四年間の歳月をかけて造られたという後楽園、いずれもすばらしい所ばかりでした。

「ぶどうの木に出したので旅行記を書いて下さいませんか。」と大田姉に声をかけられた時、これは大変だと思いました。何も記録していませんし、文才のない私は、とてもとおことわりしましたが、良い文章で、人にほめられる為ではない、と思いなおして書き始めましたら、まとまりもないものになりましたが、私はもう一度恵みの中の二日間の旅をたどらせて頂いて喜びと感謝でいっぱいです。旅行の前から労して下さった大田姉には心から御礼申しあげます。

六月二十四日夕拝

「おのおの自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリストイエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。」

(ピリピ二・四一五)

エステル会旅行記

木 田 百 代

「あなた方が信じて祈り求めるなら何でも与えられます。」

(マタイ二一・二二)

今年こそエステル会の旅行実現をと切に祈り求めてまいりました。六月二十四日・二十五日と梅雨明けの時期ではありましたが、前夜からどしゃ降りの雨。三年振りの旅行なのになと思いつつ、雨具の準備に色々心づかい。でも明日はきっと晴間を与えて下さると信じて祈り、やすみました。明け方近く、主が備えて雨もすっかり止み、快適な旅立ちとなり、少し早目に黒崎駅へと急ぎました。

赤間・折尾・黒崎・八幡・新中原と次々に乗車されて、小倉の新幹線のホームに牧師ご夫妻と会員有志十三名全員集合しまして、さまざまの事情の中から健康を主から許されて旅立つことのできることに感謝して、小倉 八時二十分ひかり一一四号の車中の人となりました。

参加者平均年齢五十七、八才、総勢十五名、三列貸切で、前後両隣と楽しい語らいが始まり、新倉敷までの二時間半があつという間に過ぎました。そこから在来線に乗り換え、倉



敷駅からタクシーに分乗してアイビースクエアに着き、昼食をいただきました。

その後支配人の案内で、アイビースクエアの由来を聞きますと、倉敷紡績の最初にできた工場であること、その後、手を加えて現在はホテル・文化施設等を営業し、倉敷市の中心街の憩いの場として再利用されているようでした。その他展示場としてある紡績工場の跡へ案内されて説明を聞きながら、改めて明治中期の名残りをとどめているところどころに感銘深く見学いたしました。

愈々目的の大原美術館へは五分位で徒歩で行けます。大原美術館の行手に倉敷川が横たわっています。倉敷が紹介される時は必ずこの風景が出ますので、私共は初めてまいりました様な感じがしません。昔はこの川を利用して、米等を運んでいたという。船着き場があり、柳と白壁と黒の貼り瓦の家並が、見事に調和して、伝統と文化の街をいやが上にも感じるものがありました。

早速美術館に入館いたしました。本館だけと思っておりますが、東洋館・工芸館・分館とそれぞれの分野に分かれて、じっくり見学するのに少々の時間では不十分であることを思い知らされました。美術館のはじまりは洋画家の児島虎次郎

が永年にわたり蒐集した内外の作品を、大原孫三郎なる人が児島虎次郎の業績を記念するため美術館を造り、大原家代々の遺産として護ると共に、館の内容の充実につとめて美術文化の発展に貢献されて今日のような素晴らしい美術館として親しまれているのだと思います。

三時頃までの予定を少し時間を延ばして観賞した後、中型タクシー三台に分乗して、宿泊する鷺羽山グランドホテルへと車は走ります。スカイラインを経由して、水島工業地帯を眼下に眺め、大工業都市に発展して北九州の工業も進出していると聞かされました。この埋立地にとりどころこんもりとした山があるのはすべて島だったと聞き、ここにも自然の失われる姿を見ることができました。途中展望台に寄り、四国や瀬戸内海の大小さまざまに点在する島々をしばし見とれておりました。この自然美も何年もしないうちに変えられて異った風景になると思うと一沫のさみしさを感じました。もうすでに四国への瀬戸大橋の杭が打たれ、工事が着々と進められていました。夕方、ホテルの方に到着いたしました。瀬戸内海絶景の一等地と言うキャッチフレーズで、民謡にもうたわれた下津井大室海岸の波静かな入江で行きかう漁船も長い閑な風情をかもし出していました。

早速入浴、夕食を済ませ、浴衣姿で一部屋に集合して今日一日主の恵みにより此の地まで導いていただき感謝会がもたれました。

「おのおの自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。」

(ピリピ二・四)

「愛する者たちよ、私達はこのような約束を与えられたのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分を清め、神を恐れて全く清くなるうではないか。」

(コリント第二七・一)

「気をつけて神の恵みからもれることのないように、また苦い根がはえ出てあなた方をなやまし、それによって多くの人が汚されることのないようにしなさい。」

(ヘブル十二・十五)

「わたしはまことのおどろきの木、わたしの父は農夫である。私につながって枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものはもっと豊かに実のらせるために手入して、これをきれいになさるのである。」

(ヨハネ十五・一一二)

二日目九時にマイクロバスに乗車して、日本で最も古くできた旧閑谷学校跡へ児島の海岸線を通り、山あいの細い道を

走ります。閑谷学校ははじめて聞く名称で一体どういうところか、予備知識もなくまいりました。この山奥に備前藩主の池田光政が、庶民のための教育道場として建立して、広大な山野からの収益によってすべてを経営されていたそうです。

建物の特色として屋根瓦がすべて備前焼を用いて、講堂の床板は特殊な塗料で仕上げ、今でも鏡のような光沢を失っておらず、現在は特別史跡として、特に講堂は国宝として保存されています。学舎跡は青少年教育センターの閑谷学校宿泊施設として、研修の場として使われているようです。広い敷地の中に縦長い池に鯉がおよぎ廻り、見学者からふを与えられても余りがつがむさぼる様子もなく自然にかいならされて、悠然と泳ぎ廻っている様に暫く足をとめました。

次は備前市伊部の窯元をたずねました。その途中登り窯の煙突があちこちに並ぶちよつと異った風景にさすが焼もの山里という趣きを感じながら榊原さんの窯元に立寄り備前焼の工程・種類等、一つの作品を完成するのに、土こね・ろくろ廻し・乾燥・窯入れと長い時間をかけて、丹念に作られる過程を聞いて日頃より備前焼に魅せられている私にとって手作りの素朴さ、手作りのぬくもり、化粧をしない素顔に接した感じがいたしました。

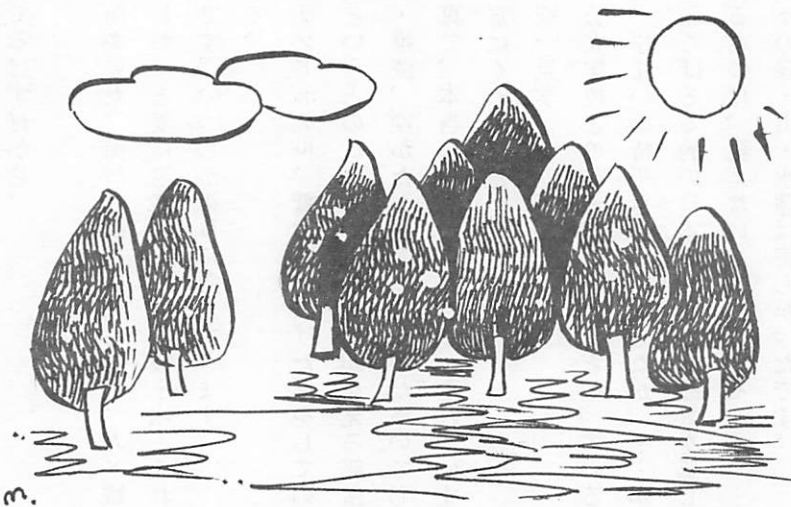
最後に、日本三名園の一つに数えられている後楽園にまいりました。何時来ても素晴らしい眺め、庭園の造景、すべて絵になる風景を楽しみながら散策いたしました。

二日間の旅ではありませんでしたが、会員全員健康をもって楽しい旅に終止符をうつことができました。色々とエピソードを残しながら、懐い出を深め、主にある兄弟姉妹として、私共一人一人が、更に深く主を知る機会を与えられたことを、この上ない収穫だったと心から感謝いたします。

とりとめのない拙ない旅行記となりました。推察補足して舌足らずのところ、おくみとりください。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。」

(テサロニケ第一 五・十六)



エステル会の旅行

伊規須 泰子

エステル会の旅行、出発!! 昭和五十八年六月二十四日の早朝のことです。小倉駅に集まった十五人。心は子どものようにしゃいでいますが、大人ですからじっとガマン。お祈りして新幹線に乗り込みました。

一、倉敷アイビースケアにて、

赤レンガに蔦(アイビー)、若者好みのしゃれたやかた館、でも、でも、昔の紡績工場の跡をとどめているところを見ている間中、

「わたしはまた、日の下に行われるすべてのしえたげを見た。見よ、しえたげられる者の涙を。」

(伝四・一)

のみことばが、心に鳴っていた。昔の工夫されている器物のかげに、構造のかげに、女工哀史がたゞよっている気がして致し方なかった。

二、大原美術館にて、

数々の名画の底に流れる敬虔な姿勢を感じとれたが、美術に眼のきかない私は、そこ迄でおわり。ゆっくりと

一作・一作を感じとる程、よみとる程に見てみたい。何かを訴えてるはずだから。

三、海

瀬戸内海を見た。海は人間を裏切らない。たゞ眺めている丈でじわっと愛に包まれる。海…波…水…それだけでいいのです。いつしか祈りに変わってきます。

四、ホテルにて、

鷺羽グランドホテル、鷺が羽を広げた形をしているので鷺羽山ということのこと。二面から海が見える部屋で集会、お証・雑談、ゆかたがけでくつろいだ集いでした。後日の写真で、本当にくつろぎが、うつされていました。主の前に常にくつろぎたいものです。

五、「閑谷学校」見学

最初の公立学校とのこと、儒教が基となっている由。昔の建築、佇まいの精巧さには感嘆したが、……かたじけなさに涙こぼるるの日本人好みの雰囲気を感じた。我らが見るものは、見えないものに眼をそぐ。……しかし、木々の緑・川・水蓮は美しかったです。

六、備前焼窯

陶器師の手に粘土があるように……まさにそのとおり、

たぐさんのものがありました。形づくる迄は陶器師の手だが、窯に入れると、火の廻り具合等は、窯まかせ、出てくる迄出来ばえはわからないそうで、そこが又面白いところだそうです。並べ方・火加減等は、やはり名人芸なのでしよう。備前焼は高価、とてもとても買えませんでした。神様の手にゆだねて、どのようにでもつくりかえてほしいと思いました。

七、後楽園にて、

美しい景色に堪能して、茶店で一休み、冷たい抹茶ときびだんごに舌つゞみを打っていたとき、問いかけられました。

「同窓会の集まりですか?」「え?え?まあ……」とごまかした私。男性一人に、それはそれなりに年とった十人の女性。そう見えるのかなあ? 間違いなく教会という同窓か!! と、一人うなづいた一こまでです。

八、おわりに、

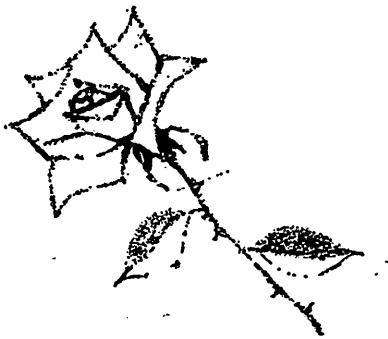
丸二日間のエステル会の旅行は、無事に終わりました。何一つ計画せず、たゞついて行くという楽な二日間でした。計画し、手配して下さった方のご苦勞に感謝します。ついて行く、とはなんと楽なことでしょう。私には

イエス様という良き導き手がいらっしやいます。毎日ついて行きさえすればいいのです。

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つゝ走ろうではないか。」

(ヘブル二・一二)

ありがとうございました。



青海島、秋芳洞を訪ねて

大 田 邦 子

祈り願って参りましたエステル会の一泊旅行、前日より蒸し暑く不安定なお天気、天気予報もあまり芳しくなく案じておりましたが、翌五月二十六日、当日は大雨洪水警報が出ておりました。でも警報も何のその、皆さんはずんだお声のご挨拶、十五名全員小倉駅に集合、八時五六分「まつかぜ四号」でたのしく長門市に向け出発しました。

途中青空も時折のぞく天候に、皆さんホツとした表情で、「よかったですね」と感謝しました。

予定どおり長門市駅に着き、そこからそれぞれタクシーに分乗、第一目的地の青海島に参りました。さすが天候の加減でしょうか、行き交う人も少なく、静かな遊歩道入口より散策をはじめました。

この頃よりお天気があやしくなり霧雨まじりの少し強い風でしたが、日本海の荒々しい海は更に豪快さを増した感じでした。灰色の海に色々と名付けられた奇岩の出没、打寄せる荒い水しぶきの浪の白さが印象的でした。又時折雲間より洩れる日ざしに変化する海や岩の色などが一層風情を添えてく

れました。

日本海の荒波に浸蝕されて出来た断崖絶壁や洞門など、まるで動きのある水墨画を見るような思いでした。

美しいこの自然の景色を満喫させてくれる遊歩道、本当によくできていると思いました。

遊歩道を出てお天気を気遣いながら鯛の養殖場を見学、約一時間半の散策を終え、待って貰っていたタクシーで橋長旅館へ、こゝで昼食をいただき休憩し、西長門リゾートホテルの迎えの車の来る迄、海の幸のお土産買いに賑わいました。バスに乗るや皆さん朝早くからのお疲れや、今日の予定のコースが終ってホツとされたのでしよう気持よくコツクリコツクリ、お天気も大雨どころか、だんだん回復、神様のお恵みを本当に感謝しました。

約一時間後、木立に囲まれ海に面した明るいホテルに到着、それぞれお部屋が割り当てられました。

どのお部屋も見晴らしがよく、松原から海に向かって開けて行く眺めは、私達の旅の疲れをいやし、ゆっくりくつろがせてくれます。まず先生ご夫妻のお部屋で集会を持たせていただきました。

「わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って出て来な

い。見よ冬は過ぎ、雨もやんですでに去り、もろもろの花は地にあらわれ、鳥のさえずる時が来た。……

わが愛する者よ、わが麗わしき者よ、立って出て来なさい。

307

(雅歌二・一〇—一五)

この聖言をいただき、"エス様の十字架によって平安が与えられているのだから、立って出て来なさい"と教えられました。

私もどんな折にも"ハイ"とはっきりした態度でみ前に出て行く事のできます様にと、今一度十字架を崇めさせていただきました。

本当にお恵みのひとよきでした。

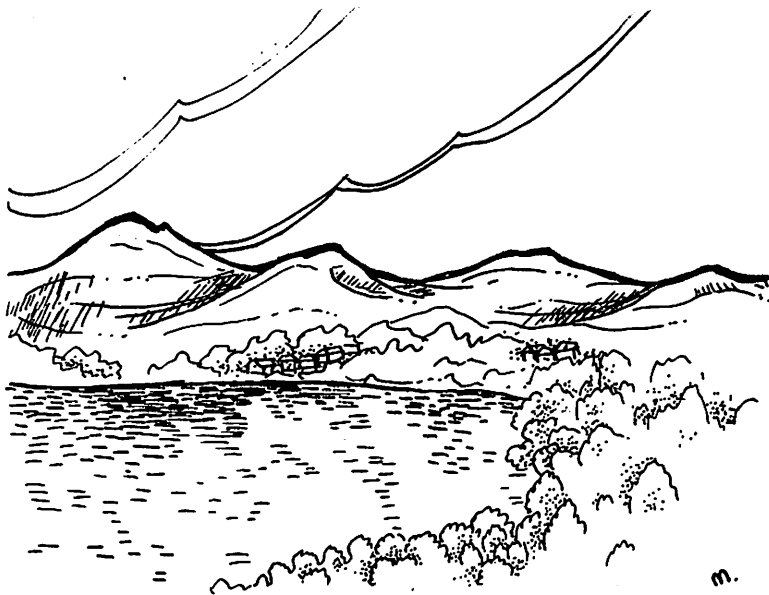
すべてを離れ、主にある姉妹方と共に神様の大きなご愛、そしてこの大自然の懐に浸らせていただき、感謝あるのみでした。

有難うございますと神様に心から感謝を捧げました。

この後各自のお部屋でしばらくゆっくりさせていただき、大広間での夕食を皆さんとご一緒にたのしみました。

丁度食事の終わった頃、外は何時の間にか素晴らしい夕焼けに染まり、皆窓際に寄り、刻々変化して行く色の美しさ、ス

ケールの大きさにしばらく見とれていました。本当に素晴らしい夕焼けでした。



夕食後この様にくつろげる機会もなかなかないと云うことで、エステル会を持たせていただきました。

この度の旅行は一泊という事もありまして、一応子育てを終えられた方が多く、これ迄の経験を通し、お証しやら、具体的問題、疑問などぶっつけ合いました。その中で私達が一番はつきりしないのが「主のみ旨が何であるか」と云うことでした。

それについて先生ご夫妻が実際に経験された事、現在祈っていらっしゃる事などを例話としてお話して下さいました。

つい時間の経つのも忘れ夜も大分更けて参りましたので、尽きないお話に終止符を打ち大広間を出ました。

廊下づたいに各自のお部屋に戻ります途中、「早く々々」の声に小走りに近づきますと、エレベーターに先生ご夫妻と二、三の方が乗っていらっしゃるので、私も急いで乗り、又後から来られる方に「早く々々」と声をかけ、満員になりましたので、ボタンの「閉」を押され扉が締まりました。そして先生が「上り」の③を何度か押されますが一向に動きません。肩を寄せ合う様に詰まった密室の中、シーンと静まったのも束の間、「あら変ね」とか、「故障知ら」などと、どよめきが起りかけましたら、どなたかが「こゝ三階じゃない」

との声にびっくり、「エッ!!」と云うことで大笑い、まさしくこゝは私達のお部屋のある三階なのです。エレベーターが動く筈がありません。大広間が中二階だったので、先生もちょっと錯覚されたのでしょうか。

でも私思いました。先生ご夫妻がエレベーターに乗られ、次々と声をかけられるまゝ、誰一人として疑うことなく、牧師につぎいたことです。何と前田教会のエステル会員「汝我に従え」の聖言通り、如何に従うことが身についておりますことか、柔順さが証しされたと思います。

エレベーターから出てお部屋に戻ります途中、先生が「弘法も筆の誤り」と云うでしょう。牧師も何とやら……で」とおっしゃられ、又々笑い。大変ユーモラスな出来事で感謝の一日が終わりました。

二日目は前日と違って大変良いお天気に恵まれ、朝早くから皆さん、ホテルの庭づたいの海岸に三々五々散歩に出かけていらっしやいました。

朝まず先生ご夫妻のお部屋で朝拝を持たせて頂き、次の聖言を与えられました。

「主に喜ばれるものがなんであるかをわきまえ知りなさい……」

愚かな者にならないで、主のみ旨がなんであるかを悟りなさい……

よるしく御霊に満たさるべし……

キリストに対する恐れの心をもって互に仕え合うべきである。」

(エペソ五・一〇—二〇)

昨夜のエステル会での「主のみ旨」を今一度はっきりと示していたゞきました。

朝食後、今日は榎本先生はじめ六名の方がご都合で北九州にお帰りになられるので、その組と、もう一組、秋芳洞を訪ねる組と、一〇時過ぎホテルの玄関でお別れました。

秋芳洞行きの榎本夫人はじめ八名は、ひなびた河川駅に出まして、列車・バスと乗り継ぎお昼過ぎ秋芳洞のバスセンターに着きました。

私は初めて見る東洋最大と云われる鐘乳洞とあって興味深く出かけました。

入場券を求め歩き出しますと、もう外界とは異なり、歩道の横や橋の下を流れる鐘乳洞からの水は清冽そのもの、吹く風も肌にひびやりと心地よく、カーデイガンが羽織りました。

橋を渡って洞穴に入るや一瞬その暗さに戸惑い、照明を受

けて見えるスケールの大きさに又驚きました。神秘的な暗黒の洞穴、幽玄の世界に吸い込まれて行く様な思いでした。

石灰分が織りなす様々な光景、お皿や柱そして傘の形など大変面白く、巨大な作があるかと思えば繊細な石灰の芸術品の数々に、圧倒されました。頭上を見ればこの世を抜け出て暗黒の未知の世界に迷い込んだような幻想に浸らせてくれる「青天井」など……。首のたるさに我に戻り、驚異のため息の連続でした。

三億年もの年月を経て造られたと知り、こゝに立って改めて、人間の無力さ、はかなさを感じました。逆に天と地とすべての創り主でいらっしゃる神様の計り知ることのできない大きな御力に胸打たれる思いでした。

「わたしはあなたの指のわざなるを見、あなたが設けられた月と星とを見えます。人は何者なのでこれをみ心にとめられるのですか、人の子は何者なのでこれを顧みられるのですか」

(詩八・三一—四)

無きに等しい者を顧みていたゞきますこと、思いを新たに感謝しました。

洞穴を一巡してエレベーターで秋吉台の一角に顔を出しま

した。そして散策をかね展望台に出ました。

こゝは先程迄の息詰まる様な暗黒の洞穴とは対照的な明るさ、爽やかな青空のもと、遙か彼方にまで広がる高原、その緑の中に群れをなした石灰岩の起伏が大変面白く目にうつります。思わず両手を広げ深呼吸をしました。ゆっくり楽しみ遊びたくなる見渡す限りのこの眺めでしたが、帰りの時間が気になりますので思いを残し、秋芳洞バスセンターに急ぎ、国鉄美禰駅より「さんべ三号」で帰路に着きました。

「見よもろもの国民は桶の一しずくのように、はかりのちりの様に思われる……目を高くあげて、だれがこれらのものを創造したかを見よ……主はとこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなくまた疲れることなく、その智慧ははかりがたい。」

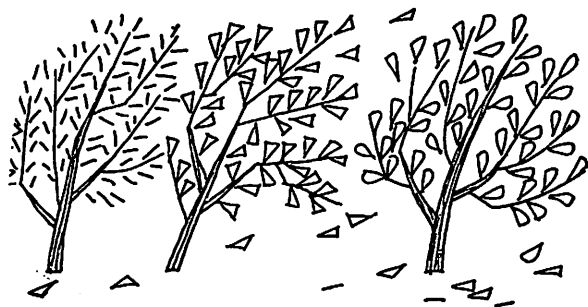
(イザヤ四〇・一五―二八)

短い旅でしたが、イザヤ書の聖言をしみじみ味わいつつ、神様の創造されました海に、空に、洞穴に、草原にと変化に富んだ傑作を、主にある姉妹方と共に、目で見、手でさわり、足で歩み楽しませていただきましたお恵みを心から感謝致しました。

本当に有難うございました。

この素晴らしい旅が、主のみ手に守られ、導かれて、つつがなく終えられましたことを、み前に心からの感謝をお捧げ致します。

(昭和五七年記)



「かいわ」

伊規須 太郎

終わりの言葉

（ものが言えなくなった時、よくよく
お願いしたいこと）

かいわ

伊規須 太郎

T子ちゃん（七才）「伊規須先生……何座？」

わたし「エツ何座って？……ウーンわからないなあ」

T子ちゃん「あーあご年配の方って、わからないんだから」

（話題が「あたま」のことになりました）

わたし「わたしのあたま、はげてるでしょ」

E子ちゃん（五才）「……………」（いたわるようなまなざし）

（やさしくやさしく）「んや ず…………と毛があるから」

わたし「ありがとう」

（心あたたまる一時でした）

☆（担当医師の方へ）お世話になります。よろしくお願
いします。しかし、ことさらに延命を計ることは私
の願いではありません。

☆（クリスチャンの方へ）讚美し聖書を読んで祈って下
さい。最後の時、特にサタンの力が強く働いて来ま
す。祈って助けて下さい。

☆お答えは出来ませんが、分かっています。有難うござ
います。……………

皆さん、さようなら。

（主の血はこんな者を義なる者として、御国に受け入
れて下さるから感謝します。）

（主よ、私の魂を御手に委ねます。）

「こういうことをお願いしようと思う理由」

(1) 聖書のお言葉から。

「土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹きいれた」(創二・七)、「人の心に永遠を思う思いを授けられた」(伝三・十一)。神様から与えられた「たましい」は、肉体の五感よりも深い所にあります。神様がお取りになるまでは、覚めています。

(2) 礼拝説教(一九八三、七、二四)から。「魂は覚めている、最後まで讃美し祈って助けよ。もう分かるまいと、葬式の話などするな」

(3) 故末永師の最後、「戦いが激しい、祈って欲しい」

(4) 人事不省から覚めた人の体験談。

(5) 私の失敗(某氏の最後に立ち会って)

以上

(一九八三、八、一四記)

私の 祷告簿

伊規須 太郎

私の祷告簿には沢山の書き込みがあつて、随分汚れていますが、私が神様から与えられた八ヶ条が、冒頭に記してありますので概略を紹介します。

第一条 神様のご熱心 イザヤ六二・一

第二条 私を選ばれた御目的 ヨハネ一五・一六

第三条 神様とのパイプ ヨハネ二一・一五―一七

第四条 使命 ヨハネ二一・一五―一七

第五条 神様のみ思い(忍耐、顧み、憐れみ)

ヨハネ二一、ルカ一〇、詩篇五一、ピリピ二

第六条 歩み イザヤ六二・六―七、マタイ一四・一八

詩篇六三・五一六

第七条 望 ロマ四、マタイ三、エゼキエル三七、

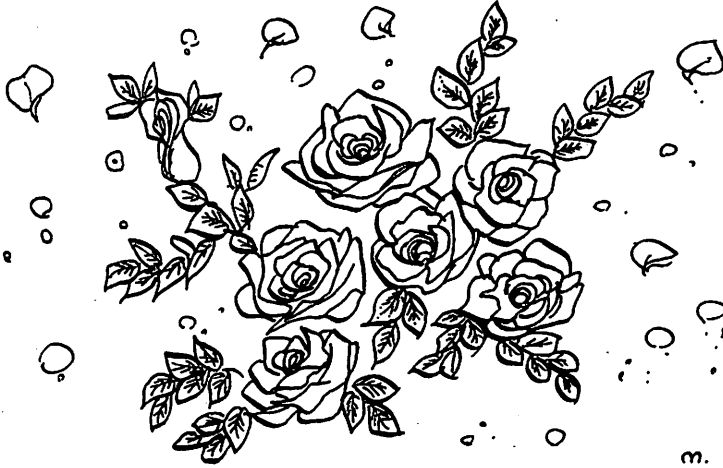
箴言二一、エレミヤ一八、詩篇一〇四

第八条 祈り ハバクク三、ピリピ二ほか

今が青春

池田操

北九州市五市合併になって二十周年になります。ふり返れば一昔の様であるが静かに思いをはせ、一人ごとをつぶやく。あの時、病の床にありながら生死をさまよいつづけた私が、今元気で主に支え守られながら生きている。二十年も生きているのです。自分だけの力では絶対にこの地上に生存して



事はできなかつたと思います。

「主はわたしの牧者であつてわたしには乏しいことがない。たとえわたしは死の谷を歩むともわざわいを恐れませぬ。あなたがわたしと共におられるからです。」

(詩篇二十三篇)

このみことばを信じて生きています。そのように神様は導いて下さいます。榎本先生ご夫婦、教会の皆様方の祈であり、お世話下さった医師、市、兄妹の援助でもありました。

現在は姉、姪、私と三人共に暮らして十年過ぎました。南向きで日当りが良く、庭は狭くとも道をはさんで前は公園、明るくて午前中は西側からの涼しい風が入る。どちらかといえば夏向きの家です。この主人公は姉。私の体を心配して一番よい部屋に休ませてくれます。こうゆう時の姉妹っていいものですね。

二度目の心臓手術後、市から二十万円の請求書が来ました。「下の段に支払いできない人は印を押して下さい。」と書いてあります。私は一応自分の現状を話し、主人の遺族年金生活ですので医療費負担の申請をしたものですから、支払いできませんとぼんと印を押しました。三ヶ月間

内に再度請求があれば支払うと思っていましたが出来ません。さあ旅行をして楽しもうか。何か趣味でもしようか。四十五才からの手習です。子供の頃からオルガンを弾いてみたいと思っていました、オルガンよりやさしく弾けるのはエレクトーンだと聞いていました。それでどうしてもほしくて不足の分は姪が出してくれましたので早速買いました。(こうゆう不届者がおるから財政困難で医療問題がむづかしくなっています。)

さあてドレミの勉強です。すべて一年生。習うほうも頭がいゝからすぐ忘れる。教える方はもつと大変。疲れて頭にきた様です。今ふり切られては大変だと、こちらもがむしやらに後について行く。鍵盤を押さえて弾く指はまるで「カエル」がはねて飛んでるか、おかしいと云っては笑ってはねてるかの様で、人様の前では見せられない有様でした。最近「いくしみ深き友なるエスは」と讚美歌が一曲弾けるようになり、又「家路」「野バラ」「浜辺の歌」「旅愁」「ロミオとジュリエット」など姪が習っては教えてくれて、好きな曲を楽しく弾けるようになりました。嬉しくて感謝しております。

市政二十周年記念として八幡市立美術館で開かれている小磯良平先生美術展の鑑賞をさせて頂きました。どの作品

も気品があふるゝばかりで、心を豊かにしてくださいと一切を忘れさせてくれました。

心臓病を病んだ初めは、自分の運命だとすべて諦めがちでしたが、このように新しく変えて運命をも切り開いて下さった主に感謝します。神のはかり知れない賜だと思えます。

「わたしの生きている限りは必ず恵みといつくしみが伴うでしょう。」(詩篇二十三篇)

神様の約束のみ言を信じて行きたいと思えます。ミシンも時を教えるかのように「ガツタン、ゴツトン」いいながら、「今が青春、今が青春」と語っているようです。

毎週会堂のお掃除を下さる皆様方有難うございます。厚くお礼を申し上げます。

編みながら想う小さなこと

野 口 米 子

昔のことを思い出したり懐かしがったりするのは、歳をとった証拠だそうです。

私もご多聞にもれず、昔の友達、それも終戦直後、焼跡に建ったレンガ造りの社宅で少女期を過ごした同じ学年の女の友達がしきりに懐かしくなりました。

その頃は車も少なく、道路でゴム飛びや縄とびを喜々として遊んだあの頃が懐かしくてたまりません。そんな私の願望が実現しました。宗像のやっこ(靖子)ちゃん宅で、まっちゃん(松下)、えいこ(恵子)ちゃん、のり(紀子)ちゃん、たっちゃん(立川)、陣内さん(何故か彼女だけ名前のまま)それによねちっん(私)が集まりました。

そして楽しい時を持つことができました。

云い出しっべの私の葉書への靖子さんの返事のハガキの表書きの下の片隅に一つの短歌が書かれてありました。

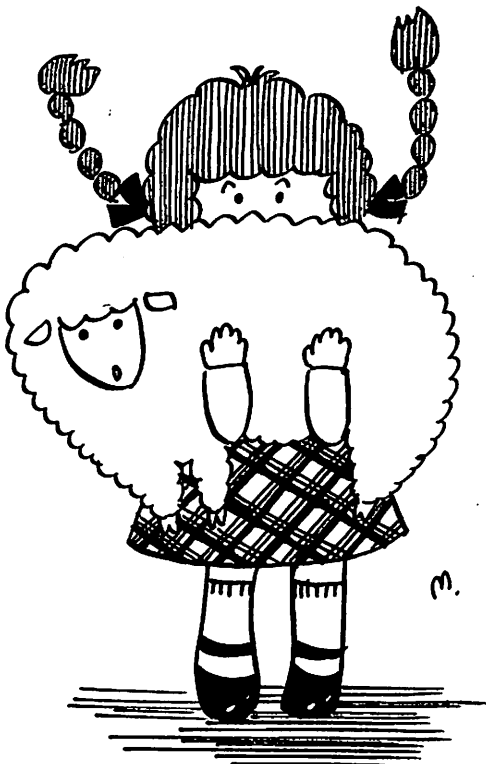
添乗員、なりたる日より身障の

子等みな吾子のごとく思えり

この短歌に刺激されて私も何か書いてみようと思いました。そしてその時の自分の気持のありのままを書き、彼女宛にハガキにしたためて送った詩が、「赦して下さい」です。

生れてはじめて作った下手な詩ですが、これが病みつきで散文詩ばかり書くようになりました。そして詩だけではもの足りず文章も綴る様になりました。

このような一つ一つを一冊のノートに収めました。そして「編みながら想う小さなこと」と名付けました。思いをこめて。



「詩」

赦して下さい

野 口 米 子

イエス様 赦してください
いつも、いつも あなたを

思っていたのに

私の小さな左の耳が 罪を犯すの

グレーの細いコードから

流れて来る音が

私を捕えて 離さないの

どうしてもやめられないの

ガラ、ガラと 雨戸を明けて

空いっぱい星のある朝

一番にお祈りするの

「今日一日 あなたに依って祝されますように」って

「ダビデの子孫として生まれ 死人の中からよみがえつたイエスキリストをいつも思っていないさい」

この聖言葉 いつも頭の中にあるけど

グレーのコードを通して

伝わって来る男の人や女の人声の音が

そして快いメロディーに

私は 占領されてしまうの

太陽がかくれて 星が輝く

床に入る時 やっと

「天のお父様 ありがとうございます……」

……………。

と祈りはじめるの

こんな私 赦して下さい 赦して下さい

「編みながら想う小さな事」ノートより

(昭和五五年記)

詫 言 (わびごと)

大きな山 幾度

女はこの山に泥を ぬりつけたことか

あまりの山の大きさに

生まれて十九年しか経たない女には

とらえようが なかった

それは無口で 奥の想いも 考えも

その感情すらも おもてに現わさない

女は懸命に知ろうとした 解ろうとした

女なりの手探りで……

山が 家に帰る時 空にはいっぱい星

家は 山にとって一時の休息の場

そして抱き 深い眠りと 安らぎの場

太陽が登ると又 山は扉を開けて

自分の世界へもどってゆく

女は暗中模索で 山の世界を知ろうと努めた

しかし 山は 己の世界の一片さえも明かさなかった

女は山の目の中に そのわずかでも知ろうとした

だが わずかな会話は

相談のすきも入れなかった

女の一方的な愚かしい行為は

山にきたない泥をぬりたくった



山は 自分で黙って汚れた顔を拭き

又 平然として 己の世界にもどってゆく

ああ
嗚呼 この二十六年

山と女はこの繰り返しを何度した事だろう

しかし年月は 山の本性を女に教えてくれた

いや本当に解ったのではないかも知れない

やっとうすれば 山が 緑色に輝くか

その方法をたゞ知っただけかも知れない

女は しっかり思う

これからはもう 絶対に

山を汚すまい………と

何故なら

だまって 泥まみれに じっと

忍耐している山を見るのは

悲しくてたまらないから

「編みながら想う小さな事」ノートより

(昭和五六年記)

「汝我をえらばず我汝等を選べり」

井 伊 文 子

私は静かな農魚村の貧しい農家の長女として生れました。祖父母に子供がありませんでしたので、祖父の実家の甥（私の父）を養子として迎え、同じ村の万貫マンガンや木俵の問屋の末娘であった母と結婚したのでした。私の小さい頃は、冬から春にかけての農閑期には村の娘さん達が多勢和裁を習うために家に来ておりました。

私の家は熱心な日蓮宗信者でした。毎月一回信者の家に集まってお経をあげ、その後茶菓をいたゞいて散会するお講という集まりがありました。両親が忙しくて出席できない時は長女の私が経本をもってつとめておりました。小学校の頃には经文もすっかり覚えておりました。その頃、母は時として若い頃の話をしてくれました。

「松山の女学校に行っていた頃、隣りがキリスト教会であった。人の話では、キリスト教は人が死ぬると死人の肝を取って六神丸という薬を作って売っているのです、お金が沢山あるのだそうだと人づてに聞いていた。丁度その在学中に、牧師先生のお子様が亡くなられたので、事実かとその事を確か

めようと、友達と肝を取るのは今か今かと首を長くしてのぞき見をしていた。けれど一日中その様子を見る事はできなかつた。もしかすると夜かしら……。」と言います。私も不思議に思っておりました。然しこのキリスト教の話は何か知ら心にひらめくものがありました。六神丸は何の病にも良く効くけれど、たいそう高価なお薬と聞いておりました。

幾年か過ぎて、私も町の女学校に入学致しました。往復八キロ余りの山道でした。その学校には二人のクリスチャンの女の先生がおられました。心の内ではほんとうに嬉しゅうございました。その先生は見るからに気高く美しく心から尊敬致しておりました。一度教会という所へ行ってみたい、教会がどんな所か何も知らないのに、何故にこの様な気持になるのか自分でも分りませんでした。時として、その言葉が私の口から出るらしく、父から大目玉をいたゞきました。「日本の神様があるのによりもよって外国の神様を信ずることはない」と。

二年生の秋の夕方でした。下校の時、友達と二人で山道を歩いていました時、痴漢に逢いました。そこから一〇〇米位坂道を下ると人家のある所で行こうとすると、その人は三米位前に立ちふさがりました。私たちはガタガタふる

え、声も出ません。思わず足を畑の方に入れると、その人は「生意気なやつ、石を投げておち殺してやるからそう思え。」ガタガタふるえる足を元にもどし絶対絶命の時でした。おみかんを満載した馬車が遠くの方からごとごとと音を立てて来ました。「今日はこれで帰してやる。」と云ったかと思つた側面に置いていた自転車で逃げて行きました。友達と二人でものも云わず走りました。友達の家は一キロ位ですが、私の家はまだ三キロ余りありました。今にも後から追いつかれはしないかと力の限り走りました。通学していて身の純潔を失う位ならば退学しようと心に決めて欠席しました。二、三日後母が心配して、町の親戚の家に下宿させて頂く事になりました。日曜日途中の道が不安なので帰らなくてよくなりました。私の胸はえも云えぬ喜びに満たされました。

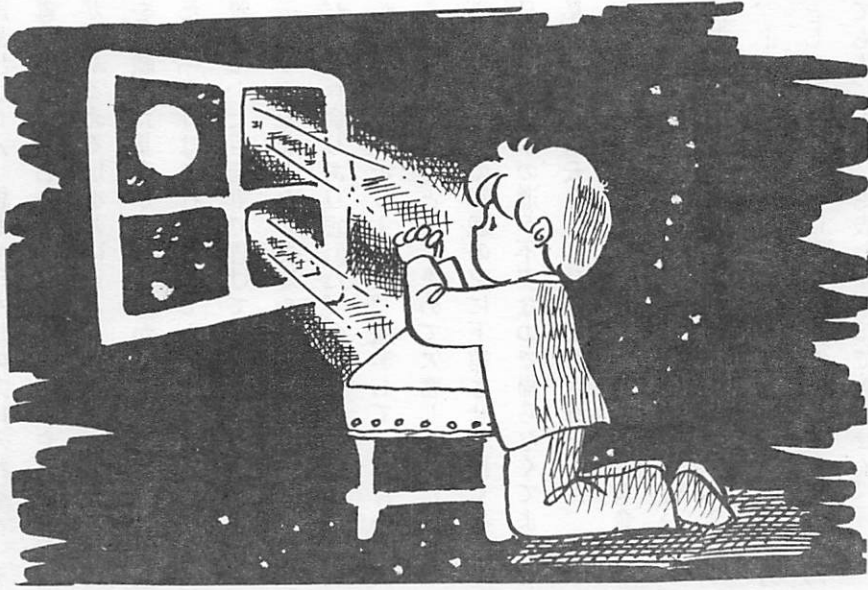
下宿して後の日曜日友達にお願いして天にも登る思いで、待望の教会へ参りました。どんな所かも知らないで、思いのみが先走り感激でいっぱい。……父に反対され、母にかばわれて、……神様は世の基を置かざりし時より長い歲月私を救わんとしてご計画の中に置いていたゞきました。どんなに感謝しても筆にも舌にも表わす事はできません。

そしてはじめて教会に入れていたゞきました。六畳二間位

のたゞみ敷の、そしてパンコの小さい様な板の長椅子が幾つかあり、古びたダルマストーブが置いてありました。大人は四、五人位で子供が七、八人位でした。私は聖書も讚美歌も見たことがありません。その上お若い牧師先生のお話は、エホバとか、ヤコブとか、全く耳なれない言葉ばかり何が何だかわからないまゝ終りました。胸をふくらませて涙の出る程感激してやっど行く事ができた教会でした。でも不思議に心の中は満たされて、ほのかな嬉しさがありました。礼拝後ご年輩の方におやさしいお言葉をかけて頂いて嬉しゅうございました。

神様はこの様にして限りないご愛の中に包んでいたゞき、粟粒にも足りないひなびた田舎の小娘を愛しいつくしんでいたゞきました。

神様は、人一人の魂は全世界よりも尊いと仰せになります。神様は私を救っていたゞく為に、生れる前、いゝえ母の体に宿らぬ前からご愛の中に覚えて頂き、様々の中を通して我に帰れとせまっていたゞいたことを心より感謝いたしております。



汝等今之を知らず後之を知るべし

(ヨハネ十三・七)

井 伊 文 子

学校は実業家山下亀三郎氏創立の「大正の古き女」を創ると目的をかゝげて教育されました。距離は八キロ余りの山路を二時間余り、袴をはき赤い鼻緒の下駄ばきで通いました。冬の朝は人の顔も見えないうす暗い内に家を出て帰宅頃は日もとっぷり暮れていました。それで二年生の時に続き三年、四年生の冬も部屋を借りて自炊生活を致しました。その間借りをしている三、四ヶ月間は何の心配もなく礼拝に出させて頂きました。何もわからないながらも心のどこかにほのぼのとした安らぎを覚えました。四年が過ぎ一同に女大学一冊宛をいたゞき卒業致しました。この後は礼拝に出かけることはできません。何かの用事にかこつけて時として出させていただけました。あまり出歩くと嫁の口がなくなる。遊び歩く派手な女をめとると身代をつぶしてしまうと世の人々の常識のようでした。女は機^{ハタ}くらしいは織らなければ、着物や袴位は縫えなければ、何事も良い嫁に仕上げる為に心をくだいていたようでした。卒業して暫らくしてから、吉田教会の牧師先生

が時として自転車で訪問して下さいました。ほんとうに嬉しく感謝致しました。然し父の渋い顔を思うと牧師先生に申し訳なく、近所の友達のお家の二階を借りて友達五、六人で集会をして頂きました。又私が礼拝に出席できた時はその晩聖書の箇所をお知らせして話合いました。この頃から生涯この神様にお仕えし度いと切に思う様になりました。その為には洗礼を受けねばなりません。聖書も通読していない私でしたが、生涯神様にお仕えしてゆき度い決心を牧師先生にお願い致しました。すると先生はご承知いただき昭和五年六月七日受洗日を決めて頂きました。父に話せば大変と思ひ母にももらさず心の中にそつと包んでその日の外出の用件を作ること心をおくりました。やつとの思いで家を出る事ができました。その日は日本メソヂスト宇和島教会のフランク宣教師がお見えになっていられました。礼拝後フランク先生によって洗礼を受け神の子として頂きました。長い間の念願がかない身がひきしまる思ひが致しました。今からは一層姿勢を正して神様のみ前に清く正しい思ひと歩みをしなければならぬと自分自身の心にしっかりと云いきかせました。只嬉しさに満たされました。足も軽く帰途につきました。両親にないしよにしている事が家に近づくにつれて私の心をゆり動かしませ

ず。でも私は親不孝は決してしていません。今からも両親には誠心から仕えようと思つてゐる。キリスト教徒となる事が決して悪い事ではない。私は心の動揺を自問自答し氣持を落着けて家に帰りました。然しこの様な状態は長くは続きませんでした。卒業して二年後両親のたつての願をこたわる言葉もなく、不本意ながらも両親の願ひ通り嫁ぎました。豊かな資産も優雅な生活も「見ゆるものは暫くにして見えないものは永遠に続く」どんなに多くの物質も決して人を幸福にするものではない事をつくづく知りました。

「出もどり」私はこの印を自ら受けました。家にもつて外出は一切せず、人に逢うことも恐れて一人苦しんでおりました。母が見兼ねたのでしよう、三瓶町の信一兄さんのお家に二、三ヶ月遊びに行つてはと申しました。私も丁度遠くへ行きたいと思つていた時でしたので行く事にし、母が隣村の港迄送つて来てくれました。この時の別れは生涯忘れる事のできない思ひにいっぱいでした。船が沖へ出ました。知らない内に船のともの方へ来ていました。青い海を見てみるとふと海にすい込まれそうになり、はつと自分にかえりました。軽はずみな思をしては……。二時間半の船旅は私を目的地迄届けてくれました。港には従兄弟夫婦が迎いに来ていました。

その日から私は居候になりました。兄は町役場に出動し、姉は私を慰める為に山に海に連れて歩いて下さいました。気ままな病人をかゝえてさぞ大変だった事と思います。或る日散歩の帰り道、普通の住家にキリスト教会と書いてありました。その文字を見た時に何か強い力に引き寄せられるようにそのお家に行きました。そのお家にはやさしそうな人なつっこいお年を召した女の伝道師の方がいらつして芝みつのと申されました。その先生は集会日を教えて下さり、紡績工場の方達が多勢いらつしゃるから是非いらつしゃいと申されました。玄関先での一寸したお話ではありましたが魚が水を得た様に嬉しさが心の中に満ちあふれて何か見えない力に引かれる心地して帰りました。

早速その後は集会に出させて頂きました。祈祷会の夜でした。若い方達がお座敷に輪になって坐り、先生のお話の後畳の上に両手をつけて、力にあふれた大きな声で誠心からなる感謝の祈りを次から次へと或る方は力強く、又或方は涙を浮べて心からお祈りになりました。この方達は女工さんとして毎日苛酷な労働を続けていられて苦しい中にありながら尚この様に喜び感謝して主にお仕えしていられる。私自身はとつとづく反省させられました。私が苦しんでいる事は身勝手に

はないか、神様は私も守っていて下さる。あの方達は私よりも大きな苦痛の中にあつて、あんなにも喜んで感謝の日々を送つていらつしゃる。私は苦しみを通して少しづつ神様のご愛を知らせていたゞきははじめました。教会に行ける事が本当に嬉しくなりました。

その頃家から電話がありまして、村医の松井医院から看護婦に来てほしいと云つて来られたので行つてはどうかとの事でした。よく考えてみるといつ迄も居候になつてゐる事も心苦しく、神様が私の為に道を開いて下さつた心地して帰る事に致しました。村の医院には日曜日もあるから礼拝に出席する事もできるからと心の中で決めて嬉しく感謝して帰りました。医院は祖母様、先生、奥様、お子様五人という大家族でした。一番小さいお子様は生後九ヶ月位でした。私は四才位のお子様と一緒に御祖母様のお部屋で夜はやすまねばなりません。朝は先ず仏壇のお茶と御飯、そしてお子様二人の朝食おべんとう、そして学校へ送り出して皆様の朝食、診療室の掃除、おむつの洗濯、九時頃からは診療介助、投薬、午後学生下校時間には洗眼、この頃はトラホームの子供が多く数人来ていました。午後先生は人力車で往診、お帰りになるとお薬をとりに来られるので投薬。夕方は夕食の後片付け、

朝食用意・お子様のお風呂お子様就寝、夜間往診のある時はお帰りを待つて投薬、日曜礼拝等とは考えられません。休日
は遠い国のことでした。これではいけない私は何か身につけておかないと……老後を考えるようになりました。少し勉強して検定試験を受けようと決心致しました。免許をとって上京して勉強しよう、その為には学費が必要だけれども家に頼るのも心苦しいからこゝで貯蓄して資金を作り、上京しよう
と決心して六ヶ月勤め、丁度検定試験が近づきましたので退職致しました。そして母に頼み一ヶ月の食糧を頂いて親戚の家に置いて頂き一生懸命勉強致しました。一ヶ月後助産婦の検定試験がありました。祈る心で懸命で受けました。然し一ヶ月位の勉強で受かる筈はありません。しまったと後悔致しました。どうしよう一ヶ月間家の手伝はしないで食糧はもらつていて、家に帰ることはできない。家族の人達に言いわけはできない。顔を合わす事もできない。万策つきておりました時ふつと私の頭の中に、教会がある、教会で女中として置いていたゞいてその内に身のふり方を考えよう。今にして思えば何と身勝手なことでしょう。以前から礼拝には時々出ていまして存じあげておりましたが、この様な大きな荷物がころげ込んで来ようとは夢にもお思いにならなかつたと存じま

す。受験日の夕方牧師館に上り先生にお願い致しました。牧師館に女中はいらぬ筈でしたが無理を承知でお願い致しました。先生は日暮時行く所もない迷猫の様な私をあわれと思召されてでしょう「いゝでしよう」とお許し下さいました。はりつめていた心がほつとしました。試験が終れば直に帰るつもりでお金も少々しか持つて出ておりません。試験がだめでしたと親戚の家へ行くことはできません。本当に嬉しく感謝致しました。奥様もこれは困つたとお考えになられた事と存じます。ご結婚後二年可愛い赤ちゃんがはいはいしておられました。新家庭で家計も大変の頃と存じます。私一人の食費がかゝります。期間も定まっているのではなく、でもその日からお優しい奥様は私に仕事を与えて下さいました。掃除洗濯はもとより、しんし張、お庭の草取り、できる限り一生懸命働きました。そして六日目の朝妹が牧師館に訪ねて来ました。突然の事で私の居場所がどうしてわかつたのでしょうか「姉さん合格したから二週間後に松山で実地試験があるから早く帰りなさい」。私は驚き自分の耳をうたがいました。実地試験の事迄云っているのは真実のようです。先生と奥様にお礼を申し上げて牧師館を辞しました。あれ位の成績でどうして合格したかわかりません。神様が私を憐れんで試験官の

目をくもらせていたゞいたとしか考えられません。ほんとうに感謝致しました。然し今度は実地試験です。帰りの道すら心配が次から次へとおおいかぶさって来ました。私は人様のお腹をさわった事がありません。薬については医院で調べていました関係上普通のはわかります。フアントームも見た事はありませんが勉強した事を覚えていれば、然し妊婦の診察が、心が乱れてきました。試験官の前で果たして間違わないで出来るか知ら、神様あわれんで下さいと祈りながら帰りました。

家では少々叱られると覚悟をして帰りましたが父は一言も叱りませんでした。母の申しますには隣村に友達が助産婦をしていられるのでその方に妊婦さんの診察をさせてほしいと頼んでいたので返事のあり次第私を連れて行く事になっていると言ってくれました。私が途中心配していた事は神様が既に用意させていたゞいていました。突然の事に目の前が開けてどんなに感謝してよいかわかりませんでした。実は人様の前に出ることさえ苦しい境遇になった事を時としてつぶやいていたわたしでしたが少しほのかな光が見えて来たような気が致しました。神様は未だ祈る事さえできぬ私を絶えず覚えて頂き「汝我が愛におれ」と温く包んでいたゞきました。感謝

でございます。

隣村の助産婦さんは妊娠五ヶ月と八ヶ月のお二方をお願いしていただゞいてありました。このお二方が気持よく御協力いただきまして初めて妊婦の診察ができました。感謝致しました。其の後数日にして試験場に参りました。そこには他県で落ちた方もまじり多くの方達が集まっていられました。若い方から年輩の方達迄右も左も自信たっぷりの方達かそうなる方達ばかりです。自分がみすばらしくなりました。

神様あわれんで下さい。合格させて下さい。私には神様がついていて下さる。他の人とは違うと心に言いきかせて呼ばれる順序を待ちました。妊婦の診察及び所見、フアントーム分娩機転、機械、薬品及分量、沐浴と試験官の命ぜられることを力いっぱい答えて終りました。然し回りの方達は皆ベテランばかりの様です。或は駄目ではないかしら、神様合格させて下さいと祈りつゝ帰りました。その後二週間過ぎました。そして合格しお免状が送付されました。ほんとうに有難うございました。身も心も貧しい田舎娘をあわれみ絶えずご愛の中に包み守っていただゞきます。心から感謝でございます。

「思 い 出」

井 伊 文 子

「求めよさらば与えられん。叩けよさらば開かれん」

神様の御憐みでお免状はいたゞきましたが、実技は全くできません。産院で実技を取得せねばなりません。東京市立慶応付属の源川産院の入試が近づいていました。全国から受験に来られると聞いていました。今度は今迄のように近くではありません。募集人員は十二人です。今度落ちますと大変です。地理は全く不明で、田舎者の私に合格できましようか。技術を身につけなければ免許だけでは役に立ちません。考えた末決心致しました。上京して源川産院の受験をしよう。

心配していた両親を説得して、瀬戸内海を一昼夜船にゆられて神戸で上陸し、一泊して翌朝神戸発の汽車で六時間半、品川駅に下車しました。東京駅は人が多いので見つからなかったらと心配して親戚の明治大学の学生の方が迎えに来て下さいました。学生結婚をしてお子様が一入らっしゃいました。

翌日は試験です。地図を頼りに渋谷の幡ヶ谷から源川まで行きます。産院では多くの受験の方達が来ていました。

この試験場でも二十才位から五十四、五才位の方まで皆世なれた偉そうな方達ばかり、見ただけで圧倒されました。でも今の私は後へ引く事はできません。どうしても合格しなければならぬのです。神様助けて下さい。この度はどうしても合格しなければならぬのです。神様は心をつくし、精神をつくし、心ばせをつくして主たる汝の神をあがむべしと仰せられます。力のかぎり祈り、今度落ちると行く所はありません。今のお家は学生さんです。これ以上ご迷惑はかけられません。神様どうか合格させて下さい。神様、一度ならず二度までも合格させて頂きました。感謝致します。今一度願をかえて下さい。誠心から切に祈りました。

受験の方達は多く、又立派な方達ばかりの中に、又も神様はこの様なものをあわれんでいただきました。どんなに感謝してよいかたとえようもなく、只管神様のみ業を拜して感謝にふるえました。

私は苦学生です。自分にしかと言いきかせ苦学生らしい歩み心がけました。神様のご愛に感謝しました事は、産院に婦長様はじめ四、五人のクリスチャンの方がいらっしゃいました。時として、今夜は賀川豊彦先生のお話があるから行きましょうと申されて、お供をさせて頂きました。黒い眼鏡を

かけられた先生は、墨汁をたっぷりとふくませて、黒板の上に張りつけた白い大きな紙に黒々と大きな字をお書きになりました。罪についてのお話だったような気が致します。

又或る時は、武蔵野の金生病院へ慰問にもお供させて頂きました。レプラーの方達の生活してられる所です。病院へ入るとすぐに白衣を着せられて昇永水の溝の中を高歯の下駄を歩いて園内の慰問です。学校も映画館も劇場もありました。

住宅は二軒長屋のこじんまりしたお家でした。皇后様から頂いた牛が幾頭かいました。麦は穂が出揃っていました。小高い丘も芝生が植えてありました。患者さん達はその丘の上に登ってシャバが見えるのとて遠くをながめて懐かしんでいられると聞きました。重症の方には軽症の患者さんが看護していられました。私共は病室の窓の外で立ち、ベットの患者さんが半身起き上がり慰問隊の私共にお礼の言葉をのべられました。そのお声の中には力強さと喜びが感じられました。そのお方のお顔もお手もくずれて、お痛ましいお姿でした。その昔多くの民をお癒し給うた主よ、この方達をかえりみて下さい。小さな子供達迄もこの様な状態です……祈らずにはいられませんでした。

この病院で今日迄数人の方が癒されたと承りました。然し

再発しないとは云われなことの事でした。武蔵野の美しい空の下で花を作り農作物を、そして牛を飼っての生活は楽しそうには思えましたが、大きな垣根で外へは出られません。お体は病におかされ、次第に弱ってゆかれる様をご覧になられながらのご日常はさぞかしと思われました。この様な病院が不用になりますように、どうか清められて地上からこの病のなくなりませす様にと心の中で念じました。

院内の毎日は多忙でした。産婦さんは市内の貧しい方達でした。貧しさの故に一度の診察もなく、突然陣痛が起きて来られる方も多くあり、一日に十二人位生れた日もありました。そんな時は分娩室が足りなくてエレベーターの輸送車の上で生れることもありました。夜間数人の助産婦では大変でした。又貧しさの故に双生児とは知らず、一人分の子供の用意をしていた産婦さんが生れてはじめて双生児と知り、私共に「看護婦さん二人は養いきりません。一人どうかして下さい」と泣いて手を合されます。又墮啞のご夫婦に初めて赤ちゃんが生れた時のお喜びよう、そばで見るのもほくえましく、手まねだけではもの足りぬらしく、ほくえをすり寄せつゝ最高の幸福を喜んでいられました。異常のお産も沢山ありました。多くのお産に立会い、生命の尊厳をひしひしと覚えました。

卒業の頃には田舎へ帰っても一人で助産できる様になりま
した。丁度この頃、血液型が発見されまして、先生は田舎へ
帰ったらこの血液型について講演する様にと詳しく講義を受
けました。

卒業近くの私の手許は心細くなりました。苦学を志しなが
ら不本意にも家に助を求めました。神様は井戸の中のかわず
の私に道を設けてこゝ迄引出して下さいました。田舎者の私
が最大の大都会へ引出され、何も彼もが驚きでした。デパー
トのエレベーターに乗ってお金は何処で支払うのかしらとあ
たりを見廻したり、早朝割引の電車に乗って往復切符を片道
に全額使ってしまったり、方言がおかしいと笑われたり、ア
クセントが面白いと言われ赤面したり、あなたは貴い価をも
って買取った。私のものだと仰せ給う主の御愛に包まれて、
様々の中を通しあわれんでいただきました。只々感謝でござ
います。

みみずのたわ言

大濠公園教会 Y・U

ひとりの祖母と幼い孫達とのたわいのない会話、どちらの
ご家庭でも見受けられる情景でございます。みみずのたわ言
とお含みいただきます。ご笑読下さいませ。

「静かに注ぐ春雨は、草木を育くむ慈母なるぞ」

静かなこの歌の一節は、いまだに私の心に残っている女学
校入学当時のなつかしいものでした。

その春雨のように神様の恵の雨は静かに孫達に注がれて居
ることを覚え、お恵みを感謝致しております。

六才と四才のこの兄弟は日曜学校にもお籍を賜りご指導を
いたゞいております。

兄との会話

六才になる孫は絵を書くことを好み、地図等を書いては色
どりをして一人で楽しんで居ります。

或る時のことでした。突然、

「おばあちゃん、お祈りしてよ！日本の国をもっと大き

くして下さいって」と、いきなり申され、私は答えようもなく驚き入りました。何を感じたのでしょうか、大きな困々を見て日本の小さい事を一入感じたのでしょうか！

なんと邪心のない、単純な要求だろうと思いました。祈れば神様はどの様な事でも聞き入れて下さることを御聖言みことばを通して祈りを通して導かれておりますから、一閃に思つての発言だったと思います。

この幼な子の神様への信頼・信仰を感謝致しました。

マタイ伝十八章三節

「よく聞きなさい。心を入れ替えて幼な子のようにならなければ天国に入ることはいできない。」

四節

「この幼な子のように、自分を低くする者が、天国で一番偉いのである。」

五節

「また誰でもこのようなひとりの幼な子を、わたしの名の故に受け入れる者は、私を受け入れるのである。」

私は幼な子の単純な願を聞いて、マタイ伝十八章三節・四節・五節の御聖言ことばを以て又新しく教えられましたことを感謝いたしました。

弟との会話

或る日曜日。今日は教会礼拝の日である。

家族揃つて朝の祈りを捧げ、健康を感謝し朝食をすませました。

礼拝に出かける孫の支度を手伝いながら私は話しかけました。

「今日は教会でしょ？ 教会は何しに行くの？」と問題を出しました。私は何と答えが出るかなと期待して待ちました。

「感謝に行くたい」と、見事なアクセントのある九州弁で答えが返りました。私はひそかにお祈りに行くとの答えを考えておりましたが案にはずれ、之は一本とられたと心の中に驚きを覚えました。

そして又「誰に感謝するの？」と尋ねましたところ、

「エス様たい」と、これ又ずばつと言ひ切りました。私は思わず主の御聖名みなを崇めて感謝致しました。この春から幼稚園に通い、社会人としての一步を踏み出した許りです。

「汝の若き日に汝のつくり主を覚えよ」と御聖言にございますが、この悪しき世相の今日、教会・エス様・感謝の三つの言葉が幼い者の唇から出ましたことをほんとうに嬉しく思

いまして主の祝福を感謝申し上げました。

神の大庭に恵の雨が更に注がれて、清らかな小さいたましがますますと育ちますようにとお祈り申し上げました。

みみずのたわ言と一笑に付してはもったいなく、私にとりましては大いなる喜びであることをつけ加えます。

(その日 その日 より)



「さ ん び」

伊規須 太郎

「義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかつた」(ヤコブ五・一六—一七)

エリヤは特別な人だと思っていた。しかし神様のみ旨は、こんな私を召して、祈らせ、ご自分の力を発動しようと言う事でした。義人とは人間が「私は正しい」と言うものではなくて、神様が上から着せて下さるもの……「その為に、イエスを十字架に付け、甦らせて、保証を与えたではないか」とおっしゃる。「そうでした。ありがとうございます」と受け入れると、消えない焼き印を押して下さいました。お祈りは、まず神様のご熱心があり、煮えたぎるようなご自分の思いと力を現わす為に祈らせると言われるのだから、必ず聞かれる。それは神様の力が足りないからではなく、私の為にわざわざ尊いご用を与えて下さったのでした。絵てのものを載せて廻り舞台が廻っています。床下で手を添えさせて戴きながら、下から見るこの光景は、私に与え

られた特別の賜物です。主はほむべきかなノ

「げに奇しきかな祈りの力や、祈りにまされるものなし。」

(讚美歌三一一)

「あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエスキリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、……」

(Iヨハネ四・二)

内外に色々なものを見聞きするし、自分の中からも色々なものが出てくる。こういう時に、神様はご自分に通ずる道筋がどこにあるか、明確に教えて下さった。何と重大な奥義だろう。教理がいくらあったとしても、唯一つ、「イエスキリストが肉体をとってこられたことを……」とある。神様の告白(実行)は何と真実であり、はっきりしていることかノ。かつては神様のお言葉を、それほど切実に感じなかったが、今は目が覚めました。「本当に、この名、この道を通して(のみ)、すべてのものを注いで下さいます」と告白すると、神様は恵みを流して、道筋の確かなことを保証して下さいました。私はこの道筋からスルリと、それやすい者です。どうか憐み助けて下さい。私の心がどんな

に熱しても、神様の心を心とさせて下さい。私にできる事

は、この思いをあなたに持って行くことです。あなたは、このために立てたとおっしゃいました。

「十字架の上に、ほふられたまいし、こよなくきよき神のこひつじ。」

(讚美歌二五七)

「キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。」

(Iペテロ二・二二)



多くの戦いや困難に囲まれている私に対して、神様はもう一度、私の驚くべき身分を確認し、召された使命、歩むべき道、その模範をはっきり教えてくださった。自分の民から拒まれ、捨てられ、十字架につけられ、黙々と忍んで、「父よ彼等を許したまえ」と祈られた主、それは他人事ではない、私の為でした。どうしてそこまでの生涯を送る事ができたのだろう、その秘密は二二節「キリストは罪を犯さずその口には偽りがなかった」にありました。父なる神との直通状態、その隠れたパイプから、すべてを償って余りある力を注がれていました。そして、それがそのまま私の模範となりました。神様は「かく歩ませるぞ、そのためにお前を召したのだ」とはっきり約束してくださいました。神様からよみせられる生涯はなんとすばらしいものでしょうか。現実はこの身に保証をくださいました。私を見て下さい。誇るではありません。活ける神の真実を見て下さい。主を仰ぎつつ、どんな中でもお従い致します。助けて下さい。

「この人を見よ、この人こそ人となりたる活ける神なれ」

(讚美歌二二二)

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、すべて信じる者に救を得させる神の力である。」 (ローマ一・一六)

「約束された」「御子(そのもの)……」が福音とあるのに何とぼんやりしていたことか。ガラテヤ三章「愚かなるかなガラテヤ人よ、十字架につけられ給いしままなるイエスキリスト、汝らの目の前にあらわされたるに、誰が汝らをたぶらかししぞ」との神様の激しい御思いに迫られやうと目が覚めました。「これ以上何が出来るか。これ以上どうして愛する事ができるか。」とおっしゃる。「ああそうですか、感謝します。」とたゞ平伏する他はない。すると神様は約束通り保証を与えて下さった。神様の燃え沸るような思いを注がれると私の心は熱する。どこへこの苦痛を持って行くことができようか。噴きだすがスのように主の前に祈る、それは空を撃つものではない、「あなたが私の名によって父に求めるものは何でも、父が与えて下さるためである。」と言われるから、必ず聞かれるのだ。心を強くして祈り続けよう。「全地の表を新たになし給え、御名の栄光を表わし給え」と。

「イエス君の御名にまさる名はなし。」

(讚美歌一六八)

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである。」(ヨハネ一四・六―七)

弟子たち以上に恐れ感う者であるのに、主のお言葉に対して傍観者であった私、どうしてよいかわからなかつたのだ。しかし厳かな時を目前にしたイエス様は、成し遂げようとする救いのご目的と道筋をはっきり教えて下さった。

「私の居る所にあなを居らせる為に、私は父のもとに行く」と。考え込む私に再び上からの大声！「私が道であるノ……(お前に道を教えるのではない、道を見出だす為に参考にせよと言うのではない。よく聞け、私自身が道であるノ)」と。目を覚まして、まさしく私の為に裂かれたイエス様の肉体の中……血潮の滴るこの道に立ちます。その時アブラムに対すると同じように(創世記一五)神様は私と契約を結んで下さった。「この地を与える」と。父を知

る事は父と一つになる事でした。こんな者を賤い常にふところの中におらせて下さる。活ける神は替むべきかな！

「わが君イエスよと喜び歌う、尊き御名こそ比いもなけれ。」(讚美歌一六八)

「主はふり向いて言われた、「あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアン人の手からイスラエルを救い出しなさい。わたしがあなたをつかわすではありませんか。」

(士師記六・一四)

絶望的情況の中で、余りにも驚くべき恵みのみ言葉ノ私も冷ややかだった。しかし主がふり向いて私に対して語られている事を知ってギョツとする。まさしく私を召して、神様の(測り知れぬ)力を私の力として下さって、救わずに居れぬ神様のみ旨を遂げる為に、こんな者を下僕として使って下さるとノ神様のみ言葉は何と確かであり(ぶっかって)従う時の手応えは何とほっきりしているだろう。色々な音便を聞くが、その真実を知り尽くす事はできない。しかし己れの身にせられているこの事実だけはほっきりしている。「自分だけがよいような事を言う……狭い」と言われるが、私はそうは思わない。何故なら主から賜わる聖

靈の一致は拡がって行くに違いないから。臆せず、眞実を語り続けて下さった先輩に感謝し、私もまた唯一つを語り続け、そして祈ろう「主よ速やかに裁き給え」と。

「御靈よ降りてむかしの如く、くすしき御業を現わしたまえ。」
(讚美歌四九九)

「しかし主を待ち望む者は新たな力を得、わしのように翼をはって、のぼることが出来る。走っても疲れることなく、歩いて弱まることはない」(イザヤ四〇・三一)

待ち望むということを、かつては消極的に考えていた。

しかし、いと高きいと清いお方を仰ぐ時、この小さい者に愛をもって力を与え、強さを加えるとの強烈な御主張に圧倒される。私もまた神様に対してハッキリ主張を持つべきだとわかりました。主はバルテマイ(私)に対して、「何をしたいのか」と言われました。あなたに狙いを定めます。そして自分自身をあなたに投げ掛けます。「あなたのおっしゃる通りして下さい……与えられた御使命の為に知恵を与えて下さい」と、日毎に注がれる上からの力の何と偉大な事か！ 今この時が何と尊い事か！ 主よ許さ

れた命の日の限り力を尽くさせて下さい。

「みめぐみ豊けきすくいぬしのみ声のまにまに走るこの身。かちの日来らばそのほまれはわが主の力と歌いまつらん。」
(讚美歌三七〇)

「Ⅱペテロー・一〇一」

聖徒が体験した恵みの道筋と神の賜物。神様は今も私に同じ尊い信仰を授けて、同じ恵みを注ぐとおっしゃる。父なる神のご計画(栄光)と一人子イエスの服従実行(徳)によって命と敬虔に係わる総ての事が与えられる。神様がなさったのに私が何を申し上げる事が出来ようか。神のお言葉の内に秘められた火のような激しさを感ずる。私が生暖く反応してどうして話しが通じよう。どうして神の力が働こう。光に照らされて本心を今主に向けよう。主よ信なきを助け給え。望みつつ信じます。「知る」とは受ける事でした。あなたのみことばを受けた時、あなたご自身(御性質)を注いで保証を与えて下さいました。「総ての事」と言われる中には生活のあらゆる問題から靈的恵みの高み、かの日の栄光の望みに至るまで、総てが含まれています。

この幼子をお言葉通り養って下さるから感謝します。

「父なるみ神とみ子なるイエスとのすくいのみめぐみ、はかり知られず……みさかえ神にあれや。」

(讚美歌五〇六)

「ペテロが言った、「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエスキリストの名によって歩きなさい。」 (使徒三・六)

この足のきかない男も神様の事を聞いていただろう。信じようとした事もあるだろう。これは私の霊の姿だった。そんな私を金銀によらず、人の働きによらず、遂に立たせて下さったのは、万物に勝るこの救い主の御名だった。まさしく神様が立たせて下さった。その名の何と力ある事だろう。神様はどんな事でもお出来になるノ 詩篇一〇八・五神よ自らを天よりも高くし、み栄えを全地の上にあげて下さいノ 御名を高く高く仰ぐ時、その御力は何と激しくほとばしることだろうノ 世の力、不信の力がいかに強く私の上に加わっても、パロをついに砕き給うた主の手、「有りて有る者」のみ力は私を奴隷の生涯から引き出して下さった。今日も踏み出します。「歩け」とおっしゃる方

が歩かせて下さるから感謝します。

「イエス君のみ名にまさる名はなしノ」

(讚美歌一六八)

「神はあなたがたをかえりみて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」

(Iペテロ五・七)

仰ぎ見る時、神の主権の何と高く、主のみ名の何と尊いことだろう。この小さい者を顧み給う神のご慈愛の何と深い事だろう。五つのパンと二つの魚で五千人(以上)を養われた時、主は失望する弟子たちに「それをここに持って来なさい」と言われた。自分の事、家族の事、教会の事、日本の事、世界の事……叫び出したい衝動にかられる事もある。しかしその都度、主は「それをここに持ってきなさい」と言われる。一切を引き受け得る御方に持ってゆくと現実のいやしの暖かさがこの身に浸透する。活ける主はほむべきかなノ 問題が多いことはむしろ感謝でした。イエス様、この感謝もあなたの所へ持って参ります。

「主に委せよ汝が身を、主は喜び助けまさん。」

(讚美歌二九一)

「わたしの子よ。あなたはキリストイエスにある恵みによつて、強くなりなさい。……労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである」

(Ⅱテモテニ・一―六)

パウロが主から受け親しく手触ったもの、この他なしと宣べ伝えた「キリスト(にある)」と言う恵みの鍵ノ生命の泉ノその流れの道筋は(兵卒の)「絶対服従」、(競技の)「ルール遵守」、(農夫の)「実働」にあると。これはよく考えよと言われる奥義だ。芸術作品の前に立つ時、その後に製作者を見る。その創造の喜びはどんなに大きいものだろうか。私がどんなに恵まれた説教集を読んだとしても、それは鑑賞者の立場に過ぎない。主は「み言葉の前に立って、今、お前の身をもって労苦せよ(従え)」と求め給う。見る立場ではなく、描く立場に立とう。私自身の描いたものをもって神様にお答えしよう。私の為に今この機会と言うキャンバスを備えて下さったのだから、「はい」と一筆を描くと、もう恵みの流れが私を包んでいるノ命のみ言葉は奇しきかな。

「主のいさおによりくだるみたまは我をもみたすといまこそ信ぜぬ。」 (靈感賦二)

近況だより

古野とみ子

主の愛の手に みちびかれつゝ

やすげく世をわたり

天つわが家に すゝみゆく身は

よろこびかぎりなし

あゝよろこばし いとよろこばし

日々主の愛の 手にみちびかれ

天のわが家さして すゝむ身の

そのよろこび かぎりなし

(れいかんふ一二一)

主の御名を崇めて感謝します。

お母さん、そちらに行かれて二十五年になりました。私も神様からえらばれて三年、光の子らしく歩ける様になりたいと祈りつゝ、神様に支えられ、守られて、いろいろな問題にぶつかりながらも、頑張っています。そして、お父さんから受け継いだ祈りが私の課題となり、多くの家族の祈りをしていきます。でも、祈りと反対になってしまふ時が多く、「私ってダメだなあ!!」と思う時、神様の大きな愛と忍耐を感じる

のです。お兄さん達は どうして いますか。残して いった二人の子供達も 大きくなって、立派になったとき いておられますがどこに いるのかわかりません。でも、祈って ければ、かならず、神様が 会わしてくるのではないかと思 います。お兄さんから 貰ったカメラ、今私が 大事に使っています。あのカメラももう 二十才になり、不思議なことに プスでも美人に、きれいに とれて、いつも 満足しています。

はなさく野山も 血にそむ谷も

みちびかるるまゝ 主とともにゆかん

ひとあし ひとあし エスとともに

日々に 日々に われはあゆまん

(れいかんふ一二)

先日、私は九州聖会という大きな集会に行きました。福岡大濠公園教会で三日間、神様のお話を聞く時を与えられ、感謝しました。その教会で出会った子供達(邦継君・供子ちゃん・託^{よりゆき}往君・聖美^{きよみ}ちゃん・栄子^{さよこ}ちゃん・敬士君)と、私はすっかり仲良しになりました。私は栄子ちゃんに名前をきいた時『私、栄光の栄よ』と言ったんです。それを聞いてーさすがノクリスチャンの子だーと感心し、私の姉も同名だったと、昔の

ルバムに写っていた姉を久しぶりに思い出しました。ところで、昨年そちらに行かれたという事を同級生から聞いた時、友達は、私に怒ったのです。「誰も教えてくれないで、あの時の友情は いったいどうしたのか!!」と言われてもお母さん、私には何のことか鈍感なものですからわかりませんでした。この友達との立話が縁で、私達は二十余年ぶりに、先生の初盆をかねて同窓会をする事になりました。

主よ かなしみ なやめる靈魂に

つかわしたまえよ 我を

われ みこえにしたがい いずこへも

よろこびいさみて 行かなん

われ こゝにあれば 主よつかわし給え 我を

よろこばしき音ずれ 伝えんため

いずこまでも 我ゆかなん

(れいかんふ七四)

私は、みんながどんな場所にいるのか知りたいし、久しぶりに会うのでとてもなつかしく心待ちにしています。ところが、子供心というものは恐ろしいものだとも思いました。「生活状態を見て教育していた先生なんてノ」「いじめた女

子に会えるかノ」などと、卒業してからもう随分年月が経っているのに、まだ忘れていないのです。私も、お父さんの祈りと多くの方々の祈りによって教会に導かれ、「神様にとっでどんな子になっているのか？」と思つたら、恐ろしい気がします。だから、いつも神様を前にして、神様思ひのやさしい子でありたいなどと、ブリツ子ぶっています。本当に子供の時つて大切だな!!と思いました。そして今、私はふらつきながらも歩いていきます。既製品工場で仕事をしていて、冷たい空気の中でダウン気味!! 毎日なにか神様の御旨であるかを祈り求めています。

いのりをたやさで ひたすら求めよ

信仰もて祈らば 主は応えたまわん

(れいかんふ四八)

長くなりますので、今日はこの辺で。ではお爺さん、お婆さん、皆様によるしく。天国で待っていて下さいね!!

さようなら

追 伸

お父さんと、いつも楽しみにしていた桜の木、秋でもないのに枯れちゃった。

紫 陽 花 (あじさい)

野 口 米 子

今日も雨が降り続く。

あと数日もすればカツと照りつける真夏が来る。そして昨年の夏の天草での集まりが想い出される。

それは主人の母の喜寿の祝の集まりであった。母の家の近くの旅館の大広間に置かれた長い二列の台の上には、海の幸の幸がにぎやかに並べられていた。

母の四人の息子と一人の娘と、それぞれの連れ合い、そして孫達を加えて二十名、会の始まるのを今やおそしと坐っていた。

私の下娘が母と同じ列の上座にいたので反対側に坐っていた私は、少しいぶかしく思っていた。そして彼女の父親と福岡の兄がどちらが挨拶しようかと話していた時、急にその娘が、始めの挨拶の口を開いたのである。荒井牧師の挨拶、聖書拝読、聖歌と、前もって配っていた歌詞カードで牧師夫妻の三人の可愛らしい子供達の歌声と一緒にみんな声を合わせた。

大人達も幼い頃きゝ慣れた神様をたたえる歌に懐かしさを

おぼえたのか「主我を愛す」を、熊本弁で歌ったりするアクシデントがあったりして大変楽しい集まりであった。

司会の役を勝手に引き受けた彼女は、自分の父・おじさん・おばさんに小さい頃の思い出等を、次々にインタビューしていた。

私は、そんな娘の落ちついた態度を見ていると何かおもしろい、でも誇らしい思いでいっぱいになったのである。

老いた母も大変喜んでくれ、祝された集まりであった。

そんな娘にも暗い時期があった。それは今から四年前である。今日の様に梅雨の雨が降りしきる朝、玄関の下駄箱の上には、私の気に入りの色ガラスの花器に、紫陽花の花が活けてあった。

「行きなさい、行きなさい。」の私の声に、ばたばたと荒々しい足音をたてて玄関に立ち、逆らいと怒りの目で、私の顔をにらみつけ、いきなりあじさいの花を器ごと土間に投げつけた。

激しく扉のしまる恐しい音を残して学校に行った。そしてせまい玄関いっばいに砕け散ったガラスの破片を拾っていた自分のかげんだ姿を想い出す。



「登校拒否」

毎年五、六月になると耳に目にする言葉は、我が家にも無縁でなかった。

日頃穏やかな主人も、あまりにも我がままな娘の態度にたまりかね一度だけひどく手を当ててせっかんした事もあった。

今から思えばそうなる原因はいくっか思い当たる。しかし私が一番痛手に感じたのは、折角信仰告白して受洗していた彼女が、神様に完全に背を向けた事である。

忘れもしない、彼女が天草の母の所へ旅立ったのは、その

年の九月十四日だった。

手紙を再々書く、教会へ行く、この二つを固く約束して、そして私に祈ることの義務と欲求を残して。

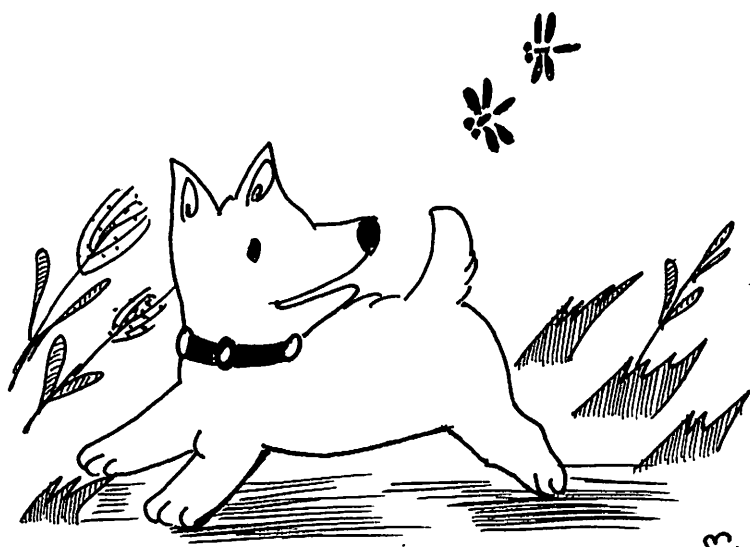
彼女は約束の一つは良く守ったが、教会行きはいやいやながら仕方なく、母に連れられてといった状態だった。

だがその年の暮のクリスマス頃から神様は彼女に少しずつ信仰をよみがえらせてくれた。その内に日曜学校のお手伝いをさせて頂ける様になり、仕事も与えられ、翌春には定時制の高校に入学し、そして今、最終学年の夏である。「あんたが高校卒業する迄生きているかどうか分らんよ」と言っていた母も元気に守られている。

あんなに手のつけられない程荒れに荒れていた彼女が、遥かに望みを抱いて来春は音楽大学を目指して励んでいる。教会の青年会の役員としても主に守られている。

それ等のことを神様に感謝すると共に、もう一つ感謝に絶えないのは、娘、娘と祈っていた私が、いつの間にか主と和らいでいよいよ信仰が固くされて、いつもいつも神様を離れないで喜んでいる自分に気がついた事である。

今日も玄関にはブルーの紫陽花が小石原焼の壺に咲いているが、今は感謝の気持ちいっぱい溢れて眺めている私である。



「編みながら想う小さな事」

ノートより

◇ 悪 夢 ？ ◇

S . N . 生

うっとうしい暑い夜、十時過ぎ、

「ブウーツ、ブウーツ」と嫌な音だが、近頃はもう慣れっこになったサイレンの音。

「空襲警報発令!!」「空襲警報!!」と、三度四度連呼する声を聞いたと思った途端に、頭上に異様な金属音に似た音が、激しく、「バリバリ、バリツ」と鳴った。遂にわが町に敵機襲来が現実となった。今迄何回となく警報だけは繰返しては来たけれど、実際にはその来襲は無かっただけに、覚悟はしていないでも、スワ一大事とばかり、防空訓練の時の服装にゲートルで二階から飛降るようにして階下におり立つと、おぼさんや娘達がワイワイ騒いでいる。「今度は本当に来た。海岸の埋立に避難した方がよいかも分らんヨ。家の中の壕では危いかも知れん。」と云うので、「じゃ僕がみんな連れて待避しよう」と表に出たら、又もや頭上で「バリバリバリツドーン」と激しい爆発音がした。「サ、みんな僕と一緒に埋立まで走るよ。」と皆を連れて逃げ出した。僕は途中で考えた。皆が埋立まで着いたらもう一度帰って大事な物を持出せば良

いと、軽く考えていたから必死に走った。みんな大勢の人達がワーツワーツと叫びながら走って行く。どの姿も必死である。フト上を見れば、飛行機から落される焼夷弾が、花火の様に広がりながら光を出して落ちて来るのが見えた。すぐ近くにある二十四師団の衛所から、数頭の軍馬が勢い良く兵隊と共に走って来る。周囲の町並の家からは早くも火の手が上っていた。忽ち、またたく間に火事である。然しもう消防車は来ない。「ワーツ、にげる、危いぞ」。様々な怒号ともわめきともつかぬ叫び声が聞えるが、今はもう自分だけでも精いっぱいの状態だった。

やっとの事で火の中を海岸の埋立まで皆を連れて来たが、次々と花火の様に飛行機から落される焼夷弾で、すっかり火の海になってしまった。火災が起ると風が起るものか、避難した埋立に向って火の流れが迫って来た。

イスラエルの民が、エジプトから出てきて後からエジプトの軍隊に追われ、前には紅海があつて進退極まった時のように、僕達の前は海であり、後には迫ってくる大きな炎の海と挟まれてしまった。初めから神に祈ればよいのに、此処に至ってやっと主に向って、「イスラエルの神、モーセの神よ、何卒お助け下さい」と祈るのであった。

主は、堤防の下にある海の水を見せられ、そこに一本の丸太の棒が鉄のくさりで結ばれているのを見つけた。その時、「これだ」とばかり堤防を乗り越えて、丸太の上にとびのつた。もうこの状態では、もう一度家に帰ることなどとても考えられぬ事になっていた。「さあ、みんな水に濡れても焼けん方が好い、早くこゝにおりておいで。」と、皆を水の中におろした。材木は波に浮いたり沈んだりで、もう女や子供達も生きた心地もなく、やっとの事で炎と熱風からのがれる事ができた。

一息ついてやれやれと思つたら、今度は湾の中に待避した船に向つて焼夷弾が落されて海が火になった。今迄風が陸から海に吹いていたのが、忽ち海から陸に吹き出した。それで又みんなは元の埋立にはい上つた。

その時、燃え上る火により、大きな邸宅も小さい長屋も何も彼も皆容赦なく炎の中に吞まれて行つた。手のつけようもなく只燃えくずれる建物を、ほうせんと見ているだけでなすすべもない。日頃、隣組でやってきた訓練も消火作業とてもこの猛火では全くのママごとにしか過ぎない。誰も彼も無言で堤防により掛つて、まんじりとも眠りもできずに一夜をすごした。

敵機は去っていた。夜が白みかけて、東の空に陽が上ると、まるで一晚の悪夢でも見た者の目覚めの様であつた。

太陽が昇ると又驚いた。兵隊さんがゴロゴロと地上に転がっている。眠っているのではない。馬が死んでいる。瓦れきと灰の中に死の臭気が鼻をつく。年寄りか若い人かも見分けのつかぬ女の人が、髪はチリチリに焼けて、胸も体もあらわに焼けたゞれた姿で、半死人の様になつてうめいている。さながら、ソドムゴモラの町に神の怒りの火が天から降つて焼かれた時も如此かと想像する程であつた。

それでも生命のある人はまだ幸いだ。僕はフト自分の足もとに目をやると、ゲートルに十円硬貨程の穴が、焼夷弾の破片か火の粉によつて焼けたものであるうと気がついた。

もし、ズボンをはいただけなら足を焼かれていたであろうが、守られていて足はどうもならなかつた。海水に濡れた膝から下のズボンや靴もブカブカになつていたけれど、全く見えない神のみ手に守られていたのだと知り、心から感謝を捧げたのである。

わが家に戻つて見たら、凡てはきれいに灰になつていた。何の形もないが、只それだと思われたのは、安全髪そりが曲りなりに無惨な姿で転つていた。持物は一切合切尽く灰にな

ってしまった。本当に見ゆる処の物はすべて暫らくであり、永遠に続くものは見えない神であり、生命の言である事をしみじみと教えられた。

「では、わたしたちは、何と言おうか、神の側に不正があるのか、断じてそうではない。神はモーセに言われた。「わたしは自分の憐もうと思う者を憐み、いつくしもうと思う者をいつくしむ。故にそれは人間の意志や努力によるのではなく只神の憐れみによるのである。」

(ロマ九・十四―十六)

神の一方的な憐みによる支えにより、弱い僕は守られて来た。そして今日があった。

ソドムとゴモラの町が、天からの火で焼かれた時、ロトはアブラハムの祈と、とりなしで救われた。主イエスの十字架によるとりなしがもし無ければ、今日の自分はあり得ないことであった。又、聖徒の篤き祈りが背後に捧げられていた事も、見のがす事はできない。

着のみ着の儘の裸同然の姿で、焼け落ちる大火の中から又魂の亡びから脱出して、主イエスにお逢いできた。只、恵む所の神のご意志が憐みとなって僕の上に注がれていた。

かくして迷い出んとした魂も主に立帰る事ができたのである。

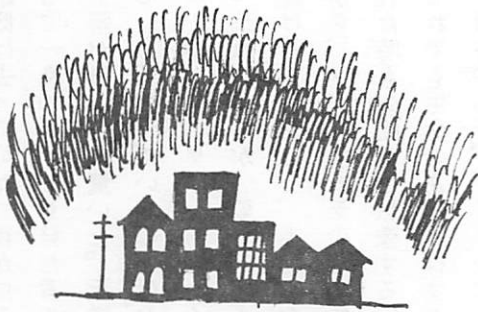
る。そして今日も亦同じように憐まれて……。

― 今から三十八年前の六月十九日 ― だ。

小学校一年の孫娘が、空襲の事について、みんなのおじいちゃんやおばあちゃん、体験した方に、話をきいて来るようにと、先生に言われて、わざわざやって来たので、早速話して聞かせたが、この幼い子にそれが理解できたかどうか？ピンと来ない話だろうなと思った。

数日後先生が、よく話を

をきいて呉れましたと礼を言われたとの事、その先生のお母様もやはり博多で、(奈良屋校出身、僕も又奈良屋校出身)、空襲に逢って箱崎の海岸に逃げて助かったとか。「良く似てましたね。」であった。



詩 二 題

伊規須 泰 子

” 季 節 ”

夏になると、ナツになる。

当り前のことだが、不思議な運行。

樹には蟬しぐれ

空には入道雲 気温は三〇度を越す。

当り前のことだが不思議な運行。

秋になると 秋風が吹く、

当り前のことだが、不思議な運行。

樹にはつくつくぼうし、

空にはうるこ雲、風はさわやか、

当り前のことだが、不思議な運行。

” カンシヤ ”

しゃべるのが、下手できらいなのに、

S・Sのご用をさせていたゞいている。

音感がないのに、

オルガンのご用をさせていたゞいている。

よりのまねば しゃべれない、

よりのばねば 弾けない

それ故、感謝があふれるのです。

恵みをおぼえて

大 口 和 子

還暦を過ぎし日に迎えて、一言お証しをさせていただきます。

大正十二年四月二十九日に生まれました私は、生れつきの視力障害者でございました。そして父を三才の時に失いました。私どもの家族（母と兄と妹の四人家族）を見かねて、城さんの奥様が母を教会に導いて下さいましたのが、現在の大濠公園教会でございます。

当時は浜の町キリスト伝道館として備えられてありまして、折滝先生をはじめ榎本先生、野村先生、鷹取先生（オルガニスト）が、路傍伝道等伝道に励んでおられました。小学一年生になっておりました私は、学校よりも教会へ行くほうが楽しみでございました。城さんのおば様は、しょっちゅう私達の家へご訪問下さいまして、聖書を読んで、祈って、讃美歌を歌って、なぐさめ励まして下さいました。博多の町を転々と引越しましたが、よくよくご訪問下さいました。そして戦時中には私達の家の近くに移り住まわれ、常に常に、かけとなり日向となって、お忙しい中から私どもを訪ねて励

まして導いて頂きました。

黒崎に参りましてからは、榎本先生ご夫妻様も、私ども家族の為に、どんなに真剣に祈って下さいましたことでしょうか。このようなすばらしい方々を通して、神様は深い深いご愛をもって、かよわい私達を、翼のかけでかくみ育てて下さいました。お蔭さまでいろんな艱難におつかりましても、信仰を失ってしまうことなく、今日に至らせて頂いております。感謝せずにはいられません。

現在も博多におられます城さんご夫妻様のお蔭様で私は無事に学校を卒業させて頂きまして、職業を身につけ、点字の聖書に、讃美歌に親しむことができますお恵みを、深く感謝しつつ味あわせて頂いております。

結婚いたしましたからは、兄と姉とを助け人として備えて頂きました。去る五年位前に私が失明いたしました後、現在の家に移り住みましてから二年と七ヶ月の長い間、岩井さんが木曜日の午后毎週おいで下さいまして、ホームヘルパーの仕事をして下さいまして、今もお私達の信仰生活を支えて頂いております。神様は、このように周囲のいろんな方々を通して、つまらない、か弱い私を憐れみ、山よりも高く、海よりも深いご愛をもって導いて下さいましたお恵みを、感謝

弟の証し（林 伊佐夫）

林 正二郎

せずにはいられません。特に我がまゝな私がカツとなりまして何ぞを致しますかわかりませんが、その都度み言葉を与え、み言葉を通してイライラをおさめ、心を静めて落着きを与えて下さいました。神様の御力によらなければ、決してカツとなった心を静めることができないことも体験させて頂きました。それは陰にあって私の為に祈って下さいました方々のおかげだと、深く深く感謝申し上げます。

「信仰の戦いを立派に戦い抜いて、永遠の生命を獲得しなさい」とのみ言葉に従って歩みたく願う者でございます。今後ともお祈りをよろしくお願いいたします。

七月二十五日に結婚式を挙げさせて頂くことになりました。皆様の長い間のお祈りと、多くのお力添えを心から感謝いたします。

四年数ヶ月にわたる父と子との生活を通して、神様がどんなに素晴らしいお方であるか、またそのお約束は真実で、身ぶるいする程に完璧なものであることなどを体得させて頂きました。

当時私は、大輔・まゆという四才と三才の息子・娘をかかえ、働きながら男手一つでこの二人を養育せねばならない立場にありました。この事は、人間的には不可能に近い、絶望的なものでした。

このような私の人生が一夜にして百八十度逆転させられたのは、エレミヤ書二九章十一節『わたしがあなたがたに對していただいている計画は、わたしが知っている。それは、災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものである』、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである』という、たった一つのみ言葉でした。

神様のみ言葉には力があり、命があります。私はこのみ言葉によって絶望的な日々から開放され、全く自由で、リラックした生活へと変えられたのです。

様々な試練の中にも、神様から与えられた喜びと確信がありました。それは、こんな私のためにイエス様がどんな大きな代価を払って愛して下さったか、その事を全生活を通して実感していたからです。

ヨブ記を読み、いつも勇気づけられました。自分もきっとヨブのようになる。その時がいつかは知らないけど、その時は必ず来ると信じていました。子供たちと毎日祈りました。そして折ったとおり、いえそれ以上の人が、実に不思議な導きで与えられました。

神様は目には見えませんが、確かにおられます。このお方に信頼する時、圧倒する程の完璧さで最善を成して下さいます。ですからもしためらっている人がいれば、「どうか一生涯の大決心をして信じて下さい。必ず信じたとおりになります」と、確信をもって申し上げたいと思います。

これから私たちはクリスチャンとして、キリストのかぐわしい香りを放つ家庭を築いて行きたいと願っております。大輔とまゆの間に、れい子ちゃんという可愛い女の子が、もう

すぐ兄妹として迎えられます。大輔はいま三年生、れい子・まゆ共に二年生です。

今後は一家五人が、どんな中にあっても、イエス様中心の家庭でありたいと願います。また、家庭礼拝を大切にして行きたいと思えます。

吉川家・唄野家の皆様にご身近かに接する事で、いろいろな面で学ばせて頂きました。その素晴らしいクリスチャンとしての歩みは、私たち家庭の模範として行きたいと思っております。

最後に、主婦業をやった感じたことは山程あります。親の心の状態がそのまま子供に反映して態度に表われること。また、今晚のおかずを何にするかで悩むのは、企業の利益をいかにして上げるかで悩むのに匹敵する程のものであることなど……………。

私はいま、大輔とまゆに向って、「お父さんをここまで精いっぱい助けてくれて本当に有難う」と心からお礼を言いたい気持ちでいっぱいです。

皆様方のお祈りの助けを心から感謝しています。み言葉には魂を救う力があり、祈りは大きな力です。今まで様々な試練を通ることによってこの事を確信することができました。

私たち親子はいま、神様によって幸いな者となして頂きました。救われる以前の苦しみがうそのようです。私はいま、ひれふす思いで神様に向い、満腔の感謝を捧げております。

七月十日

林 伊佐夫

弟伊佐夫を、ここまでみ手に支え憐れんで下さった神様は、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。」（使十六・三一）の御言葉どおりにして下さいました。

弟のこの数年間の生活を見て、一人の者がまことの神様に立ち返って信ずることによって、時が満ちたならば、次々と救いかつ恵んで下さることを、また神様は生きておられ、祈れば答えて下さると云うことを私自身もう一度はつきり教えられました。

靈感賦五三番の

昨日も今日もエスは いつまでも

おなじ主なりとの みことばは

信ずる者には、 さかえある

いともうるわしき おとずれぞ

この讚美を自然と口ずさむ昨今です。

本当に感謝でいっぱいです。



救に至る道

野村 美恵子

「汝はきょう我と共にパラダイスにあるべし」

(ルカ二十三・四三)

あの恐ろしい忌まわしい戦争は終わった。

「もう空襲はない」と一瞬ほっとした喜びを感じました。

しかし、生も死もたゞたゞ国の為だとひたすら青春を戦争の中に過ごした私達世代は、これからどう生きるのだろうか。当時のいるいるなデマの飛びかうなかで、不安と恐れの日々を送っていました。

そんな時私は真実ということについて考えさせられました。純粹な気持でひた走った戦争の日々は、長く苦しい緊張の連続でした。張りつめた弓づるが切れてしまった空しさ、そして疲れきった心には何の望みもありません。私は思いました。自分の心に正直に生きる事が真実なのかも知れない。「これからは誰にも頼らず、自分の正しいと思っただ道を歩こう。」と思い、そのように歩きました。

その道はとてわけわしい道でした。自らを頼み、己に負けてはならないと突っ張って必死で歩いたのです。けれど遂に

くず折れる日が来ました。それは神様の御手が働いて下さった幸の第一歩だったと思います。

その頃から私は、信仰という事を考え始めました。けれどもそのためにどうすればよいのか全くわかりません。お寺も神社も私を慰め救いに到るには遠い感じでした。「具体的にどうすれば良いのでしょうか」とそんな心が働いている頃、主人との結婚の話が始まりました。私は早速教会の門をくぐらせて頂けたのです。婚約中の二ヶ月間、礼拝・夕拝・祈禱会に出席させて頂きました。

そして私に最初に与えられたみことばが、表題のみことばだったので。主人が赤い短冊にきれいな字で書いてくれたのですが、私にはみことばであることさえ解らなかつたのです。集会には出席していてもまだまだわかっついていなかったからです。それでもぎすぎすした私の心になんとも云えない平安が与えられました。

二ヶ月経った頃、榎本先生に個人伝道をして頂いて、私はイエス様に従う事を決心し、昭和二十五年十月十五日(日曜日)結婚式を行って頂きました。礼拝を守り、各集会を待ち遠しい気持で迎える日々は何と充実した生活でしょうか。今まで私の知らなかつた幸がありました。

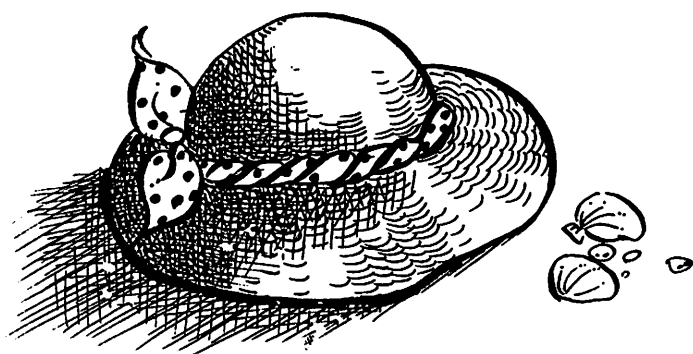
そうして時が経つうち家族が増え、急速なインフレに生活が伴わず、弱い子供達は次々と病氣ばかりする。いろいろな問題は起ってくる……。信仰の弱い私は目の前の出来事が大きな岩の様にのしかゝって、心でつぶやく事が多くなりまして。「人はパンだけで生きるのではなく……」とありますが、パンがなくてどうして生きる事ができるでしょうかとふくれ面をしてしまいます。こんなに苦労するなら信仰なんか……とさえ考えた事もありました。でもやはり神様抜きでは居れません。ほんとに浮き沈みする私でした。人を見ては、あの方は環境が良いからと羨んでみたり、こんな思を持つ自分がみじめで情けなくなったり、まことに恥かしい私でした。

主の御前に顔が上げられない様な私に、ある日の礼拝だったと思います。表題のメッセージが私の心にはっきり印せられました。ルカ二三章によって深く迫って下さいました。主イエスを十字架につけよと叫んだ群集の中の一人は私である。神様は認めているが、神様に信頼しないで自分が自分が己を信じて歩いていて罪、主に従うと決心はしたものの、ほんとにぼんやりした信仰でここまで来てしまって、まだこの世に深く関わっていた私は、罪について非常に甘い考えしか持っています。三本の十字架が立てられたその一つに

は私が掛けられるはずだったと教えられた時、私は涙して罪の深さを悔い、主に従う決意を新らしくさせられました。私は許して頂けるでしょうかと説教に聞き入っている時、四十節〜四十三節、もう一人の罪人は自分の罪を認め、「そして云った『イエスよあなたが御国の権威をもっておいでになる時はわたしを思い出して下さい』。イエスは云われた『よく云っておくが、あなたはきょうわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。』」この会話は十字架の上で語られた。死を前にした最も苦しい中で主はお約束なさったのです。問題がどんなに苦しきと、罪が深くあると、主と共に居て下さる所がパラダイスだった。主はよく云っておく、と念をおしておっしゃっている。私はあれが苦しい、これが大変だと云っていたことが問題でなくなった様に思えました。主は私の罪のために十字架に死んで下さった。私は罪許され、きょう主と共にパラダイスに生きる事をはっきり受け入れさせて頂き感謝であふれました。そして三十年四月十日パプテスマを受けさせて頂きました。

私は未信者であったのに信者である主人と結婚する事によって救を与えて頂き、ここに到るまで、榎本先生はじめ聖徒方の厚い祈りに支えられ、又、信仰の弱さを直接見せられる

主人はどんなに心をいためて祈りつづけた事かと思いません。今ふり返りながら主にあつて全てを感謝し、心に記念の石塚を立てさせて頂きました。



「みよ、今は恵みの時」

上 島 南 明

「みよ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」

(コリント②六・二)

昭和五十八年の新年聖会は、三つの標語で非常に恵まれました。榎本先生を通して「今」という時を心に強く示され、大いなる感謝と喜びをもって新年を迎えさせて頂きました。

一月九日二十三時半、突然、腰痛・背部痛・下腹部痛におわれ、息ができなくなりました。妻がびっくりして、「お父さん、大丈夫ですか？」と背中をさすってくれているのですが、返事も出さず、身体を少しでも動かすこともできず、たど、ウンウンと声にもならない声で苦しみもだえている始末でした。二十分位して、やっと声がでるようになり、「こんな時間だけど、堤先生へ電話して、状態を説明してくれ」と妻に頼みました。(教会員でいらっしゃる堤先生をすぐに思い出し、思わず頼んでしまったのです。) 堤先生は「すぐに病院へいらっしゃい。」と親切に返事して下さり、少し痛みが柔らぎましたので、妻が同行するというのが幼児がいるからと言って、一人でタクシーに乗って参りました。

先生は、私が戸畑に住んでいるのをご存知なく、「遅いなあ」と案じながら、玄関にて待っていて下さいました。すぐに診断、レントゲンをとり、左尿道結石と診断されました。「上島さん、とても大きな結石ですよ。手術が必要です。」と言われました。私は昭和四十三年に同じ病気になり、点滴だけで自然摘出していますので、「先生、まず点滴して下さい。」とお願いました。先生は「それでは、まず点滴をしましょう。しかし今までの例を見てもこれ程大きな結石は動いたことはありません。もし動けば奇蹟ですね。」と言われましたが、点滴を始めることにしました。

私は毎日、手術しないで摘出できることのみお祈りしましたが、一月二十日にレントゲンを見て、堤先生は、

「上島さん、結石は全然動いていません。そのうえ、左の腎臓が二倍位腫れて、これ以上待つと腎臓にも影響しますから、一月二十四日入院、一月二十六日手術とします。結石の位置からみて、背中から腹部へかけての切開手術となりましょう。」と話されました。

「上島さん、今年のメッセージ『今は恵みの時、今は救いの日である。』ですね。そう思われますか？」
と問われますので、私はうつろに

「はい、そう思います。」

と答えはしましたが、背中の筋肉を切るということに不安を覚え、切りたくないと思わず心の中で叫んでしまいました。しかし、点滴で自然に押し流す際、尿管の一番狭い所を結石が通過する際の痛みもよく覚えており、麻薬に近い薬を注射しても、二日二晩苦しみぬいた経験を思いだし、何故こんな病気になるのだらうと、ついつい「病気」に目がいつてしまい、悪魔にささやかれる始末でした。その時、不思議なように、説教中の榎本先生の、身体の中からほとばしるような、「事情境遇をみてはいけない。主を見上げなさい。」の声が聞えました。

入院前日一月二十三日の礼拝メッセージは野村先生の、「われらの助けは、天地を造られた主のみ名にある。」（詩篇一二四・八）でした。大いに力づけられ、平安を与えられ二十四日入院致しましたが、それでも「背中を切りたくない」との不安が襲って来ます。もう少しでも、結石が動いて下にさがれば、腹部だけの切開で済むのではないかと思い、「主よ、どうぞ腹部だけ切って石を取除いて下さい」とひたすら祈るのでした。しかしこの時、不思議なように、新年聖会の二つの標語を示されました。「今はエホバの働き給うべき時

なり。」(詩篇一一九・一二六)と「今はエホバを求むべき時なり。」(ホセア一〇・一二)

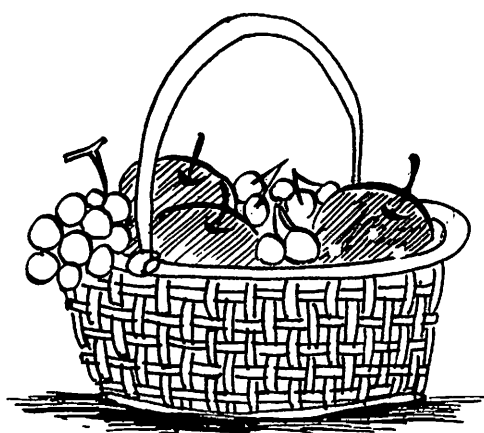
私は自分の願いのみ神様に押しつけ、全くゆだねて明け渡すことができない自分を示され、「主よ、今、全く悔い改めます。どうぞ愚かな者を憐れんで下さい。全て主のみ手にゆだねます。あなたの御血潮ゆえに、この下僕の罪と病いをおいやし下さい。」と心からの祈りをさせて頂きますと、全き平安が与えられました。

翌朝、一月九日以来全然痛まなかつた痛みが急に始まりました。結石が動きだしたのです。高木先生、野村先生が見舞に來て下さり、熱心にお祈りして下さいました。痛みは一日中シクシクと続きましたが、夜には十分な眠りを与えられました。

翌朝八時にレントゲンを撮り、九時に堤先生が病室へ來られ、「レントゲンの結果、全然動かなかった結石が、一日で十五センチも下がりました。手術は腹部切開のみとします。」と告げられました。神様の御業に驚き、「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事をあなたに示す。」(エレミヤ三十三―三節)を示され、心からの感謝をしました。

手術前、堤先生にお祈りをして頂き、二時間後、病室へ戻りました。

堤先生の手術後の報告では、「昨日一日で結石が十五センチ下がり、その上に、もう少しでも下がり過ぎると尿管の一番狭いところへ入り、その場所は、動脈と交差した所で、全身麻酔しなくてはならず、神様が一番良い所へ移し、とどめて下さいました。」と話されました。摘出した結石を見せて



頂き、こんなに大きな結石であったかと驚くばかりでした。その上に、先端部がとがっており、よく尿管を突き破らなかつたなあと思いました。入院前日野村先生に頂いたヨブ四十二章五―六節「わたしはあなたの事を耳で聞いていま

したが、今はわたしの目であなたを拜見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います。」の御言葉
を涙して受け容れさせて頂きました。

麻醒が切れて、二日間痛みました。わずか下腹部を十センチ位しか切っていないのに、痛みで苦しんでいる自分を見て、イエス様の十字架上の尊い御血潮、一方的な全き御愛に心からの感謝と喜びに満たされました。

その後の回復は非常に早く、手術後四日目の礼拝を堤先生付添のもとに守れましたことは、思いもかけない喜びでした。

抜糸の際、堤先生が「上島さん、ありがとう。貴方がよくなってくれることが、私の一番の喜びです。」と言って頂いた言葉は、今でも私の耳に残っています。恵みと平安に満たされた日々を過ごさせて頂き、二月十六日退院致しました。堤先生の手厚い看護、榎本先生・教会員の方々の熱い折り、家族の心からの愛情に感謝でいっぱいでした。

「みよ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である。」の御言葉通りでした。

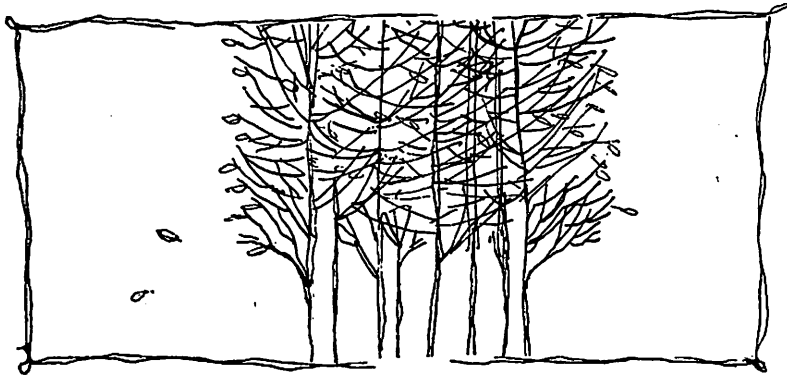
編集後記

○ 今回もまた沢山の投稿ありがとうございました。数が多
いということは、実りの季節に多くの収穫を得たようで、
編集者にとっても大いなる喜びであります。

○ 「そのすべての恵を心にとめよ（忘るるなかれー文語訳）」
（詩一〇三・二）とありますが、私共は、折角の恵みの収
穫も時間と共に忘却のかなたに押し流されてしまいます。

○ ぜひ、その時、その気持を、その感謝を書きとめて下さ
い。「巧みな知恵の言葉によらないで」（コリント①二・
四）そのままを、人が見る事を意識しないで書いて下さい。
それが一番すばらしい文章です。

○ それを次回のおどうの木にご投稿下さい。きっとそれは
三十倍六十倍となって、多くの人に恵みを分け与えること
になると思いますから。



昭和59年4月22日発行

編集者　ぶどうの木委員会

発行者　基督伝道隊

榎本利三郎

印刷所　トンボ印刷所

発行所　基督伝道隊

福岡大濠公園教会

八幡前田教会

北九州市八幡東区前田1-10-3